

鶴翔会

平成30年4月1日発行 2018年 124号

岡山医学同窓会報



関 正次 教授

欧州の古い大学はみるその古いことを誇りとしている。一は伝統に強い階級力があるからである。私ども、先生と弟子、先輩と後輩、よく融和して互いに助け長しあい、ますますよい伝統を作り上げようではないか。
関 正次



研究中の関教授

関教授の最終講義



講義風景



日本組織学記録 創刊号表紙

表紙の写真



せき まさし
関 正次 教授 (1894~1965)

明治27年（1894）岡山市生まれ。大正5年岡山医学専門学校卒業。卒業と同時に解剖学教室上坂教授の門下生となる。外科医になる基礎として解剖学を学ぶつもりであったが、上坂教授が力を入れていた細胞の物理化学に興味を持つようになった。大正14年、独、仏に留学し、メレンドルフ教授とポリカル教授に師事した。

研究は、電荷の問題から始まり、組織の染色理論、生体染色、渡銀法、超構密度、リポイド染色など一連の研究に発展し、1930年代に多くの論文を独仏の雑誌に発表し、「日本岡山のSeki」の名を広く海外に高からしめ、海外の研究者の著書に数多く引用されている。昭和26年初版の「組織検査法と物理化学」は研究の集大成である。また、戦後、組織化学に興味を持ち、電子顕微鏡の手法も取り入れて膠原線維の構造の研究したのも物理化学的な基礎に基づくものであった。

創刊の辞

今までに日本には組織学専門の雑誌がなかった。それがあつたら、新學とその關係方面は現在よりもなほよほど進んでゐたであらう。ここに創刊せられる日本組織学記録 Archivum histologicum japonicum には、日本の諸大學の教室と諸研究所でなされる人と動物の細胞と組織に關する記述と實驗の仕事のうち、優秀で、新學に寄與すること多かるべきもののみが載せられる。

戦後四年半、世はまだ窮乏の時を脱せず、この種の雑誌の刊行には大なる困難があるけれども、創刊者自身はその立場と年齢の關係上、今が着手の最好期であることを思ひ、敢へてこれを企圖する。

願はくは同學諸君の御協力により本記録の刊行が永久に續けられ、しかもその内容が常に世界的水準に止まることを。

昭和25年2月1日

岡山にて 創刊者

日本組織学記録 創刊の辞

第51回日本解剖学会総会は関教授が会頭として準備万端整えたが、戦時下で情勢悪化のため延期のやむなきに至り終戦を迎えた。その間、岡山市内と教室は空襲により焼失した。しかし、昭和21年8月、東京帝国大学に会場を移し、改めて関教授が会頭として戦後初の記念すべき総会を開催したのであった。

仕事のほか何一つ趣味を持たなかつた教授は、昭和25年に創刊された「日本組織学記録」の編集を続け、逝去の十日ほど前まで、この編集に没頭し病床でも絶えず口にしていたという。まさに生命をかけた仕事であった。遺志により藤田恒夫助教授が受け継ぎ、現在は新潟大学に移り、Archives of Histology and Cytologyとして国際的な雑誌に成長している。

（参考：岡山大学医学部百年史）

巻頭言	1
鶴翔会会長（医学部長） 大塚愛二	
ご挨拶	2
退任 岩月啓氏 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科運動器外傷学講座教授就任 野田知之	
謹 弔	4
故 中山睿一 名誉教授 追悼 鶴殿平一郎	
会員動向	5
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など） 学位授与 平成29年度（平成30年3月）岡山大学医学部医学科卒業生 会員訃報	
会員のこえ	9
母校の医学教育リノベーションへの期待 池田重政 編集者への手紙—鶴翔会報、会費について 坪井修平	
会員の近況	13
ヘルスシステム統合科学研究科 松尾俊彦 快挙 徳永常登先生—LAの赤絨毯を闊歩— 坪井修平	
同期会だより	16
卒後66年のクラス会報告 奥村修三 昭和28年卒のクラス会 矢部芳郎 平成29年度 みとう会（昭和30年卒同窓会） 山本泰久 参仁会卒後60年記念同期会 林 慎一郎 昭和34年卒業「ねぶち会」同窓会台風21号を前に 瀧谷泰博 昭和61年入学&平成4年卒業生同期会 廣畑 聡	
支部だより	20
今治支部総会の報告 松野 剛 平成29年度鶴翔会 山口県支部総会 亀井治人 平成29年度鶴翔会東海支部会報告 川崎章二 平成29年度鶴翔会福山支部大会 藤岡正浩 平成29年度「鶴翔会」松山支部会総会並びに特別講演会報告 関川孝司 第51回鶴翔会新居浜支部報告 渡邊雄一 H29年度鶴翔会近畿総支部報告 野上浩寛 兵庫県鶴翔会神戸支部2月総会報告 三輪恕昭 平成30年度兵庫県鶴翔会西播支部総会報告 山本信玄	
学生だより	28
系統解剖学実習の感想 青景珠実 解剖学実習 林田慎太郎 系統解剖実習を通じて学んだこと 福坂尊之	

新聞より	30
岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2017.9～2018.3）	
歴史の広場	34
岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語② 生田安宅〈前編〉 万城あき	
岡山大学附属図書館医学部分館・資料室物語③ 生田安宅〈後編〉 万城あき	
関連病院だより	40
社会医療法人製鉄記念広畑病院 橘 史朗	
社会医療法人三栄会ツカザキ病院 夫 由彦	
医療法人 重仁「まるがめ医療センター」 青木伸弘	
海外だより	44
2017年度 韓国整形外科学会－日本整形外科学会トラベリングフェロー体験記 古松毅之	
教室だより	45
海外への留学生一覧	
岡山より	79
岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会総会のご案内 ご寄附いただきました	
平成29年度 Student Doctor 認定式	
平成29年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式	
第112回 医師国家試験 合格者状況	
平成29年度卒年次別会費納入状況	
おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！	
（公財）岡山医学振興会より 難波正義	
岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧	
鶴翔会会報 投稿内規	
編集後記	88

巻 頭 言

鶴翔会会長（医学部長） 大塚 愛 二

鶴翔会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

さて、岡山大学では、槇野学長の新体制のもと、1年が経過しました。スーパーグローバル大学創生支援事業も4年目の中間評価を終え、伸びている部分もある一方、課題も見えているというところです。さらなる拡充に向けて加速することが求められています。また、昨年末、SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）について大学のこれまでの取り組みが評価され、国立大学では唯一岡山大学が第1回「ジャパンSDGsアワード」の特別賞「SDGsパートナーシップ賞」を受賞しました。

ところで、岡山大学附属図書館の池田家文庫には、池田家の様々な文書が保存されています。その中で医学館にまつわるものとして、創立の3年前に書かれた医学館の企画書ともいえる「医学館存意書」（1867年）というのがあります。その中にある「医学館永久愚考」には「医学館永久ノ基本ハ先ツ良師ヲ選挙シテ教授ヲ命スルニ在リ。次ハ生徒ヲ集ルニ在リ、上ハ藩医ノ子弟ヨリ下ハ市医村医ノ子ニ至ル迄令ヲ下シテ入学セシム可シ。生徒学業成熟シテ治術行レ声明籍甚ナル者ハ見身ニ俸米ヲ賜ヒ、或ハ召出シテ格禄ヲ賜ルベシ。教

授欠ルトキハ、彼ノ声明籍甚生ノ中ニ於テ最秀タル者ヲ挙テ教授トス可シ。」とあります。平たく言うと、良い先生を集め、良い学生を集め、優秀な学生を育成して将来の教授候補とする、ということでしょう。ここには、我々の先輩たちが譲らずに守ってきたことの本質があり、まさに「永久」＝「持続可能」な人財育成モデルであります。これは今後も私たち岡山大学の基本方針であり続けることでしょう。

社会における医療というピースは、医学の分野だけのものではなく、様々な地域社会や国内外の関係にも及びます。そういう視点で振り返ると地域の方々をはじめ多くの人々に支えられてきたことが理解できます。教育・研究・診療に多くの種が蒔かれ、育ってきております。目に見える形の実を結んだものもありますが、さらに力を尽くす必要性のあるものが数多くあります。特に、人財育成に関わる取り組みは、持続性を求められます。そういう中での150周年ですので、これを単なるお祭りに終わらせることなく、次の150年に続く節目としたいと思います。鶴翔会員の皆様のお一層のご支援をお願い申し上げます。

ご挨拶

岩月啓氏教授 ご退任



ご挨拶

2018年3月末で、岡山大学を定年退任いたします。2001年(平成13年)に岡山大学に着任して以来、17年間の長きにわたり活躍の機会と、同窓会の皆様のご支援をいただきありがとうございます。もとより凡庸そのものの私では、ご期待に応えられ

なかった点が多く、忸怩たる思いがありますが、無事、定年退職を迎えることになりました。

ちょうど、大学院大学への移行時期に岡山へ着任し、新臨床研修制度の開始による医局制度の崩壊、専門医研修プログラムの影響によって同門意識が希薄になってきた時代でした。その中で、岡山大学皮膚科学教室の改組50周年(2010年)と教室開講100周年(2013年)を迎え、教室の歴史的資料を収集し、記念式典を開催する過程で、教室員の結束を固める良い機会になりました。両式典の事務局長を務めてくれた山崎 修先生には心から感謝申し上げます。在職中に、第25回日本皮膚悪性腫瘍学会(2009年)、第113回日本皮膚科学会総会(2014年)、第42回日本研究皮膚科学会(2015年)等の主要学会を成功裡に主催できたことは光栄でした。事務局長の青山裕美先生、森実 真先生をはじめとする教室員の皆さんをこの時ほど誇りに思ったことはありません。

岡山大学病院にあっては、榎野博史病院長のもとで副病院長を拝命し、検査部、医療安全管理部、感染制御部、臨床工学部など、病院のさまざまな部署の皆さんと一緒に仕事できたことは私のかけがえのない思い出です。研究面では、「稀少難治性皮膚疾患に関する調査研究班」の研究代表者というやりがいのある役割をいただきました。また、皮膚がん治療が新展開を迎える時代になり、2015年には院内および関連施設と免疫学教室の協力を得て、メラノーマセンターを設立いたしました。皮膚リンパ腫の診療拠点としても機能し、濱田利久先生が臨床研究を推進してくれました。中国・四国地区の皮膚がん診療拠点として、今後も診療と研

究、教育、新医療開発の面で持続可能な発展が期待されます。

他学から着任した私を陰ながら見守り、支えていただいた荒田次郎前教授の御恩は忘れられません。末筆ながら、岡山大学ますますのご発展と、同窓会の皆様のご健勝を祈念して退任の挨拶といたします。

略歴

- 昭和53年3月 北海道大学医学部医学科 卒業
- 昭和53年6月 浜松医科大学医学部附属病院皮膚科医員(研修医)
- 昭和54年4月 浜松医科大学医学部附属病院皮膚科助手
- 昭和56年5月 浜松医科大学医学部皮膚科学講座 助手
リヨン(仏国)、INSERM 第209部門(主任: Jean Thivolet教授) 研究員(昭和59年6月-昭和60年3月)
- 平成3年2月 浜松医科大学医学部附属病院皮膚科講師
- 平成4年7月 福島県立医科大学附属病院皮膚科 講師
- 平成13年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科病態制御科学(皮膚・粘膜・結合織学) 教授
- 平成20年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚科学分野 教授
現在に至る。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科運動器外傷学講座教授に野田知之氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度平成30年4月1日付けで、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科運動器外傷学講座 教授を拝命いたしました。本講座は運動器外傷に対する治療法の研究・開

発を行い国内の運動器外傷に関する教育を牽引することを目的として、平成28年4月に公益社団法人岡山西

大寺病院の寄付により設立された寄付講座で、これまでの2年間私は准教授として活動して参りました。この度、教授の大役を拝命することとなり身の引き締まる思いを強く感じております。

私は平成4年に岡山大学を卒業し、井上一名誉教授が主宰される整形外科学教室に入局いたしました。井上名誉教授からは変形性膝関節症に対する脛骨骨切り術後の人工膝関節置換術の解析という研究テーマを頂き、学位を取得しました。関連諸病院では整形外科全般にわたり研修しましたが、特に骨折を中心とする整形外傷に強く興味を惹かれ、ドイツでの臨床研修などこの分野で研鑽を積んで参りました。骨折を含めた外傷手術は本邦の全整形外科手術の約5割とも言われ非常に重要な分野ですが、多くの大学整形外科教室では変性疾患の研究と治療に注力がなされ整形外傷は軽視される傾向にあります。岡山大学整形外科は開講以来、骨折治療学に対する研究をテーマとして取り上げ、外傷グループを診療班の一つとして脈々と受け継いでこの分野をリードしています。関連病院との密な連携に交えて、救急部、形成外科のご協力も仰いで、骨盤・寛骨臼骨折などの四肢重度外傷や難治性偽関節などに対して系統的治療と研究、さらには人材育成を行ってきており、私もこれを継承、さらに発展させる所存です。対外的には現在、日本骨折治療学会国際委員会担当理事の責も担っており、本邦のこの分野における発展や国際化に寄与すべく尽力して参りたいと考えております。

末筆ではございますが、これまでご指導いただきました先生方に心より感謝申し上げるとともに、同窓の先生方におかれましては今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略 歴

- 平成4年3月 岡山大学医学部医学科卒業
- 平成4年4月 岡山大学医学部附属病院整形外科教室
入局
- 平成4年6月 岡山労災病院整形外科研修医
- 平成6年4月 厚生年金高知リハビリテーション病院
整形外科医員
- 平成9年1月 香川県立中央病院整形外科医員
- 平成11年4月 赤穂中央病院整形外科医長
- 平成15年2月 ドイツ・フライブルグ大学フェロー
シップ研修
- 平成15年4月 岡山済生会総合病院整形外科医長
- 平成18年1月 岡山大学医学部・歯学部附属病院医員
(整形外科)

- 平成18年4月 岡山大学医学部・歯学部附属病院助手
(整形外科)
- 平成19年4月 岡山大学医学部・歯学部附属病院助教
(整形外科)
- 平成21年4月 岡山大学病院助教 (整形外科)
- 平成22年9月 岡山大学病院講師 (整形外科)
- 平成28年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
運動器外傷学講座准教授
- 平成30年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
運動器外傷学講座教授



謹 弔

故 中山睿一 名誉教授 追悼

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 免疫学分野教授
鵜殿 平一郎

平成29年7月20日、中山睿一 名誉教授（前免疫学分野教授）が急逝されました。あまりに耐え難い、突然の悲報により、関係者一同、呆然自失の状態に陥りました。しかし、難波正義名誉教授はじめ諸先輩先生の励ましとご指導を賜り、去る11月26日、倉敷ロイヤルアートホテルにて川崎医科大学教授、岡 三喜男 先生を発起人代表として「追悼記念 がん免疫シンポジウム」、題して「中山睿一先生のごひと・科学・がん免疫」が無事、開催されましたこと、謹んでご報告申し上げます。シンポジウムにご登壇いただきました6名の先生方のお名前とご講演内容につきましては、紙幅の都合上割愛させていただきますが、故人の、正にがん免疫研究に捧げ尽くしたその生涯が、時空を超えて鮮明に蘇る素晴らしい内容でありましたことを申し添えさせていただきます。

科学に生き、科学を愛し、科学を抱き去り逝かれた中山先生のお人柄を偲び、かつてご縁のあった岡山大学、川崎学園、大阪成人病センター、長崎大学、北海道大学の諸先生およびご友人、製薬企業の方々、と全国から多くの方のご参加をいただき、講演会会場は満席となりました。1970年代後半、ニューヨークのメモリアル・スローン・ケタリングがんセンター時代の苦難と成功の思い出に始まり、帰国後の研究者および教

育者としての歩みと逸話、秘話を交えての、感動と熱気と笑いに包まれた、正に故人を偲ぶに相応しい会となり得ましたこと、改めてご関係者の皆様方に厚く御礼申し上げる次第です。会終了時、ご列席賜りました中山先生の奥様から「お陰で私の知らない主人の一面が大変よくわかりました」とお礼の言葉を頂戴し、幾分、安堵したことを覚えております。

シンポジウム終了後は、郷土料理「竹の子」（倉敷市阿知）にて懇談会が開催され、これまた全国より実に大勢の方にお集まりいただき、会場はシンポジウムの時以上に熱気を帯びておりました。お酒の力も加わり、「想い出は止まらない」という表現がぴったりの懇談会でした。中山先生が多くの方に愛されていたことを再確認することができました。懐かしい先生方との再会と、これを機に新たにご縁が繋がる、あるいはさらにご縁が深まるといった先生方も多数おられました。目には見えずとも、日本酒の杯を口に運びながら笑う中山先生、その静かな口調で今にも語りかけてくるような錯覚に襲われた人は私だけではなかったと思います。

中山先生は他界される直前まで、論文を読み、執筆し、実験のアドバイスをするなど大変お忙しくされておりました。がん免疫研究の最前線に立ち続け、さらなる道を切り拓こうと奮闘し、会うたび「川崎で大発見したよ」と笑顔で話をする、紛れもない現役の研究者でした。学者としての矜持、プライド、使命感と美学、その一方でユーモアと他人を包み込む優しさを持ち合わせた、実に懐の深い先生でした。今頃はきっと、敬愛して止まなかった故Lloyd Old先生と尽きないサイエンスの話をし、時々には飛行機を飛ばして大空を仰いでおられるのでしょうか。その光に包まれたお姿が見えるかのようです。これまでの長きに渡るご指導に感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



会 員 動 向



受 章

- 瑞宝中綬章 (昭39) 高 屋 憲 一
- 〃 (会員) 長 尾 卓 夫
- 旭日双光章 (昭42) 藤 田 洽 二
- 日本医師会最高優功賞 (会員) 岡 林 弘 毅
- 〃 (会員) 寺 岡 暉
- 日本医師会優功賞 (昭40) 石 川 紘
- 〃 (昭47) 菅 波 茂
- 平成29年度国民健康保険関係功労者厚生労働大臣表彰 (昭52) 橋 詰 博 行
- 平成29年度全国国民健康保険診療施設協議会会長賞 (昭56) 菅 原 英 次
- 平成29年度労働基準行政関係功労者厚生労働大臣表彰 (昭61) 片 山 伸 二
- 平成29年度岡山県警察本部長感謝状 (昭34) 角 南 義 文
- 〃 (昭44) 松 山 正 春
- 〃 (昭55) 丁 野 真 太 郎
- 〃 (会員) 森 下 紀 夫
- 〃 (会員) 鶴 見 尚 和
- 〃 (会員) 松 木 俊 哉
- 平成29年度岡山県保健衛生功労者表彰
- 岡山県知事表彰 (公衆衛生) (昭35) 大 森 拓
- 〃 (昭39) 木 村 穂 積
- 〃 (昭46) 森 本 允 裕
- 〃 (昭48) 難 波 晃
- 〃 (昭48) 原 田 寛
- 〃 (昭50) 西 井 保 行
- 〃 (会員) 熊 代 修
- 〃 (会員) 近 光 利 樹
- 平成29年度岡山県保健衛生功労者表彰
- 岡山県知事表彰 (へき地医療) (会員) 稲 垣 登 稔

平成29年度岡山県保健衛生功労者表彰

- 岡山県知事表彰 (地域医療) (昭44) 多 田 廣 嗣
- 〃 (昭44) 松 山 正 春
- 〃 (昭46) 田 淵 和 久

平成29年度岡山県保健衛生功労者表彰

- 岡山県知事表彰 (救急医療) (昭49) 山 本 和 秀

平成29年度岡山県保健衛生功労者表彰

- 岡山県保健福祉部長表彰 (公衆衛生)
- (昭41) 星 合 清 輝
- 〃 (昭42) 林 洋 光
- 〃 (昭54) 大田原 保 幸
- 〃 (昭54) 藤 井 孝 治
- 〃 (会員) 大 滝 俊 宏

平成29年度岡山県教育関係功労者表彰

- (昭41) 小 田 洸
- 〃 (昭47) 吉 田 英 紀
- 〃 (昭49) 藤 原 基 正
- 〃 (昭50) 浅 野 太 郎
- 〃 (昭51) 三 戸 敏 正
- 〃 (昭51) 矢 部 英 幸
- 〃 (会員) 江 口 晃 二
- 〃 (会員) 黒 田 正 規
- 〃 (会員) 西 原 浩 美
- 〃 (会員) 長 谷 川 賢 也
- 〃 (会員) 渡 辺 博 史

平成29年度岡山県精神保健福祉事業功労者表彰岡山県知事表彰

- (昭54) 吉 村 友 江
- 平成29年度岡山県精神保健福祉事業功労者表彰岡山県保健福祉部長表彰 (昭54) 森 本 清
- 岡山市医師会功労賞 (昭44) 中 川 昌 次 郎
- (昭49) 森 田 潔

平成29年度岡山県医師会学術奨励賞

- (平20) 竹 内 英 実
- 〃 (大学院生) 定 平 卓 也

このたびの受賞に対し、会員一同心からお喜び申し上げます。今後益々の御健勝をお祈り致します。

※会員の方が各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

医学部・病院関係

定年退職

- 細胞生理学 松 井 秀 樹
- 皮膚科学 岩 月 啓 氏

教授就任

運動器外傷学

野田 知之

准教授就任

IVRセンター

馬場 健児

血液・腫瘍・呼吸器内科学

松岡 賢市

産科・婦人科学

中村 圭一郎

周産母子センター

鎌田 泰彦

講師就任

ジェンダーセンター

松本 洋輔

薬理学

和氣 秀徳

呼吸器・アレルギー内科

大橋 圭明

低侵襲治療センター

岸本 浩行

高齢者救急医療学講座

万代 康弘

呼吸器・アレルギー内科

市原 英基

皮膚科

森実 真

産科婦人科

早田 桂

転出

岡山労災病院

金廣 有彦

(血液・腫瘍・呼吸器内科学)

川崎医科大学

佐藤 健治

(麻酔・蘇生学)

岡山市立市民病院

佃 和憲

(低侵襲治療センター)

関連病院関係

入会

製鉄記念広畑病院 (兵庫県)

ツカザキ病院 (兵庫県)

まるがめ医療センター (香川県)

名称変更

旭ヶ丘病院 (岡山県) → 淳風会ロングライフホスピタル

児島市立市民病院 (岡山県) → 倉敷市立市民病院

退会

多可赤十字病院 (兵庫県)

学位授与

博士

平成29年9月29日 (甲) (医歯薬学総合研究科)

安井 陽子

皮膚科学

堀川 雄平

泌尿器病態学

甲斐 誠二

泌尿器病態学

本多 宣裕

血液・腫瘍・呼吸器内科学

三好 章仁

循環器内科学

大道 亮太郎

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

竹井 大介

消化器・肝臓内科学

鳥井 章子

腎・免疫・内分泌代謝内科学

祇園 由佳

病理学 (腫瘍病理)

浅野 豪

血液・腫瘍・呼吸器内科学

工藤 健一郎

血液・腫瘍・呼吸器内科学

吉川 明良

臨床薬理学

小幡 賢吾

救急医学

荒田 夕佳

腎・免疫・内分泌代謝内科学

熊野 健二郎

消化器外科学

富麗

薬理学

許家 琪

泌尿器病態学

THAR HTET SAN

病理学 (免疫病理)

關 杏奈

消化器・肝臓内科学

竹内 英実

腎・免疫・内分泌代謝内科学

定平 卓也

泌尿器病態学

佐藤 博紀

呼吸器・乳腺内分泌外科学

王 登莉

薬理学

平成29年12月27日 (甲) (医歯薬学総合研究科)

石原 久司

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

越智 可奈子

腎・免疫・内分泌代謝内科学

山岡 正和

麻酔・蘇生学

森岡 祐太

薬理学

藤井 将義

病理学 (腫瘍病理)

塩出 雄亮

眼科学

町田 崇博

整形外科学

岩井 直子

小児医科学

平成30年3月23日 (甲) (医歯薬学総合研究科)

井田 潤

循環器内科学

吉田 晶

整形外科学

建部 智子

腎・免疫・内分泌代謝内科学

二宮 卓之

消化器外科学

黒田 浩佐

麻酔・蘇生学

板倉 淳哉

病態探究医学

山村 裕理子

腎・免疫・内分泌代謝内科学

渡辺 晴樹

腎・免疫・内分泌代謝内科学

神原 太樹

泌尿器病態学

山川 泰明

整形外科学

酒本 あい

産科・婦人科学

川田 哲史

循環器内科学

兒島 聡一

放射線医学

児玉 有弥

整形外科学

堀田昌宏	整形外科学	高原津	高山伸	滝貴大	竹内明
田村朋季	血液・腫瘍・呼吸器内科学	武智龍之介	田中裕輔	谷口厚樹	中谷真大
的場亮	眼科学	中西彬	中村悠大	西垣内陽	西垣貴美子
魚谷弘二	整形外科学	西野貴大	波戸本亜紀	濱崎七海	林淳子
小田孔明	整形外科学	日笠晋太郎	日高啓介	平田雄一	平原知晃
浅野恵一	分子医化学	藤井健人	外間まどか	前田晃宏	前田恵実
橘元見	循環器内科学	正井加織	政田恭孝	松島舜	松田大樹
衷輝	薬理学	松村吉晃	真鍋修司	真野俊史	水野大輔
林原千夏	精神神経病態学	皆尾望	三宅隼人	宮田将徳	宮原克徳
藤原雅樹	精神神経病態学	宮本翔太郎	村上勇也	本倉優美	森岡慧
中野由美子	脳神経内科学	森澤雄己	森田詩織	柳田のぞみ	矢野遥香
森原隆太	脳神経内科学	山内菜緒	山下和貴	山田光太郎	山本健太
大谷理浩	脳神経外科学	山本紘一郎	山本哲也	吉村典紘	渡部智文
赤穂宗一郎	消化器・肝臓内科学	任仙光	平部顕子	松野純平	水田貴大
加藤諒	消化器・肝臓内科学				
矢部俊太郎	消化器・肝臓内科学				
宮脇義亜	腎・免疫・内分泌代謝内科学				
長谷川徹	産科・婦人科学				
田端哲也	病理学（腫瘍病理）				
永喜多敬奈	病理学（腫瘍病理）				
丸川洋平	放射線医学				
橘智靖	耳鼻咽喉・頭頸部外科学				
張偉	整形外科学				
AGUS EKA DARWINATA	病原細菌学				
福井裕介	脳神経内科学（神経内科学）				
岡崎倫子	消化器・肝臓内科学				
西山悠紀	腎・免疫・内分泌代謝内科学				
河内麻里子	消化器外科学				

**平成29年度（平成30年3月）
岡山大学医学部医学科卒業生**

遠藤福力	越智正彦	長井宏樹	原山由莉
本田章	浅井真梨	網師本健佑	綾悠佑
綾田善行	有田凌	安東愛理	池田大輔
池町涼介	伊藤啓	伊野遙香	井上翔太
井上陽平	今村沙弓	今村繭子	上田哲之
上田弥生	内田成彦	梅田剛志	梅田将志
大塚勇輝	大前凌	岡野寛	香川大樹
葛城郁美	加藤光晴	金丸薫子	萱野真史
川合裕也	河野智仁	神崎佑佳	京谷美月
久保田紗矢	久保田菜月	栗林睦子	桑山剛
小池真琴音	高知佑輔	河野圭	齊藤貴之
竿尾堯	堺奈生美	坂野綾子	佐藤航貴
塩谷梨沙子	白神碧	末森彩乃	住井遼平
高尾賢一朗	高橋直人	高橋佑輔	高橋洋祐

会 員 訃 報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

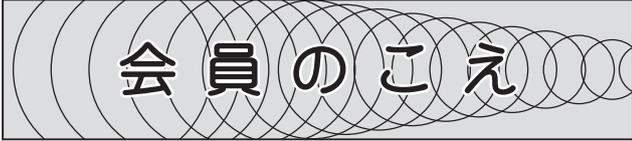
昭18専	井 桁 孝 正	28. 10. 24
昭23	早 藤 勇 生	29. 5. 8
昭23	三 宅 良 平	29. 5
昭23専	和 田 功	29. 4. 4
昭23専	中 西 進	29. 3. 16
昭24	三 原 伸	30. 3. 22
昭24専	狩 谷 哲	29. 9. 3
昭24専	西 村 惇	30. 1. 22
昭25専	森 谷 秀 男	29. 4
昭25専	山 田 勲 男	30. 2. 17
昭26	日 野 八洲行	29. 4. 4
昭26専	向 田 一 馬	24. 12. 22
昭26専	有 吉 義 明	29. 5. 23
昭26専	小 田 裕 三	25. 2. 19
昭27	諏 訪 喜 一	29. 5. 25
昭27	宗 保 人	29. 10. 24
昭29	仲 原 節	28. 12. 30
昭29	小 池 健太郎	29. 9. 19
昭29	木 原 彊	29. 8. 2
昭29	毛 利 子 来	29. 10. 26
昭30	横 矢 久美子	29. 11. 1
昭31	橋 本 恭 治	29. 5. 20
昭31	楠 本 喬	29. 11. 19
昭31	石 原 弘 道	30. 2. 20
昭31	清 藤 一 郎	30. 3. 27
昭32	石 原 清	29. 12. 2
昭32	田 邊 研 二	29. 11. 20
昭34	池 尻 孝 治	29. 12. 3
昭35	朝 倉 晃 康	28. 10. 11
昭35	佐 藤 公 規	28. 12. 26
昭35	安 東 規 雄	26. 1
昭35	本 城 巖	29. 4. 21
昭39	有 馬 暉 勝	29. 7. 15
昭40	上 畑 鉄之丞	29. 11. 9
昭41	河 島 浩 二	29. 10. 2
昭41	人 見 文 雄	29. 7. 15
昭43	三 龜 宏 宏	29. 9. 22
昭44	山 縣 鐵 一 夫	28. 12. 1
昭45	高 山 信 夫	29. 10. 7
昭48	小 川 達 博	30. 4. 1
昭51	中 桐 善 康	29. 7. 28
昭56	定 平 吉 都	30. 1. 23
昭61	西 川 和 男	29. 6. 21
昭63	志 摩 泰 生	29. 10. 27
会員	高 杉 敬 久	29. 6. 20
会員	山 本 良 介	29. 10. 18
会員	三 浦 国 輝	29. 11. 18
会員	古 瀬 章	29. 10. 4

事務局からのお詫び・訂正

昨年10月発行の鶴翔会会報第123号において誤りが
ありました。

下記のとおり訂正し、お詫び申し上げます。

15頁 (誤) 松阪 卓児 ⇒ (正) 板阪 卓児



会員のこえ

母校の医学教育 リノベーションへの期待

昭40 池田重政

1980年、New England Journal of Medicineに医学教育に35年間携わってきた米国の内科教授（Ludwig W. Eichna）が書いた興味深い論文が掲載された。¹ “Medical-School Education, 1973-1979, A Student’s Perspective” と題されたその論文は、教える立場から当時の医学教育に満足できないものを感じていた著者が、引退後、その改善を見いだそうと長年勤めていた大学に医学生として再入学し、4年間のカリキュラム（授業、実習、試験、国家試験など）をすべて履修した体験を基に書いたものであった。そこには、医学部の入学選抜から、学部・卒後教育、医師の適正配置までが8項目に分けられ、それぞれの問題が報告されていた。さらに3年後には、医学教育の改善案も同誌に報告している。² 37年も前に書かれた論文であるが、あたかも現在の医学教育が抱えている問題を鋭く指摘していると思え、教えられることが多かった。私自身も著者のように引退後大学に再入学する夢を持っていた。残念ながら現実とはならなかったが、ここ数年もう一度大学生活を送ることが出来ればどのような教育を受けられるだろうか考えることがある。

振り返れば、医学生から大学院生まで10年間の医学教育を岡山で受けた後、米国に渡り、先ず気付いたことは、日本で医学教育を受けた自分自身に欠けていたことは、1) 幅広い一般教養教育、2) 基礎医学の臨床医学への応用力、3) 自律的に考えること（critical thinking）であった。その後米国以外でも、いずれも1、2ヶ月という短期ではあるが、スウェーデン、ドイツ、ネパール、米国麻酔学会のOverseas Teaching Program (OTP) メンバーとしてガーナ、タンザニア、ルワンダで医学生、研修医の教育に携わる機会があり、日本でも沖縄県立中部病院を始め、各地の大学病院、研修病院で、初期、後期研修医の臨床教育に関与してきた。日米の臨床、教育現場での体験、そして、世界各国の教育プログラムに関わった経験から、異なった医学教育、研修制度をある程度多角的に比較出来る立

場にあると思う。

岡山大学の現状、これからの進路を報告している「2016年度医学教育分野別評価基準日本版V1.30に基づく岡山大学医学部医学科自己点検評価」³（以下「評価」とする）を参考資料とし、私自身の経験と反省をもとに前述のEichna に倣い、医学教育カリキュラムの改善点を考えてみたものである。以下は、良識ある医師として世界に羽ばたいてほしいという大きな期待を抱く母校への提言である。

1. 一般教養

渡米後に気づいたのは同僚達の、年齢、宗教、人種の異なった患者に対応する医師としての医学知識や医療手技の優劣といったものでは推し量れない人間性に富む医師の人柄であった。それらは彼らの受けた幅広いリベラルアーツ教育が根底にあると思う。リベラルアーツとは、「大学での一般教養科目。専門科目に対し、哲学・歴史・文学・自然科学・語学など」、「人間性に富む豊かな教養」と辞書にある。「評価」(p.36)にも、「グローバルに通じるリベラルアーツ教育の推進」と記され、医学科のカリキュラムの特徴の中にも、「入学から1年半の間は、幅広い科目を学習して多様な価値観を学び、豊かな人間性と柔軟な社会性を育てる」とあることから、リベラルアーツ教育が重要視されていることは理解できる。

医学教育が6年間になった歴史的な背景を調べてみると、1947年までに遡らなければならない。⁴ 当時改正された教育制度下では、医学部も他の学部と同じように4年制であった。ただし2年間以上の自然科学のみならず、語学、文学、社会科学などのリベラルアーツ教育を大学で終えることを入学の資格としていた。終戦直後、占領下の政治、経済面で困難な時代にも、医師の養成に2年間の一般教養を入学資格とした先覚者を忘れてはならないと思う。

さらに言えば、診断、治療の技術がいかに進歩しても、人（患者）を相手にする臨床医は、一般教養のみに留まらず、政治、経済、社会の動きにも関心を持つべきである。”Hi-Tech, Lo-Think”の医師になってはならないと思う。また、患者と医師の良好な人間関係は医療訴訟を防ぐことにもなる。⁵ 更に一般教養の大切さは、専門性が高く進歩の早いIT企業でも見直され、哲学、歴史、演劇を大学で学んだ者が、コンピューター、技術関係の教育を受けた者と対等に活躍しているのが現状である。⁶

岡山大学の教養教育は週2日のみである。医学セミナー、臨床医学のエッセンスを紹介する臨床医学入門、

医療施設での早期体験実習は勿論リベラルアーツ教育ではない。大学入学後の1、2年で終える現行の教養教育は余りに短かすぎる。飛躍しすぎた例だが、米国のある6年制の医学部では、学年が進むごとに専門教育に多くの時間を費やしながらも、教養教育も6年間継続しているカリキュラムも参考になるかもしれない。

2. 基礎医学

良識のある医師に一般教養が不可欠であるように、基礎医学は臨床医学の土台である。「評価」(p.47-48)には、「基礎と臨床教員が協働して取組む方法として、基礎病態演習の臨床医をコメンテーターとして招聘している」とあり、また、「基礎医学系教育と臨床医学系教育の効果的な接続のあり方について検討する」とあり、基礎医学から臨床医学への移行がスムーズに行われるよう、配慮している点は評価できる。

私の学生時代の基礎医学の授業で、臨床医学との関連についての講義を受けた記憶がない。麻酔学は1950年代より臨床薬理学、臨床生理学であると言われていたにもかかわらず、⁷麻酔研修中にも手技の教えは受けたが、薬理学、生理学、解剖学の臨床麻酔への応用といった教育は受けなかった。

渡米後、最初に読んだ教科書は英国で出版された「Physics for Anaesthetist」(初版出版は1946年)であった。50年以上も前から英国の麻酔専門医の最初の資格試験は、物理、化学の問題が含まれている基礎医学である。米国でも2010年代から、1年間の研修終了後に麻酔関連の基礎医学の試験が開始されており、合格できなければ研修を続けることができなくなっている。基礎医学の知識、理解度は、専門分野を極めた医師の質の良さに繋がると思う。

3. 臨床実習

6年次の臨床実習のカリキュラムを見て驚いた。5年次の実習時間は54週あるが、6年次では16週となり、9月以降は実習が全くなくなっていることである。6年次後半は卒業試験、国家試験の準備の期間と聞いている。国家試験合格率が95%前後である岡山大学の学生に半年以上の受験準備が必要であろうか。むしろ卒業後直ぐ、患者を診る初期研修医が、半年以上も現場を離れていては期待される仕事ができないのではと懸念する。9月以降も週に数日も臨床実習を続ければ、基礎医学の授業時間を一割削減(「評価」p.37)することなく、2023年から実施されるEducational Council for Foreign Medical Graduatesの基準を超える臨床実

習に合うカリキュラムが出来るはずである。その上、「評価」(p.11)に記載されている「学部教育と卒業教育の継ぎ目のない連続性」にも繋がる。

最近の日米共通の問題であるが、インターネット、iPhoneと共に育った医師は、オンラインで報告される検査結果、画像をコンピューターで見ながら、患者と目線を合わすことなく話す、といった苦情を聞くこともある。こんな時代だからこそ、学生時代の十二分なベッドサイドでの臨床教育がいかに大切かと思う。

4. カリキュラム

a) 医学研究インターンシップ

「評価」では、医学教育の初めから研究が重要視されているようである。3年次の学生全員が基礎医学の教育が終わる前に3ヶ月間の医学研究インターンシップを終えている。2001年からの15年間に1500人以上の卒業生がこのインターンシップを経験しているが、その教育成果はどのくらいあったのだろうか、例えば、1) 医学研究者としての道を選んだ卒業生の数、2) peer review journalへの投稿数、3) 基礎医学のみならず、臨床研究、translational researchの実績など客観的な教育成果を知りたいものである。⁸臨床研究に興味のある学生⁹にはインターンシップを3年次でなく、できれば5-6年次に行うのが適切ではないかと思う。

b) 国際感覚

「評価」、「医学部150周年プロジェクト」にもグローバルリーダーを目指した人材、国際感覚を身に付けた医療人の育成を強調している。

国際的に活躍できる医師の育成は、同窓会報に毎号掲載されている海外留学者のような数年間の研究留学だけではないと思う。海外での医療・医学教育支援の機会は数多くある。例えば、2015年に発表されたLancet Commission on Global Surgery “Global Surgery 2030”¹⁰に報告されているように、世界人口の2/3は適切な外科治療を受けることができていない。臨床医、特に外科系医師は開発途上国で医療への貢献だけでなく、現地の医療従事者への教育を施すことができる。また学生も語学研修と開発途上国での医療体験をする機会がある。

1学年次の末に5週間の海外語学研修の可能期間が設けられているが、上記のような視点も考慮に入れた6年間のカリキュラム編成の必要があるかと思う。国際的な医学に貢献するには、異なった文化や宗教を理解し、受け入れる豊かな人間性を持つ医師が育たなくてはならない。そのためには「評価」(p.36)に指摘されているように「グローバルに通じるリベラルアーツ

ツ教育」が重要であることをもう一度強調しておきたい。

c) Problem Based learning (PBL) の評価、検討

新規開講のカリキュラムとしてPBLが活用されている。「評価」(p.27) PBLを使つての教育には、1) PBLを充分活用できる指導者の養成、2) 学生による活発な討論を中心とし、教官は進行役になることである。私も、参加者による活発な討論 (discussion=D) を促すために前もっていくつかの参考資料を渡して行うPBLDを使ったことがある。しかしその教育効果には限界を感じていた。¹¹ 日本の大学、病院で行ったPBLDでは、多くの研修医はspoon-fed されることを期待しているのか、渡しておいた参考資料を読んでいたのか、十分な討論が出来なかったのが私自身の経験である。

指導医の役割は“Socrates at the bedside”であること、レジデントには“I'm trying to create mind that is inquisitive”と、口癖に言っていた教授の教えを受けた私は、臨床では、Socratic Methodで多角的な思考を促す問答形式の方がPBLDよりも効果的と思ひ、好んで使った。アフリカでも日本の研修医とは対照的に意欲的な学生、研修医と病棟での術前回診、症例報告、Mortality & Morbidityミーティング、麻酔中であっても機会あるごとにSocratic Methodを使うことができ、成果があった。

母校への期待

基礎医学と臨床医学が連携し、グローバルに活躍できる医師、研究者となる道も開かれている現在の母校の医学教育に大いに期待している。ただ苦言を呈せば、現行の一般教養教育はまだ改善の余地がある。解決策の一つは、学士(大学院卒業生を含む)の入学の枠を広げることではないかと思う。米国では大学で演劇を専攻した脳外科医や、英文学を学んだあと医学部を卒業し、非常に成功した基礎研究者を知っている。前にも触れたIT関連企業の成功例のように、自然科学系科目を習得した者だけでなく、人文科学系の卒業生にも医学部入学の機会を与えることができないものであろうか？

「評価」では学部教育と卒後教育の継ぎ目のない連続性が強調されているが、過去5年間に10-15%の卒業生しか母校での前期研修を選んでいない。その理由が、5-6年次の臨床実習に不満であったからではなく、他の大学や病院での異なった医療を経験したかったからであつて欲しいと思う。

米国の麻酔科レジデントの75%は平均\$210,000の

学生ローンの返済をしている。¹² 経済的に豊かな子弟だけが医師になっているのではない。優秀なレジデントに大学に残ることを勧めても、多額の借金返済のため断られたこともあった。

「評価」(p.114-115)に学生への経済支援が記載されているが、経済的に恵まれていなくても、優秀な学生が学べるように、150周年記念事業の基金の一部を給付型奨学金に向けて欲しい。¹³ 経済的な支援を受けて医師となった者は、上からの目線ではなく患者と対し易いのではないかと思う。

私自身の経験に話を戻せば、アフリカで学んだことは、上に立つ指導者に、改善への意欲が無ければ教育は変らぬということであつた。彼らの大半は教えることに興味がないか、現状に満足し、改善することはないと考えていたようであつた。幸いOTPで育った研修医の数名が指導医となり改善への道が開けてきている。2016年の世界麻酔学会では彼らの努力が認められ、Innovation Awardを授賞した者もいて、誇りに思っている。

いまや多くの日本語が国際語になっている。そのひとつの“kaizen”は欧米でもよく耳にする言葉になった。辞書には“a business philosophy or system that is based on making positive changes on a regular basis, as to improve productivity”と日本人が誇りに思う解釈が書いてある。「改善」が母校のキーワードであつて欲しいと思う。

反省多き一卒業生として、母校の医学教育への期待と願いを込め、色々提言させて頂いたことに感謝する。同窓会員の多くの方々には私以上に母校に関心を持っておられるだろう。岡山大学医学部150周年創立記念事業を達成するためにも、大学関係者から一般同窓会員へ向け、母校の現状、将来についての大学関係者からの報告を期待したい。

(質問、コメントは s40iked@gmail.comへお願いいたします。引用文献に興味ある方はご連絡ください。)

編集者への手紙 — 鶴翔会報、会費について

昭40 坪井修平

昨年、ある同窓会員が本会報へ寄稿したところ、文字数(約6,000)を縮小するように勧告されたこと耳にし、驚いています。母校を想う大変建設的な意見であり、何故全文を掲載されないのか、怪訝に思いました。

過去の記事を調べたところ、6,000文字を超える記事は稀ならず、中には図表も含み30,000文字相当の記事もあり、判断基準がどこにあるのか、理解に苦しんでいます。

かつて私は、態々アメリカからやって来た級友の池田重政君と2人で鶴翔会会長や会報編集長と面談して、鶴翔会、鶴翔会報について提言させて頂きました。会報は、経費節減のため「印刷・郵送」からインターネットを活用した“ペーパーレス”とする、海外便り等は誤解を招きやすいので“Peer Review（査読）”を導入する、インターネットを活用して学外会員の編集委員を増やす、学生も編集委員に選ぶ、各同窓会支部に鶴翔会報のモニターを選出して会員の朗報・悲報等の会員情報や鶴翔会報の評価を送信して頂く、モニターや全会員へアンケート調査を行い会報の記事の内容や配置の是非を問う、等々お願い致しました。残念ながら、その後の紙面を拝見して、多少の変更は見られるものの、抜本的な改革に取り組まれた形跡は認められません。

毎号の会報に、おひとり“3,000円”の会費が鶴翔会の活動を支えています！とありますが、会員の会費納入率が40%の惨状ではやむを得ない訴えであると思います。反面、「傾向と対策」という懐かしいタイトルのように、「傾向」があれば必ず「対策」を立てる必要があります、当局はどのような対策を立てておられるのでしょうか？納入率の年次推移は、鶴翔会報1986年：63%、2007年：42%、2017年2月：51%、2017年8月：40%と、漸減していることは明白です。しかし、よく見ると納入締切日によってかなり変動していることが分かります。この変動要因を分析することによって対策のヒントが得られるのではないかと思います。

鶴翔会報について先輩、同輩、後輩、学生に質問したところ、「殆ど読んでない」との返事が少なくありません。送られてきた鶴翔会報を「良く読む」「ざっと目を通すだけ」「積んどく」「直ぐゴミ箱へ」の読者の割合は？その理由は？半年毎に掲載され全頁の1/3弱を占める教室だよりの読まれている割合は？学内情報を優先しているのでは？学外会員の投稿を促すには？と次々に疑問が湧いて来ます。因みに、教室だよりは1986年：31教室、66頁中11頁17%、2016年：83教室、106頁中32頁30%を占めています。

これらをどう考えるか。私案の1つとして、インターネットを利用して全会員に鶴翔会、鶴翔会報についてアンケート調査を実施されることを希望致します。

鶴翔会に限らず、医師会、薬剤師会、美容師会…いづれも会員の確保、会費納入率に苦慮されていますが、それは会費を納めるメリットの大小に因るとは思われません。ただ、ただ、納入のお願いを繰り返すのではなく、未納の理由を探り、より良い、より愛される鶴翔会、会報に変身させるべく、広く会員の意見を求め、それを反映するようにされれば、催促をしなくても納入率は自然にアップするのではないかと考えています。

会員の近況

ヘルスシステム統合科学研究科

昭60 松尾俊彦

2018年4月、岡山大学に新大学院としてヘルスシステム統合科学研究科 (Graduate School of Interdisciplinary Science and Engineering in Health Systems) ができます。医歯薬学総合研究科の医学系からは松尾俊彦が唯一の移行教員となりますが、私は医学部医学科眼科学兼任 (兼任担当) として、岡山大学病院眼科での診療と手術を継続します。これまで通り、ぶどう膜炎 (全身疾患)、眼腫瘍、小児眼科の専門外来も続けますので、引き続きご紹介等よろしくお願ひいたします。

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科は、自然科学研究科 (工学部) の生物工学系を母体として、機械、電気、化学、情報工学系の一部、社会文化科学研究科、法務研究科 (法科大学院)、保健学研究科 (保健学科)、医歯薬学総合研究科などの教員が参加して独立の大学院を作ります。医歯薬学総合研究科では医学系から松尾、薬学系から狩野光伸教授 (岡山大学副理事、医師、東京大学卒) が、それぞれ1人ずつ参加します。岡山大学は、この新大学院設置構想を掲げ、2014年に文部科学省のスーパーグローバル大学創生支援事業 (Top Global University Project) に選定されています。その後、文部科学省の大学設置・学校法人審議会の議を経て、2017年11月9日、「ヘルスシステム統合科学研究科」として文部科学大臣に承認されました。本研究科は、工学部の中でも比較的新しい分野である生物工学系 (biotechnology) の出口として、医薬品や医療機器などの開発を意識した再編が下地になっています。さらに、科学技術の進歩が必ずしも人類の幸せに結び着かないことが明らかになりつつある昨今、死生観など文系要素による思索も必要不可欠であるとの考えから、津島と鹿田の垣根を越えた新しい枠組みを備えています。

医学系の関与としては、米国シリコンバレーのFogarty Institute for Innovation (FII) やスタンフォード大学のバイオデザイン (Biodesign) プログラムが参考になります。どちらも米国カリフォルニア州に

ある機関です。Fogarty Instituteは病院内にある工房で、医療現場の意見に基づいて医療機器の改良や開発を進めています。スタンフォード大学のBiodesignというカリキュラムでは、医療従事者ではない学生 (社会人など) が医療現場を見学して、こういう機器があったらいいとか、こういうシステムにすれば医療従事者が働きやすく患者さんにも優しいなどの意見を出し合い、具体的に製品化していきます。新大学院ヘルスシステム統合科学研究科でも、工学系や文学系の修士課程の学生が、医療従事者養成のための実習とは異なる第三者として、あるいは患者さんの立場で、どのような機器があったらいいのか、どのようなシステムであったらいいのかを考えます。病院内で短時間の見学を行い、その後グループ学習で意見をまとめて発表する予定です。実習は、本来の病院実習を行う医学部生、看護学生、薬学生などが夏休みになる8月末に岡山大学病院で行うこととなりますが、見学に参加する学生は事前レクチャーを受け、十分な準備をして臨みます。実習に際しましては、先生方をはじめ、現場におられる皆様のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

現在、岡山大学では、国連の持続可能な開発計画 Sustainable Development Goals (SDGs) に沿った研究や教育活動を進めています。その17項目の中には、例えば 3) Good Health and Well-Being、9) Industry, Innovation and Infrastructure、11) Sustainable Cities and Communitiesなど、医療や保健に関連したものがああります。医療と介護を統合した地域包括ケアシステムもこれらの項目に該当します。多様な部署の教員との協働の中、走りながら新大学院のシステムを作ることとなりますが、世の中の動きや地域の要請に合わせて、柔軟に対応していく予定です。すでに多くの大学にある医工連携組織とは異なり、文系も参加して「統合科学」を目指す日本では初めての大学院です。学位は博士 (統合科学)、修士 (統合科学) となり、学位に付記される名称としては、これも日本では初めてとなります。修士課程 (前期博士課程)、博士課程 (後期博士課程) には社会人枠もあります。医学部医学科卒業の場合は博士課程に入学でき、学位も同じPhDを取得できます。多様な背景を持つ学生たちと協働して、日本から世界に向けて統合科学を発信していきたいと思ひます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひいたします。

快拳 徳永常登先生 -LAの赤絨毯を闊歩-

昭40 坪 井 修 平

医師が医学の発展に寄与することは当然であるが、漫画家の手塚治虫、文豪の森鷗外、政治家の三木行治岡山県知事のように、他の分野で名声を馳せた医師は少ない。レベルは兎も角として、写真で二科展に入賞、絵画展の常連のほか書道・歌唱・能楽・囲碁で友人裸足の級友達にも驚かされる。



この度Airbnb Open 2016 in Los Angeles Festivalで、今治市瀬戸内海病院名誉院長 徳永常登先生（S41卒）が、シリア難民の家族をカナダに移住させる手続きに功績のあったトロントのホスト、ブラジルのリオデジャネイロの貧民街の子供の施設に寄付を続けていたホストと並んで、最優秀賞のベスト3に選ばれ、2,000人の大観衆の前で11人のご家族と共に赤絨毯を闊歩されました。徳永先生の「常夜燈Joyato」は全世界から集められた、やさしさと絆の感動ストーリーの数千点の中から選出され、ご夫婦で招待されました。「超満員の熱気の中で、大都市のトロントとリオデジャネイロに伍して、“Japan Imabari!!”と発表された瞬間、私は万感胸に迫る思いがしました。私どもの家族を温かく迎えてくださった今治に多少とも御恩返しが出来たと思ったからで

す」と吐露されています。

す」と吐露されています。

Airbnb (Airbed and breakfast) のbnbとは「Bed & Breakfastベッド&ブレイクファスト」の略語で、寝床と朝食だけを提供する小規模な宿泊施設のことを指します。配車サービスのウーバー Uberと共に、現在世界中で幾何級数的に急成長しています。2008年にカリフォルニアでインターネット上の宿泊施設・民宿を貸し出す仲介サービスを開始した会社が、世界最大の民泊サイトのAirbnbです。すなわち、Airbnbは世界レベルで流行している、空いている部屋や家などを貸したいと思っている人と部屋や家を借りたいと思っている人をサイト上で結ぶサービスを提供しているパッケージレンタルサイト最大手の会社です。そして現在では世界192カ国、33,000あまりの都市で80万戸以上と容易に把握出来ないほどの家や部屋が宿として提供されています。日本においては2011年に支社が開設され、サービスが開始されています。徳永先生は今治を訪れる世界中のゲストに、今治に対して良い印象を抱いて頂きたいと願って、2014年にAirbnbに加入されました。東京、京都、大阪など日本有数の観光地を巡って今治に辿り着いた遠来のゲストを、しまなみ海道と遍路路を目玉とした、大都会にはない雄大にして繊細な景観を見て頂こうと、自家用車で案内されています。これまでの3年3カ月間で徳永邸に実質無料(収益の全てを国境なき医師団に寄付)で泊ったゲストは、60カ国からの769人に達しています。「おもてなしの心」と「世界のためになることをしたいという思い」が世界から高く評価されて、この度の榮譽に浴されました。



Festivalは、2016年11月17～19日、ロサンゼルスで開催されました。授賞式前日の11月18日、徳永先生ご夫妻はタイムやニューヨークタイムスで有名な写真家エリックターナーによって際限が無いと思える程頻りにシャッターボタンを押し続けられました。その写真は、ご夫妻の紹介を添えて、サンフランシスコのAirbnb本社に掲げられています。最終日の11月19日に、最高の栄誉を讃える授賞式が、超高層ビルの建ち並ぶロサンゼルス ダンタウンの由緒あるThe Orpheum 劇場で、ホストやゲスト 2,000人を集めて盛大に開催されました。アメリカで著名なジェームスコーデンが司会を務め、Airbnbの創業者ブライアンチェスキーらがプレゼンテーションを行ないました。表彰式後、世界一高い声でギネスブックに登録されているマライア・キャリー、グラミー賞を受賞したマルーン5、シークレットゲストとしてレディ・ガガも登場しました。この顔ぶれからも、このFestivalの規模の大きさを窺い知ることが出来ます。

徳永先生ご夫妻は、ロサンゼルスから帰国して間もなく、東京大学工学部で開催された、「民泊とシェアリングエコノミー」のワークショップに招待され、通常の民泊とは異なる、非営利目的の「友泊」というカテゴリーを提唱され、注目を浴びました。

おわりに

徳永先生は第一内科無給医局員時代の雀豪で、私は美味しいカモでした。ある年、徳永先生とカモ達が泊まり込みで瀬戸内海の本島に集まり、本島決戦と銘打って麻雀大会が開かれ、私は江戸の仇を長崎で…と勇んで参加しました。しかし、敢え無く返り討ちに遭い、完膚なきまでに痛めつけられ、身ぐるみ剥がれました。暫くの間、牌を見るのも厭でした。と言っても、私には執念深い「恨」と縁がなく、この度の徳永先生の快挙に心から喜び、拍手喝采です。



当時は娯楽が少なく、麻雀が全盛期で若いも若きも麻雀を楽しんでいました。しかし、昨今はパソコンやスマホ遊びにとって代われ、老いた私達も含め麻雀人口は激減しています。

おめでとうございます。

〈徳永常登：老鶴萬里心、一内科同門会誌第64号2017.12. p36～40より一部引用させて頂きました。〉



同期会だより

卒後66年のクラス会報告

昭26 奥村修三

昭和26年卒の66年目のクラス会を平成29年11月5日、例会場の岡山市ホテルグランヴィアで開きました。65名のクラスでしたが、生存20名、出席9名、同伴3方です。写真を添付します。約2時間半ほど出席・欠席者の状況報告から昔話、国内外の社会情勢まで、結論の出ない談論風発で過ごし、「さて今回は」「まあ来年までは大丈夫でしょう」と楽観的にホテルに来年の予約をして散会しました。



左より 奥村、坂下、河西、梶木、佐藤、金政、舛岡、梶木、池上、徳永、舛岡、徳永の各氏です。

クラス会の今までを振り返ってみますと、卒業時はまだ戦後6年で連合軍の被占領下で生活も多少は安定

したと言いながらも困窮が続き、場所も物資も無く卒業パーティーも開けなかった時代。その後数年はインターン、入局と進み、各人それぞれ新しい生活に対応するのが精一杯でクラス会が成立しなかった時代。やっと落ち着いて5年目に大学病院の前通りの某肉屋さんで開いた「すき焼き」でのクラス会が最初でした。その後も医局人事等で短期の出張移動が多くまた当時の郵便のみの通信手段では連絡も取り難いので、岡山附近在住の者のみで留学生や出張者の送別会が小規模に行われた程度でした。

卒後10年余りで社会も次第に落ち着き、各人も研修・研究生活等を終え、開業や赴任での移動も落ち着いた時代に入り、この頃からクラス会も活発になりました。そしてその後の10数年にかけては夫人同伴も勧められ、宿泊、観光付、さらにはゴルフまで。皆さん元気で飲食も盛んでした。各地に根をおろした級友の世話で静岡、奈良、大阪、有馬、神戸、姫路、牛窓、高松、高知、松山、福山、広島、宮島、下松、熊毛、萩などと岡山会場と交互に開催され、級友も大部分が集まったものでした。夜行列車で参加ということもありました。そして、これらの集まりは単に気分転換や観光だけではなく、お互いに元気をもらったり、励ましたり励まされたり、さらに友人ならではの率直な意見や評価を得られたのが貴重でした。

卒後40年近くになると、社会的お付き合いや止むを得ない仕事、また家族の行事等でお互いに忙しくなり、又健康上の問題も出始め、出席者の減少や日帰りの選択が多くなって来ています。

50年（平成12年）以後は交通・通信の便は良くなっても、そろそろ体力的に移動も大変と毎年期日はほぼ固定、場所も人数の多い岡山市での例会となり、現在に続いているのが現状です。

昭和28年卒のクラス会

昭28 矢部芳郎

過日（平成29年11月18日）、私たち、昭和28年（1953年）の卒業生が集まりました。

昨年の会から今年の会までの間に死去したのは、田村弘三、田村辰士、東村純雄、吉本辰雄の4名（同期に卒業した77名中、49名が他界）。また、直前に、体調を崩して、参加できなくなった者もあり、結局、実



前列左より：北中 創、小山靖夫、松田 穆、阪田光昭
後列左より：岡島邦雄、矢部芳郎

際に集まったのは6名でした。

例年のように、物故者の名前を読みあげて、追悼。その後、それぞれの近況、昔日のこと、最近の医療の

ことなどについて話しました。みんな、来年のことを言うと鬼に笑われるような年齢です。しかし、「出来れば、来年も会おう」と言って別れました。

平成29年度 みとう会 (昭和30年卒同窓会)

昭30 山本 泰久

みとう会（昭和30年卒同窓会）が、2017年10月7日に岡山プラザホテルで開催され、16名（井上（西明石）、岡田、小高、金岡夫妻（福岡）、喜多嶋、熊代夫妻（福岡）、志田原（広島）、高田、内藤、鍋島夫妻（松永）、西岡、森友（大阪）、山本）で楽しく会談しました。まず、昨年10月に亡くなられた高松の本多正憲君、今年6月に亡くなられた岡山の小田皓司君に黙祷、合掌。今年の元気な人は高田、志田原先輩でした。歩くのが速く、姿勢がいい。約1/2が杖を突き、少しよたよた

歩き気味になりました。松尾会長は風邪気味で欠席し残念でした。長老の熊代先輩の乾杯！で始まり、沢山の話が各テーブルで盛り上がりました。今日は暗い話や病気の話を忘れていたようでした。例年のごとく、小高先輩のいい歌を数曲拝聴し、来年を約して解散。



参仁会卒後60年記念同期会

昭32 林 慎一郎

私たちは、平成29年10月21日に参仁会卒後60周年の記念同期会をホテルグランヴィア岡山で開催しました。因に、「参仁会」は昭和3（参）2（仁）年卒業生の同期会名で「仁術に参す」という主旨の名称です。同会は、これまで原則として5年毎に開催していますが、今回は、卒業生86名中17名、同伴のご夫人5名が出席されました。

先ず、恒例の集合写真を撮影の後、河野宏君の司会のもと、大森弘之会長の開会の挨拶があり、続いて物故者全員（40名）に対して黙禱を捧げ、ご冥福を祈りました。会計報告の後、出席者の近況報告に移り、感慨深く拝聴しました。80代半ばの齢を経て、今なお現役並みの臨床を続けている人やスポーツや園芸などの趣味を活かして人生を楽しんでおられる人の様子を伺

い大いに勇気付けられました。

宴会では、円テーブルを囲んで酒を汲み交わしながら歓談し、団欒の一時を過ごしました。次期同期会の開催予定については、世話係で検討することで了承されました。

最後に、武田和久副会長の閉会の辞があり、4時間にわたる同期会を盛会のうちに終了しました。

本会を開催するに当たり、ご協力いただいた皆さんに心から感謝いたします。



昭和34年卒業「ねぶち会」同窓会 台風21号を前に

昭34 瀧谷 泰博

遅咲きの台風21号の到来により、10月21日の西日本は秋雨前線の影響により朝から雨が降り続いた。平成29年度の昭和34年卒「ねぶち会」の同窓会は予定通り、岡山グランピアホテルで午後12時30分から開催された。まず、一年ぶりに集まった23名と夫人同伴の6名を加えて集合写真に納まり、総計29名である。「ねぶち会」の名前はインターン生活を控えた卒業当初は藪でもない、タケノコ医者にも程遠い初心者であることに由来している。やがて大きく育ちゆくなら、大きく世界に羽ばたく親竹になる初心の気持ちを持っている。卒業60余年を過ぎると、86名の親竹も波瀾万丈の生活を経て、27名の同窓が鬼籍に入っている。

懇親会は世話人代表の川崎医科大学名誉教授 藤原巍先生の挨拶から始まった。時期遅れの大型台風と大雨注意予報の中、予定通りに開催出来た喜びと、はるばる駆け参じられた四国の真鍋豊彦・今井正信・佐藤源先生、山口の城戸信行先生、広島県の森信陽一郎先生に感謝の意を述べた。ここ2年間に姫井孟・中川嘉人・岩田克美・引地明義・青山英康の諸先生が亡くなり、心から哀悼の言葉を捧げられた。青山先生は卒業以来、「ねぶち会」の代表世話人として、お世話をして頂いたが、数年前から体調を壊されていた。参加申し込み葉書の近況欄に、「出席できないのが残念です。集合写真を一枚お送りください」と書き添えられ、参加者は先生のお元気な昔を思い出しながら、時には言葉を詰まらせていた。青山先生は岡山大学衛生学教授を経て高知女子大学学長を歴任。その間、日本学術会議会員、The Johns Hopkins Society of Scholars終身会員となり、2010年日本人では初めてJohns Hopkins大学のDistinguished Alumnus Awardsを授与された。

欠席の返事を寄せられた23名についてみると、お元気にて仕事を続け、スポーツを楽しまれる先生が居られる。しかし、11名の中には目下入院中とか、ロコモ

を患う先生が見受けられ、コメントが無いのは5名だった。今回は世話人の配慮で、案内状には遠慮なく家族の付き添いをどうぞと勧誘された。しかし、杖を友にする先生は見受けられたが、残念ながら車椅子や家族同伴の出席者は見受けられなかった。姫路で開業の瀧谷は仕事を終えてからの参加で遅刻です。

「ねぶち会」には写真を趣味とする先生方が多い。今回は会場に自慢の写真が持ち寄られ、写真の説明により各先生方の持ち味が披露された。被写体を求めて各地の旅行を楽しむ佐藤源・松森宏先生、プロ級の腕前で写真三昧の城戸信行先生、車椅子で身近な自然を楽しむ写真参加の小坂直也先生。「ねぶち会」写真係の山本衛先生は銀塩写真で濃淡を生かしながら素朴なインド人の生活を焼き付けられていた。例年通りなら、懇親会の翌日は椎名弘子先生のお世話によりゴルフが予定されていた。今回は台風により残念ながら中止となった。参加者は年々と減少し、ここ数年の参加メンバーは固定した4人組である。しかし、いよいよゴールドからピンクの老境になったので、エイジシュウトも夢では無いと、来年を期して一同は長生きしよう決心したのである。



(左) 寺尾章先生と藤原巍先生 (右) 写真説明をされる山本衛先生

昭和61年入学&平成4年卒業生同期会

平4 廣 畑 聡

昭和61年入学&平成4年卒業生の同期会を開きましたのでご報告いたします。

我々同級生は岡山近辺の者を中心に勝手な理由をつけては不定期に集まるのですがそういった酒席で、そういえば平成29年は卒後25年の節目なので同期会を呼びかけて大きく集まろうと突然、話が決まりました。声の大きい伊野君に「幹事は決まっているから」と御指名いただき、小生が企画することとなりました。

そうは言っても多忙な日常にまぎれて（すみません、言い訳です）時間だけが過ぎ、とりあえず日程と場所だけ強引に決定しました。前回もお手伝いしてくれた島田君から引き継ぎのデータをもらってはみたものの、今の時代、はがきや手紙でやりとりするのは面倒だ、という幹事の独断でe-mailを使って連絡することにしました。伊野君が同級生のメーリングリストを持っていたので、リストへ送ることで同期会の通知・連絡をさせていただきました。急な呼びかけにも関わらず60名強の同級生より御返事をいただきました。今回、連絡が届かなかった同級生の皆様には誠に

申し訳ありません。以上のような理由ですので、この機会に是非、今回の参加者に連絡をとってメーリングリストへ加わって下さい。

同期会は、2月4日正午より城下交差点に近いザ・マグリットで行われました。ザ・マグリットのスタッフの方には大変お世話になりました。パーティーはお得感も強く満足度の高いものとなりました。当日は、前回（平成14年）の28名を大きく上回る45名の同級生が出席し、千葉や東京からも遠路はるばる駆けつけてくれました。卒業以来、久しぶりに会う人もいましたが、あっという間にタイムスリップして学生時代に戻った感じでした。学生時代の懐かしい写真が出てきたり、近況を報告しあったりと時間が経つのが早く感じました。勤務医として組織の中で頑張っている人、開業して成功している人、子供が岡山大学医学部に入った人…それぞれ家庭の状況や社会的立場は大きく違うようになりましたが、同級生の頑張っている話を聞くと元気づけられる、そう皆が感じられた時間でした。二次会は三々五々ということで、皆さん繰り出されたようです。参加してもらった人に、この場を借りて御礼申し上げます。当日、インフルエンザや仕事のために来られなかった方々、とても残念でした。次回は、5年後にということで、次の担当（時期や誰がするかなど何も決めていませんが）先生に伝えます。



支部だより

今治支部総会の報告

済生会今治病院
松野 剛 (昭56)

平成29年7月1日鶴翔会今治支部の総会を今治国際ホテルにおいて行いましたので報告致します。

今治支部は愛媛県の東予地方西部に位置する今治市と西条市西部の旧東予市の同窓会支部で、会員数は約60名です。済生会今治病院と西条市立周桑病院（旧周桑病院）出身OBの方が多く、済生会今治病院に支部事務局を置いています。以前は三金会と称し、毎月第三金曜日に今治市の割烹で月例会が行われていました。現在は毎年、1月第三土曜日に、今治市と旧東予市において交互に今治支部新年会を開催しています。今回は約10年ぶりの総会で岡大消化器外科教授の藤原俊義先生と鶴翔会事務局長の妹尾行恭さまをお招きしての盛大な会となりました。

総会は支部長竹内鬼三郎先生（昭和33年卒）の挨拶と本年6月に行われた鶴翔会総会の報告で始まり、事務報告として今治支部規約、会員名簿、役員名簿、会費徴収などについて報告されました。引き続き妹尾さまより鶴翔会や岡山大学の最近の動向について紹介がありました。記念講演として藤原教授「消化器がん診

断・治療の工夫とチーム医療」のお話を伺いました。お二人の話は岡山大学医学部の最近の活躍と今後の飛躍を示唆する内容で会員一同深い感銘を受けました。

全員で写真撮影の後、今治国際ホテル離れの松泉亭で懇親会を楽しみました。前支部長で顧問の高山有泰先生（昭和31年卒）の挨拶と乾杯で始まった懇親会は学年の近い方から、年齢の離れた間でも話が弾み、あっという間の2時間でした。徳永常登先生（昭和41年卒）の中締め挨拶となりましたが、まだまだ話が続けての閉会となりました。最近、会員の高齢化が進んでおりますので、近いうちに次回総会を実施し、来年1月の新年会で再会することを約束しての閉会となりました。

最後になりますが、今治までお越しいただきました藤原俊義教授と妹尾行恭事務局長さまに深く感謝すると共に鶴翔会関係の皆様のご健勝をお祈りいたします。

（文責 松野 剛、昭和56年卒、済生会今治病院）



平成29年度鶴翔会 山口県支部総会

副支部長・山口宇部医療センター
亀井 治人 (昭59)

平成29年度鶴翔会山口県支部総会が、平成29年11月12日に山口県小郡市の山口ターミナルホテルにおいて、消化器・肝臓内科学の岡田裕之教授と鶴翔会事務局長の妹尾行恭様をお招きして開催されました。会の開始が日曜日の11時という、多忙な先生方にとって貴重な週末の休日での開催となりましたが、県下の各地区から開業医・勤務医併せて39名が集い親睦の場を持ちました。

総会では、まず会に先立って開催された役員会にお

いて昨年まで支部長を務められた竹内仁司先生（岩国医療センター前院長）のご退職にともない竹内先生が名誉会員に、そして谷本光音先生（岩国医療センター院長）が新支部長に推挙された旨の報告がなされ、総会での承認を経て谷本先生より新支部長就任のご挨拶がありました。その後、役員会報告と会員の動向の報告が有り、青雅一先生（岩国医療センター）が地区幹事に加わられること、山口県における鶴翔会の会員数が昨年より1名増となる217名であることなどが報告され、引き続きこの1年間でご逝去された清水義正先生（昭和17年卒）、水津昭先生（昭和30年卒）のご両名に全員で黙祷を捧げました。そして、平成29年度の会計報告および監査報告が行われた後、岡田教授と妹尾様による特別講演を拝聴いたしました。

まず、岡田裕之教授より、「消化器内視鏡診療の進歩」

と題してご講演を頂きました。ご講演では、黎明期の胃カメラからファイバースコープの時代へ、そして最新の画像強調システムや拡大内視鏡、カプセル内視鏡といった様々な機器が登場して上部・下部消化管、そして検査が困難であった小腸領域においても早期に疾患を診断することが可能となった現在までの進歩の歴史を、豊富な画像によって紹介して頂きました。そして、消化器内視鏡の活躍のフィールドが診断のみでなく治療の領域でも目覚ましく拡大しており、嘗ては外科による開腹手術でなければ対応困難であった消化管腫瘍に対して内視鏡的粘膜切除術（EMR）や内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）などの手法によって内科でも治療ができるようになったばかりでなく、胃・十二指腸のGISTなどの粘膜下腫瘍に対しても腹腔鏡・内視鏡合同手術（LECS）によって低侵襲に治療ができるようになってきていること、さらに食道アカラシアに対する経口内視鏡的筋層切開術（POEM）、耳鼻咽喉科との共同による下咽頭表在がんに対するESDなど、様々な領域における低侵襲治療に取り組んでおられることも、豊富な自験例を元にご紹介頂きました。消化器内視鏡を改良、駆使することによって、より正確に診断し、そしてより低侵襲に治療できることを目指して発展を続けている岡田教授が率いる岡山大学消化器・肝臓内科の活躍に一同感銘を受けたご講演でした。

続いて妹尾事務局長より岡山大学医学部の近況として、岡山大学の学長が森田潔先生から横野博史先生に引き継がれ、岡山大学を「世界水準型大学」、「憧れの大学」とするべく、「和顔愛語のリーダーシップ」を合い言葉に組織整備を進めている中で、その中心的役割を担う岡山大学の医療系キャンパスが、政府が推進する「革新的医療技術創出拠点」に中国四国地区の代表として選定されるなど、着実な成果をあげていることをご報告頂きました。2020年に向けての150周年事

業の一環として病棟の整備や旧生化学棟の改修などのインフラ整備も順調に進み、さらに中性子医療研究センターが開設されるなどさらなる発展を遂げている様子もお伝え頂き、会員一同が母校を誇らしく思うことが出来たご講演でした。

特別講演を拝聴した後、現在の山口県の医療をともに支えることとなった新入会員3名、そして将来の鶴翔会の発展をになう一翼となる可能性を秘めた新研修医9名の紹介があり、全員で記念撮影を行いました。引き続き開かれた会員懇親会は三井清先生（昭和36年卒）の乾杯のご発声で幕を開け、岡田教授、妹尾事務局長を囲んで和やかな雰囲気の中、初期研修医から重鎮の先生方まで年齢、勤務地の垣根を越えて親睦を深め合う和気藹々とした会となりました。楽しい時間はあっという間に過ぎ、谷本支部長より締めのご挨拶となり、来年は岩国での再開を約束して閉会となりました。

最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず、鶴翔会山口県支部総会のために小郡市まで足をお運び頂き、ご講演を賜りました岡田裕之教授、妹尾事務局長に改めまして感謝申し上げます。



平成29年度鶴翔会東海支部会報告

かわさき整形外科クリニック
（東海支部愛知県幹事）

川崎章二（昭58）

平成29年11月18日（土）、平成29年度鶴翔会東海支部総会を、6:00PMより名鉄グランドホテル18階北京宮廷料理 涵梅舫にて開催致しました。会員の参加者は10名でした。

当日は本学から岡山大学病院副院長 大塚文男教

授、事務局長 妹尾行恭様をご来賓としておいでいただきました。

新任幹事の平川聡史先生、松尾恵太郎先生の自己紹介ののち、支部長の井上喜久男先生からアラムナイ（岡山大学全学同窓会）の経過についてご報告がありました。

大塚文男教授のご講演は「全人的診療のできる総合内科医育成への取り組み」というタイトルでした。現在の内科は高度に専門化している中で、大塚教授が、専門医とのバランスをとりながら、総合内科医の育成に取り組んでおられることがうかがわれました。また

機構認定の内科の専門医制度のお話は、整形外科の私にとっても興味深いものでした。

懇親会は和やかな雰囲気ですすみました。懇親会中に妹尾事務長から岡山大学医学部の現況にかんするお話がありました。参加していただいた先生がたの話もはずんで、散会は9:30PM頃になりました。

東海支部は、中四国とは遠く離れていますので、直接的な岡山大学の医局のかかわりがなく、なかなか支部会の出席者が少ないのが現状です。総会の案内状も、返信をいただけるのが、約半数ほどです。井上支部長の御尽力により、最近はなんとか二けたの先生が参加していただけるようになりました。次回は、2年後の平成31年に総会開催の予定です。さらに多くの先生方

のご参加を期待しております。



平成29年度鶴翔会福山支部大会

藤岡正浩(昭61)

去る8月24日、福山ニューキャッスルホテルにて平成29年度の鶴翔会福山支部総会が行われました。本年度は卒業年度の末尾が1の方々担当幹事として受付などのお手伝いをお願いしました。参加人数は当初の予定では40名程度でしたが、当日参加の先生方が10人位来てくださり、盛大に行うことができました。

まずは浜田支部長の開会のあいさつで総会は始まりました。次に会計監査が行われました。荒木先生が監査としてご報告され参加会員の拍手をもって承認されています。

今回も本学から2名の講師の方をお招きすることができました。初めに岡山大学同窓会本部事務局から妹尾行恭事務局長に「鶴翔会の現況」についてお話をいただきました。そして岡山大学大学院整形外科学教室の尾崎敏文教授に「超高齢者社会を支える整形外科の展望」について御講演をしていただきました。「ロコモティブシンドローム」の話から始まりました。いかにして健康寿命を延ばすためにはロコモのケアが大事なことだと教えていただきました。次に骨軟部腫瘍の話です。尾崎教授は日本における骨軟部悪性腫瘍の中心的存在です。様々な症例を見せていただき、化学療法から手術療法までいろいろな治療を組み合わせれば素晴らしい成績を上げておられます。私が学生時代に教わった骨軟部悪性腫瘍の結末の悲惨さに比べ、現在の尾崎教授の治療成績の優秀さは、まさに隔世の感があると感じました。これからも鶴翔会福山支部は尾崎先

生のご活躍を頼もしく応援させていただきます。

飯島先生の閉会の挨拶で総会が終わり、隣の部屋で懇親会に移りました。その移動の間にホテルの写真室にて記念写真を撮っています。それが今回つけさせていただいている写真です。(皆さんリラックスして撮れてますか?)

懇親会が始まりました。乾杯の挨拶は檀浦先生にお願いしました。総会に参加された先生方はみんな懇親会にも参加されました。各々のテーブルで懐かしい話や近況の話で盛り上がっていました。楽しい時間はすぐに過ぎ去るもので夜10時を過ぎても話は盛り上がったままでしたが、ホテルの都合もあるので閉会とさせていただきます。今回、当番幹事の福山医療センター梶川先生にはご苦労いただき、誠にありがとうございました。

ところで、最近は他の鶴翔会の支部会もそうかもしれませんが、総会の参加人数が少ないのが問題です。特に福山は場所柄、岡山に近いので鶴翔会会員も多いのですが、もっと多くの先生方に参加していただけるはずですが、年々参加人数が少なくなっています。特に若い先生方の参加が少なくなっています。なんとか若い先生方にもう少し参加していただけるような会に



していきたいと福山支部理事一同考えています。今後ともどうか福山支部の先生方の御参会を何卒よろしく

お願い申し上げます。

平成29年度「鶴翔会」松山支部会 総会並びに特別講演会報告

松山市民病院
関川孝司(平2)

「鶴翔会」松山支部会総会は、平成29年11月18日に、「いよてつ会館」にて開催され、続いて開催された特別講演会は岡山大学Alumni愛媛県支部と合同で開催されました。

支部総会では前年度の活動報告の後、岡山大学本部の「鶴翔会」事務局長 妹尾行恭氏から、最近の「鶴翔会」についての報告が行われました。

続いて、Alumni愛媛県支部と合同で行われた特別講演会は、岡山大学 榎野博史学長から「しなやかに超えていく『実りの学都』へ」、四国がんセンター 谷水正人院長から「がん医療の未来を考える」、岡山大学Alumni 愛媛県支部幹事 頼木清隆氏より、「愛

媛の水問題について」と題して、それぞれご講演を賜りました。母校が新たなる領域に向けて挑戦を続けている事に感銘を深めると共に、卒業生一同、可能な限りの協力をいたさねばと心引き締めました。癌患者さんの罹患率を考えれば癌は決して他人事ではないこと、治療においては全人的な配慮を必要とすることを学ぶことができました。また、必要不可欠ながら、知識が欠如しておりました水の供給の状況について蒙を啓かれました。誠に勉強になり、会員一同、演者の先生方に心より感謝いたしております。改めて、厚く御礼申し上げます。

また、同窓生である、野志克仁・松山市長も出席され、合同特別講演会での挨拶、並びに、懇親会では恒例の歌を披露頂きました。

愛媛県には、数多くの卒業生がおり、各々の職域で日々研鑽しております。

本支部発展のため、今後とも引き続きのご支援、ご協力をお願い申し上げます。



第51回鶴翔会新居浜支部報告

渡 邊 雄 一 (平2)

第51回鶴翔会新居浜支部総会は平成30年2月10日(土)リーガロイヤルホテル新居浜において、岡山大学大学院医歯薬総合研究科研究科長・泌尿器病態学的那須保友教授と岡山大学同窓会事務局長の妹尾行恭様をお招きし、28名の先生方の参加で開催されました。

まず鈴木誠祐先生(昭58)の司会進行のもと、宮田栄一支部長(昭37)のご挨拶、昨年ご逝去されました故河島浩二先生(昭41)・故細川正雄先生(昭45)に対します黙祷の後、新居浜支部事務局から会員異動の報告(平成30年1月現在、会員数83名：開業医21名・勤務医56名・特別会員6名)があり、会計報告と監査結果(井上孝雄先生 昭40)が承認されました。

引き続き妹尾行恭事務局長より岡山大学での医療面における充実した活動の様子(岡山大学における医療への患者様方からの高い評価など)、鹿田会館(旧生化学棟大会議室)の整備改修、医学資料棟の復元・改修などの岡山大学医学部創立150周年記念事業の準備状況、学生の動向、国家試験の結果、クラブ活動の成績など、大学の近況をお話し頂きました。

記念講演は那須保友教授に「超高齢化社会における岡山大学のミッションー革新的医療創出拠点からCMA-Okayama構想一」と題してご講演を頂きました。泌尿器科領域における最新の話題に始まり、革新的医療創出拠点事業における岡山大学の研究内容(具

体例として人工網膜や癌抑制遺伝子REICを用いたがん治療の臨床治験が進行していることなど)、CMA-Okayama構想の概要、国連が推進するSDGs(持続可能な開発目標)に対する岡山大学の取り組みの内容とその取り組みに対し第1回「ジャパンSDGsアワード」特別賞が授けられたことなど、今そしてこれからの岡山大学のあゆみを医歯薬学総合研究科研究科長としてのお立場からお話し頂きました。母校が着実に発展する姿を出席者一同とても頼もしく感じました。

記念撮影に続き鎌田昌平先生(昭38)の司会で懇親会に移りました。古林太加志先生(昭50)の乾杯で幕を開け、那須教授、妹尾事務局長を囲んで和やかな雰囲気の中、和気藹々の懇親会となり、楽しい時間はあっという間に過ぎて、西本健副支部長(昭47)の一本締めで中締めとなりました。

最後に、大変お忙しいなか新居浜までお越し頂きご講演を賜りました那須保友教授、妹尾行恭事務局長にあらためて感謝致します。



H29年度鶴翔会近畿総支部報告

野 上 浩 實 (昭48)

平成29年度鶴翔会近畿総支部同窓会は平成30年2月25日(日)、リーガロイヤルホテル大阪で開催されました。今年は小春日和の好天にめぐまれての開催となりましたが、今年はインフルエンザの大流行もあり、体調を崩された先生方、また研修医の先生は多忙な勤務もあり、参加人数は18名となりました。

谷口武先生(昭60)の司会の下、先ず本年度亡くなられた小池宜之先生(昭20)、江口幸雄先生(昭24)、山本良介先生へ黙祷を捧げ、全員で御冥福をお祈りしました。次いで、近畿総支部長、野上浩實(昭48)、

阪奈和支部長、谷口武先生(昭60)、京滋部支部長の波柴忠利先生(昭40)より支部報告があり、総会出席の増加のため、若手の先生の参加が必須で、今回参加された草野研吾先生(平2)の友人達に声をかけて参加を募るなどの提案がありました。H28年度収支決算報告の後、妹尾事務局長より岡大医学部および鶴翔会の現況について報告があり、榎野博史学長を中心に、臨床研究中核病院としてさらなる発展を遂げるために、実りある学部、いろどりのあるAcademia、中四国大学の橋渡しの拠点となることが重要と力説されました。また150周年記念事業として、患者さんのためのアメニティスペースや旧生化学棟大講義室改修が完成しつつあるとの報告がありました。次に、岡山大学理事、病院長、岡山大学大学院医歯薬総合研究科放射線医学教授 金澤右先生より「岡山大学病院の実力」と

いう演題で特別講演を頂きました。岡山大学病院は全国で11大学しか指定されていない臨床研究中核病院に組み入れられ、中四国の大学病院の拠点として橋渡し役をになっています。また安全管理に重点を置き、数少ない専従の教授を配属しています。大学病院としての経営面にも努力され、外来数、診療単価、手術数などトップクラスとしてランクされているとのことでした。金澤先生の最新の治療法として腎がんに対するCTガイド下凍結療法が手術に匹敵する成果を上げているとのことでした。今後の高齢化社会における低侵襲治療として全国的に評価されているそうです。「むきあう」「つながる」「広がる」をスローガンとして臨床に研究に教育に病院経営に全力投球していく決意がうかがわれる講演でした。その後、全員で記念撮影があり、谷口武先生（昭60）の司会の下、中華料理に舌包みを打ちながら懇親会に入りました。今年は小人数なので、ほぼ全員に近況報告を頂き、またたく間に時間が経過し、来年の再会を約束して閉会となりました。今回の成果として、平成卒の先生方に多数参加して頂き、大いに盛り上がったことです。今後とも他の同門の先生方にも呼び掛けて、近畿地区の鶴翔会を盛り上

げていきたいと思っています。末尾ながら近畿総支部（大阪、奈良、和歌山、京都、滋賀、三重）に在住で来年度参加の希望の先生がございましたら、下記までご一報下されば、来年度案内状をお送りいたしますのでよろしく申し上げます。

〒598-0043 大阪府泉佐野市大西1-5-20
谷口病院 谷口 武（鶴翔会阪奈和支部長）
TEL 072-463-323 FAX 072-463-5714
e-mail : takeshi@taniguchi-hp.org



兵庫県鶴翔会神戸支部2月総会報告

三 輪 恕 昭 (昭39)

兵庫県鶴翔会神戸支部総会を、平成30年2月25日に兵庫県民会館7階で開きました。今年は雪も降る寒い冬で、皆外に出たがらないためと、総会当番にも当たらずに年々話題も少なかったために、集まりも少なく、出席者は後に示す写真のごとき、7名となりました（前列右より、山本光雄、三輪恕昭、青山裕一、後列右より溝淵知司、佐牟田健、切塚敬治、城洋志彦、敬称略）。会は支部長の挨拶で始まり、次いで平成29年度の神戸支部の活動報告、会計報告、会則と役員の確認や会員名簿について事務局より報告があり、会員名簿の顔写真添付については以後に持ち越しとなりました。他の事項については皆の承認が得られ、副支部長のまとめで終了しました。その後地下1階の食堂に席を移し、皆でわいわいとこの1年の出来事について楽しく語り

合い、解散しました。

次に会うのは、今年9月頃に行われる西播支部主催の兵庫県鶴翔会総会で、姫路で行われる筈です。兵庫県鶴翔会会員の皆様には、是非ご出席下さい。



平成30年度兵庫県鶴翔会 西播支部総会報告

山本 信 玄 (昭57)

平成30年度兵庫県鶴翔会西播支部総会が、平成30年2月24日（土）、姫路商工会議所にて開催されました。地域の開業医、勤務医合わせて34名参加されました。まず総会に先立ち塚崎高志塚崎病院院長の座長のもと松本俊彦姫路赤十字病院、第一内科・化学療法副センター長による「胃がん化学療法における新潮流」と題するご講演を拝聴しました。講演では、姫路日赤病院は555床を擁する西播地域がん診療拠点病院として機能しており、最近では新治療病床が増設され治療件数も増加していることをまず紹介されました。続いて、先生には胃がん治療の基本、歴史さらに術後、術前の抗がん剤の使用法、進行胃癌に抗がん剤は効果があるのか、などについてお教えいただきました。また切除不能胃がんなど標準治療が適応にならない場合や高齢者の胃癌の治療についても、副作用の少ないレジメンで治療していただけるとのことでした。三次治療以降が対象の免疫チェックポイント阻害薬の自験例を紹介され一年生存率がプラセボと比べて26%対11%と有意な効果が得られたそうです。最後に、消化管がんの患者さんの治療について、エビデンスも必要ですが、ひとりひとりに異なった病理的社会的背景があり、各科の医師、薬剤師、看護師などとのチームを組み総合的

に診療にあたるのが肝要である旨お話しいただきました。

特別講演は佐藤四三姫路日赤病院院長の座長の元、岡山大学病院医学部救急医学教授、中尾篤典先生に「岡山大学高度救命救急センターの展望について」と題してご講演をいただきました。講演では最初にカフェイン中毒、腸骨骨膜下血腫の症例など示し、医師は患者とその背景をよく推察しなければならないと説かれました。そして岡山大学救急科は今14床で稼働しているが先生が着任されて2年で1.5倍の症例数の増加があったそうです。救急医の心得としては、救急を応需して各診療科に丸投げすることをつつしみ、お断りをしないことを目的とせず、結果として断らなくていい体制を作るように努力することを挙げられました。岡山市で救急搬送される6400人のうち心肺停止が630例あり、救急病院で高齢者の受け入れを拒否される場合が多いそうで、88歳の心静止の女性がCPR要請された9件の病院で専門外として断られた例をあげられました。また、指先に釣り針が刺さった症例や幼児の下肢にお湯がかかって五十円玉くらいの軽い熱傷がある症例でも受け入れを拒否する例があり、なぜ「応急処置ならできます」と言えないのか、専門でないと責任を追及された時に困るからなのだろうか、医学部教育は専門のみに焦点をあてられているのでは？と疑問を呈しておられました。最後に、救急でかかわった脳死患者（38歳女性）の移植臓器提供例を示され、臓器提供を患者さんの家族に快く承諾してもらうに到った救急医の治療姿勢、こころがけの重要性を話されました。



続いて総会に移り、西播支部長瀧谷泰博先生の御挨拶の後、総会の議事は着々と報告、協議、承認されとどおりに会議を終えることができました。

そのあと鶴翔会事務局長妹尾行恭氏より「岡山大学医学部の近況について」と題してご報告をしていただきました。冒頭、厚労省の決定として（2月14日）がんゲノム医療中核拠点病院に岡山大学病院が指定された（全国で11機関）ことを報告されました。そして榎野博史岡山大学学長の指導の下、岡大を「憧れの大学に」という標語であらわせるような夢や希望のあるカルチャーゾーンに育てようとされていること、またその一環として、「橋渡しプロジェクト」と通じ中四国の大学や研究機関と連携し先進医療、革新的な医薬品、医療機器の創出を目指し、持続的発展が可能な国際的拠点へと成長する戦略を立てておられるとのことでした。

総会終了後、懇親会を行いました。山田脳神経外科多田英二先生の司会で姫路聖マリア病院若林隆信院長の御挨拶、続いて八重垣病院八重垣璟司院長の乾杯の御発声で開会しました。西播地域で活躍されている幅広い年代の先生方がつどい歓談し、旧交を温め和気あいあいとした雰囲気の中盛会のうちに会を終了することができました。



学生だより

系統解剖学実習の感想

医学部医学科2年生 青景珠実

大きな太陽が空の高い所から照り付け、まだまだ残暑が厳しい8月の終わりから系統解剖実習が始まり、もう早いもので3か月が過ぎました。いつのまにか木々の葉は色を変え、吐いた息が白くなり始める季節に移り変わっていました。そんな窓外の景色を眺める暇もなくご遺体と向き合った3か月間でした。

私はまず、右の上半身を解剖・観察させていただいた後、後半では左下半身を勉強させていただきました。最初のご遺体では、クラス全体が初めてのご遺体を前に、扱い方や向き合い方が分からず、先生方の華麗なメスの扱いに目を奪われながら、実習書や解剖書に従い必死に学んでいた気がします。そんな中でも、統制のとれた筋線維の流れの美しさや、支配・栄養しなければならぬ部位に一生懸命枝を伸ばす神経や血管の健気さに驚かされました。下半身に移ると、臓器や生殖器等にも触れることができ、私たちの生命活動の源を垣間見ることができました。心臓が本当に4部屋に分かれていることや、腎臓が背側から顔を出す姿、精巣の表面の白さや、あんなに大きな胎児を包み込む子宮の小ささなど、数えきれないほどの驚きと再確認の作業を行いました。

この系統解剖実習は医学生になり、人間の身体全体と向き合う初めての授業です。机上でしか学ばなかったことを実際に手で触り、メスを入れ、目で見て、絵で描き、本で調べて復習という工程をきちんと1つずつ踏めたか、今でも見たものを頭の中で再生できるか、同定できるかというところではまだまだ復習が必要ですが、解剖台に向かいながら考えることも多かった時間でした。実際にご遺体に触れながら先生方や班員とコミュニケーションをとる中で、これからの医学生生活や実際に医師になったときに他者の体に対して持たなければならない責任の重さ、患者さんとの向き合い方、そして他の医療従事者との付き合い方等について考える良い機会になりました。これからもこの3か月で感じたこと・学んだことを忘れず胸に抱いて、臨床の授業に進んでいきたいと思えます。

3か月という短い時間でしたが、ありがとうございました。

解剖学実習

医学部医学科2年生 林田 慎太郎

解剖学実習初日、僕たちは白衣に身を包んで立ち尽くしていた。直前まで、冷たく無機質な銀色の光を放っていた解剖台には、今や有機物と呼ぶべきご遺体が静かに横たわっている。

身内のほかに、遺体と対峙する経験などこれまでなかった。しかし、今や医学生となり、将来の礎とすべく人体解剖をすることを許された以上、慎んで勉強させてもらわなければという、義務感と、好奇心とが絢交ぜとなった心持ちでメスを持った。

体表を覆う皮膚を開いていくと、まずは黄色い泡沫状の脂肪の層が見えてくる。皮膚よりも掴み所のない脂肪の塊を更に取り去れば、生糸のように細い血管や神経の向こうには、オペラートのように薄く透けた膜が広がり、その奥に筋肉が見える。魅入るようにそれらを手に取りメスを滑らせ眺めているうちに、ふと、自分が亡くなった人間を扱っていることを思い出した。まるで、部屋の温度が急に下げられたような感覚に陥り、背筋が凍った。手を置き、ご遺体の身体の上を、舐めるように視線を滑らせれば、白布の隙間から覗く尊顔の口もとに視点は止まった。徐ろに、その顔掛けを外すと、心もち白く光ったような印象のあとで、静かに閉じられた両の目、少し圧力を受けたような鼻、緩く結ばれた唇が見えた。

その日から約三か月間、毎日のように解剖に勤しんだ。終えた頃には、割り当てられた二体のご遺体は原形を全く留めぬほどになり、失われた均衡は、眼前の遺体から僕の脳裏に知識として生まれ変わったのだと感じた。語弊を恐れず感想を述べれば、解剖は楽しかった。人体の神秘に、地球の外に広がる宇宙よりも更に広大な世界を見たような気になった。パスカルは、ひとの想像力は宇宙をも包み込むと言ったが、その宇宙に包まれているはずの人体が隠し持つ神秘は、ひとの想像力の範疇を超えているのではないかとの実感が湧いた。自らの身体を、捧げてくれた方々には感謝の念で一杯である。この先、医学から離れることは生涯ないだろうが、折にふれ、この経験を思い出せる自分でありたい。

系統解剖実習を通じて学んだこと

医学部医学科2年生 福坂尊之

9月11月の3ヶ月にわたって行われた系統解剖実習もひとまず終わりを告げた。私にとっては長いようで短い実習であったと思う。しかしこの実習を通して大きく分けて三つのことを学んだ。

一つ目は学習目的でもある人体の構造への理解である。人体の構造に関しては一回生の前期に概略を学び、一年後期から二年前期にかけて各論（組織学、神経構造学、骨学）を学んできた。それによって人体の臓器の配置や血管・神経等の走行など教科書的に一定程度の理解は深まったと思う。しかし実際の人体を以って実物を見たり触ったりしたものは、教科書からは想像もできないようなものであった。例えば神経や血管の走行である。教科書で見ると細かな神経・血管などは省かれて描かれていることが往々にしてある。しかし実際に人体を見てみると血管は全身中に張り巡らされ、神経は筋肉一つ一つに結びついていて、これは実際に解剖をして見なければ知り得ないことである。

二つ目は初歩的な手技の獲得である。解剖は当然様々な道具を用いてなされる。多くはピンセットとメスであるが、それ以外にも手動・電動ノコギリ、骨鉗子などを用いて剖出を行った。最初の方はメスの切れ味の鋭さを知らず、見るべき組織を傷つけてしまうなどの失敗はあったものの、徐々に的確にメスを用いることができるようになった。解剖学実習を通してこのような初歩的な手技の獲得をすることができた。

そして最後は献体をされる方々の思いである。我々の行った解剖学実習は多くのご遺体の下に成り立っている。献体される方々の思いは実に様々で、ある方は岡山大学病院で以前お世話になった恩返しだと仰っておられ、ある方は医学の発展に寄与できるのではないかと、また他の方は最後の社会への奉公だと仰っておられた。このような話はともしび会会長の方の講演会や授業内で鑑賞したビデオでも知ることができたが、私が一番忘れられない11月18日に行われた解剖体慰霊祭の際の遺族代表の方の挨拶である。その方のお母様は昨年孤独死されてしまい、遺族の方も生前の関わりを十分にできていなかったことを悔やまれていが、せめて最後の親孝行として、亡くなられたお母様が生前希望しておられた岡山大学への献体を決めたのだと仰られた。その際の表情や語気の強さから、遺族の方の、亡くなられたお母様の意志を継ぐ強い思いなどが私の

心を掴んで離さなかった。この解剖実習は教員や献体された方のみならず、遺族の方などの思いもあって成り立っていたのだということを感じた。

この解剖学実習を通じて、今日の医学の発展は医療従事者のみならず、多くの人々の献身によって成り立っていることを改めて認識した。今後とも決意を新たにして医学への道を邁進して参りたいと思う。

(※学年は、執筆時のものです)



新聞より

岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など (2017.9～2018.3)

日付	媒体	見出し	備考
2017/ 9/18	山陽新聞 MEDICA	13 名医に聞く 脊椎・脊髄疾患治療	最新装置生かす技術や経験 田中雅人 (昭63)
		15 未来を見つめる精神科医療	地域医療 新たな取り組み HARE ACTの支援 岡 沢郎 (平7)
		16 最期までその人らしく	目指す在宅医療解説 小林直哉 (昭62)
2017/ 9/24	山陽新聞	33 石井十次 遺徳しのぶ	孤児院前身創立130周年 岡山で記念祭 故石井十次 (明22)
2017/ 9/25	山陽新聞	14 シンポ「岡山蘭学の群像」第8回	医学教育張つての礎築く 藩医学館に薫陶受け継ぐ 槇野博史 (岡山大学長)
2017/ 9/29	読売新聞	29 いのちのリレー 臓器移植学ぼう	来月15日、北区で講演会 中尾篤典 (岡山大救急医学)
2017/ 9/30	山陽新聞	35 将来のがん治療法と期待	BNCT研究加速 岡山大と名古屋大が協定 岡山大学
2017/10/ 1	読売新聞	12 病院の実力 血管外科治療	腹部大動脈瘤 負担少ない治療普及 ステントグラフト入れ破裂防ぐ 西宮渡辺心臓血管セ、榊原、倉敷中央、福山市民、近森
		26 病院の実力 岡山編 血管外科治療	治療後の定期検査大切 岡山大病院、榊原、倉敷中央、津山中央、岡山医療セ、福山市民
		27	
2017/10/ 2	山陽新聞 MEDICA	13 名医に聞く 中皮腫の研究・治療	患者の労災認定や救済を推進 岸本卓巳 (昭53)
		14 高度医療で地域を支える乳がん	野上智弘 (平14)
		15 未来を見つめる精神科医療	精神科病院における多様な治療アプローチ 難波多鶴子 (昭60)
		16 川崎医科大学総合医療センター開院記念	第10回市民公開講座 深澤拓也 (平6)、山辻知樹 (平2)、浦上 淳 (会員)、羽井佐実 (昭57)
2017/10/ 4	山陽新聞	30 重症ぜんそくに新治療	気管支内視鏡で加熱、気道広げる 患者8人全員発作減 岡山医療センター
		220人分の献血目録贈る	池田和真 (昭55)
2017/10/ 8	山陽新聞	37 福島で脳死判定 肺は岡山大へ	岡山大病院
2017/10/ 9	山陽新聞	28 50代女性への脳死肺移植終了	岡山大病院
2017/10/12	山陽新聞	29 24人7団体に助成金を贈呈	両備禮園記念財団 木下理恵 (岡山大細胞生物)
2017/10/13	山陽新聞	28 岡山大病院で2例目脳死判定	腎臓は岡山の2人に 岡山大病院
2017/10/16	山陽新聞 MEDICA	23 救急制度見直しを	臓器移植普及月間 中尾篤典 (岡山大救急医学)
		13 名医に聞く 安心の産婦人科医療	救急、災害対応のモデルに 平松祐司 (昭52)
		15 専門病院の力 脳・神経・運動器	サイバーナイフって、何？ 津野和幸 (昭60)
2017/10/17	山陽新聞	28 未来を見つめる精神科医療	最近の認知症治療のアプローチ 認知症疾患医療センターの役割 石津秀樹 (昭58)
		28 不妊治療 卵子提供72%肯定	法整備が急務 中塚幹也 (昭61)
2017/10/18	読売新聞	27 心臓移植待つ子どもに光	「拡張型心筋症」幹細胞移植 岡大病院臨床研究 王 英正 (岡山大病院新医療研究開発センター)
		31 拡張型心筋症の子 初の幹細胞移植	
	山陽新聞	33 細胞移植の臨床研究開始	拡張型心筋症で ドナー頼らず小児救命へ

日付	媒体		見出し		備考	
2017/10/20	山陽新聞	32	精神障害者に地域支援を	家族会の全国大会開幕	山本昌知 (昭36)	
2017/10/29	山陽新聞	31	患者救済へ活躍を	松岡良明賞受賞を祝う会	岸本卓巳 (昭53)	
2017/10/30	山陽新聞	22	484、485例目の脳死 肺は岡山大へ		岡山大病院	
2017/10/31	山陽新聞	29	40代女性に脳死肺移植		岡山大病院	
2017/11/ 5	読売新聞	17	病院の実力 めまい治療	めまい 多くは耳を治療	専門知識と技術持つ「相談医」	姫路聖マリア、屋島総合
		24	病院の実力 めまい治療 岡山編	命にかかわる危険性も		岡山大病院、倉敷中央
2017/11/ 6	山陽新聞	22	中皮種診断・治療拡充を	新薬早期実用化へ尽力	松岡良明賞受賞	岸本卓巳 (昭53)
	山陽新聞 MEDICA	13	医学教授に聞く	世界目指し地域見つめる		豊岡伸一 (岡山大呼吸器・乳腺内分泌外科学)
		14	予防ファースト 生活習慣病	岡山西大寺病院が市民公開講座	連携の岡山労災病院	岡山西大寺病院、岡山労災病院
		15	専門病院の力 ～脳・神経・運動器	スポーツ整形外科とは		中村恭啓 (平2)
		16	未来を見つめる精神科医療	障がい生きる知恵を育む		武田俊彦 (昭60)
2017/11/ 8	読売新聞	32	県立病院 残業年2100時間超	香川の2施設 過労死ライン上回る	香川県立中央病院	
2017/11/15	山陽新聞	36	大阪で脳死判定 肺は岡山大へ		岡山大病院	
2017/11/16	山陽新聞	32	医学的理由で脳死肺移植断念		岡山大病院	
2017/11/17	山陽新聞	28	命を継ぐ 臓器移植法20年 岡山の現場から	2 開いた扉 初の判定「足が震えた」	田中信一郎 (昭50)	
2017/11/19	山陽新聞	33	高齢在宅医療の不安解消へ	御津医師会ネットワーク 入院先 迅速確保で成果	12病院と連携 退院支援も	岡山医療セ、岡山済生会、岡山中央、光生、榊原、岡山協立、福渡、岡山記念、済生会吉備、万成
		34	命を継ぐ 臓器移植法20年 岡山の現場から	3 忘れられない患者 悔しさ胸に新術法開発		伊達洋至 (昭59)
2017/11/20	山陽新聞 MEDICA	13	医学教授に聞く	患者に寄り添い全力尽くす		前田嘉信 (岡山大血液・腫瘍・呼吸器内科学)
		14	岡山市東区で地域医療を守る	総合診療医とは		小橋雄一 (昭56)
			消化器がん 一体にやさしい治療	胃がん		井上雅文 (会員)、高木章司 (昭63)
		15	専門病院の力 ～脳・神経・運動器	脳梗塞の症状、治療と予防		河田幸波 (平3)
		16	高度医療で地域を支える救命センター	岡山初 肺がん患者会発足	闘病の悩み語り合う	
2017/11/22	山陽新聞	32	命を継ぐ 臓器移植法20年 岡山の現場から	5 運に委ねる 1歳を救った小児ドナー	大藤剛宏 (岡山大病院臓器移植医療センター)	
2017/11/23	山陽新聞	30	命を継ぐ 臓器移植法20年 岡山の現場から	6 QOD 納得できる「最期」考える	中尾篤典 (岡山大救急医学)	
2017/11/28	山陽新聞	30	女性医師復職を倍増	県保健医療計画素案 99の数値目標設定	岡山大医学部、石川 紘 (昭40)	
2017/11/30	山陽新聞	29	卵子・卵巣、精子 凍結保存に助成を	医師や看護師ら県に陳情 若年がん患者支援	中塚幹也 (昭61)	
2017/12/ 1	山陽新聞	31	新型インフルに備え	県と岡山市 初の合同訓練	岡山市市民病院	
2017/12/ 3	読売新聞	16	病院の実力 糖尿病	生活改善で合併症予防	患者とチーム医療で取り組む	岡山大病院、神戸市立西市民、岡山済生会、榊原、三豊総合、愛媛県立中央
		29	病院の実力 岡山編 糖尿病	失明や腎不全 怖い合併症	脂っこい食べ物、塩分控えめ	岡山大病院、岡山済生会、榊原、倉敷中央、岡山医療セ、中国中央

日付	媒体		見出し		備考	
2017/12/ 3	山陽新聞	27	主治医選びに役立てて	乳がん 治療法分かりやすく説明	20年近く勉強会	辻 尚志 (昭54)
		28	高原滋夫基金 2施設に助成金			故高原滋夫 (昭6)、高原郁夫 (昭45)
2017/12/ 4	山陽新聞	22	納得の肺がん治療は	市民公開講座 専門医らと語る		木浦勝行 (岡山大病院呼吸器・アレルギー内科)
	山陽新聞 MEDICA	13	医学教授に聞く	専門性生かした総合力が強み		増山 寿 (岡山大産科婦人科学)
		14	岡山市東区で地域医療を守る	高血圧～家庭血圧が大事です～		井久保卯 (昭63)
		14	消化器がん - 体にやさしい治療 -	食道がん		高木章司 (昭63)
15	高度医療で地域を支える総合内科と感染症内科				藤田浩二 (平19)	
2017/12/ 6	山陽新聞	30	30代女性脳死 岡山大腎移植へ			岡山大病院
2017/12/ 7	山陽新聞	28	40代男性への脳死腎移植終了			岡山大病院
2017/12/20	山陽新聞	28	女性脳死判定 肝臓は岡山大へ			岡山大病院
2017/12/21	山陽新聞	30	40代女性への脳死肝移植終了			岡山大病院
2017/12/23	山陽新聞	34	18歳未満脳死、腎臓は岡山大へ			岡山医療センター
2017/12/24	山陽新聞	25	60代女性へ脳死腎移植			岡山医療センター
2017/12/26	山陽新聞	26	働くって 第3部現場の模索	5 医師の負担 「過重の象徴」打開図る		池上琢磨 (昭50院)、片岡仁美 (岡大地域医療人材育成セ)
2017/12/27	山陽新聞	28	政府のSDGsアワード 岡山大に特別賞			槇野博史 (岡山大学長)
2017/12/29	山陽新聞	25	本紙が選んだ県下10大ニュース	⑨ 岡山大で「世界初」両肺分割の脳死移植		岡山大病院
2017/12/30	山陽新聞	26	脳死判定500例超す	待機患者解消遠く		岡山大病院
2017/12/31	山陽新聞	23	脳死肺と肝臓 2人に移植			岡山大病院
2018/ 1/ 5	山陽新聞	28	医歯薬学研究科 那須科長を再任			岡山大
2018/ 1/ 7	読売新聞	14	病院の実力 がんの病院食	病院食 がん治療の支え	管理栄養士がメニュー工夫	岡山大病院、倉敷中央、津山中央、三豊総合、済生会今治、愛媛県立中央
		27	病院の実力 岡山編 がんの病院食	口から食べ栄養 大切		岡山大病院、倉敷中央、津山中央、済生会岡山総合
2018/ 1/15	山陽新聞	29	人工透析 就寝中に	岡山県内初導入	有効に時間活用 仕事への影響軽減	重井医学研究所附属病院
		27	地域医療発展誓う	設立70周年記念式典		岡山県医師会
	山陽新聞 MEDICA	15	医学教授に聞く	チームワーク発揮し手術		笠原慎吾 (岡山大心臓血管外科学)
		16	岡山市東区で地域医療を守る	骨粗しょう症と胸やけ		原田良昭 (昭57)
16	消化器がん - 体にやさしい治療 -	大腸がん			永原照也 (平15)、池田英二 (昭61)	
18	健康寿命延伸に力	岡山県医師会70周年	新会館で県民啓発活動		石川 紘 (昭40)	
2018/1/16	読売新聞	16	医療ルネッサンス 増える心不全	「地域パス」患者情報共有		伊藤 浩 (岡山大循環器内科学)
2018/ 1/19	山陽新聞	30	507例目の脳死 肺は岡山大へ			岡山大病院
2018/ 1/20	山陽新聞	30	40代女性への脳死肺移植終了			岡山大病院
2018/ 1/21	読売新聞	2	光を当て がん細胞攻撃	新免疫療法 治験へ 3月にも頭頸部対象		土井俊彦 (平元)

日付	媒体		見出し		備考
2018/ 1/23	読売新聞	30	岡大 SDGsパートナーシップ賞	持続可能な開発目標推進	岡山大
2018/ 1/29	山陽新聞	21	肺の病気テーマ 来月セミナー		済生会岡山総合病院
			依存タイプ別禁煙方法紹介		川井治之(平4)
2018/ 1/31	山陽新聞	24	のぶみさんの絵本読んでね	岡山大学病院に寄贈	岡山大病院
2018/ 2/ 2	山陽新聞	26	18歳未満脳死、肺は岡山大病院へ		岡山大病院
2018/ 2/ 3	山陽新聞	28	50代男性への脳死肺移植終了		岡山大病院
2018/ 2/ 4	読売新聞	24	病院の実力 皮膚の病気治療	皮膚病 命に関わることもがんや重症薬疹に注意	岡山大病院、岡山医療セ、高松赤十字
		31	病院の実力 岡山編 皮膚の病気治療	紫外線 発症リスク 進行がん 新薬続々	岡山大病院、岡山医療セ、中国中央、福山市民 森実 真(岡山大皮膚科)
2018/ 2/ 6	山陽新聞	32	生体肺区域移植に成功	父の肺下部分割し女兒へ	部位大きく 岡山大病院
	山陽新聞 MEDICA	17	がんと生きる アピアランスケア	ウィッグで前向き 社会とつながる	深松絃子(岡山大病院皮膚科)
		18	「骨盤臓器脱」治療 最先端の腹腔鏡手術で成果		小林知子(平20院)
		19	造血細胞移植に手帳	白血病患者らに配布 受診時提示 かかりつけ医と連携	岡山大病院
		20	冬の感染症 どう対処	ノロウイルス 急激な脱水症状に注意	今城健二(昭58)
2018/ 2/15	山陽新聞	32	岡山大など11施設選定	「がん先進医療」中核拠点病院 厚生労働省検討会	岡山大病院
2018/ 2/16	山陽新聞	4	がん遺伝子検査先進医療指定へ	厚生労働省部会了承	岡山大病院
2018/ 2/19	山陽新聞 MEDICA	13	岡山市東区で地域医療を守る	リウマチってどんなもの	北村亜以(平14)
			消化器がん 一体にやさしい治療	肝臓がん	小橋春彦(昭59)、山野寿久(平3)
		14	模擬吻合、切開に児童没頭		榊原病院
2018/ 2/20	山陽新聞	32	岡山大で脳死肝移植始まる		岡山大病院
2018/ 2/21	山陽新聞	28	病気の子ども支援考えて	院内学級教諭ら取材	小田 慈(昭50)
		30	40代男性への脳死肝移植終了		岡山大病院
2018/ 2/27	山陽新聞	31	病気の子どもに教育機会を	医療関係者らシンポ	小田 慈(昭50)
2018/ 3/ 4	読売新聞	15	病院の実力 不整脈の治療	不整脈、危険性が見極め肝心	原因部位を焼く根治療法も 岡山大病院、榊原、福山市民、香川県立中央、近森
		27	病院の実力 岡山編 不整脈	心不全や脳梗塞リスク	岡山大病院、榊原、津山中央、福山市民、岩国医療セ
2018/ 3/ 5	山陽新聞 MEDICA	13	医学教授に聞く	ダビンチでより安全に	永井 敦(昭57)
		14	胃切除後障害の少ない胃がん手術	センチネル理論で小さく切って治す	磯崎博司(昭49)
2018/ 3/ 9	山陽新聞	30	脊髄損傷 機能回復顕著	抗体投与、IPS由来細胞移植併用 マウス実験成功	西堀正洋(岡山大薬理学)
2018/ 3/14	山陽新聞	30	520例目脳死、肝臓は岡山大へ		岡山大病院
2018/ 3/15	山陽新聞	30	岡山大の脳死肝移植断念		岡山大病院
2018/ 3/17	山陽新聞	34	性別適合手術施設申請		岡山大病院、光生病院

【お断り】媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われまますが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡大病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。

歴史の広場

岡山大学附属図書館医学部分館・ 資料室物語② 生田安宅〈前編〉

公益財団法人岡山県郷土文化財団
主任研究員 万城 あき

【生田安宅（1840～1902）】



生田家は代々岡山藩の藩医を務めた家で、生田安宅は最後の岡山藩主池田章政の侍医として東京に滞在中、大病院（東京大学病院の前身）で西洋医学を学んだ。岡山藩の医学館ができると教授に任じられた。廃藩置県の後、医学館廃絶の危機にあった時は、同僚とともに診療費を運営にあて

その存続をはかる。その後、医療と医学生の養成ができる県病院設立に尽力した。幕末から明治初期の岡山の医学の流れを知る貴重な資料と、安宅の高い教養を物語る自作の漢詩集などからわかる人となりを紹介する。

【生田家文書】とは

生田安宅は岡山の近代医学の黎明期にその土台を作



【傷寒論】

漢方医がまず身につける医学の知識。安宅をはじめ幕末の医師の多くはここから始まり、西洋医学へと進んだ。

り、現在の岡山大学医学部発展の基礎を築いた一人である。その功績は、岡山大学医学部の教授であった中山沃先生が生田家のまとまった資料に基づいて、岡山文庫『岡山の医学』などに紹介された。

その後、生田家のご子孫から岡山藩主池田章政が生田家に贈った書「春輝」という書について、その価値が知りたいという問い合わせを岡山県郷土文化財団にいただいた。当時、古文書や郷土資料を担当していた人見彰彦参事が、書の由来がわかるような資料があるのなら、それらとあわせて総合的に検討しないとういうものかわからないと回答したところ、同学部に寄託している資料ともども当財団に寄贈するので調査してほしいということになった。

そこで、資料を管理されていた同学部の第二解剖学教室（当時）に連絡を取り、平成10年（1998）に生田家の資料が当財団に移管され、「生田家文書」として保存管理することになった。

「生田家文書」のおおよその構成は、生田家が岡山藩に提出した「奉公書」の下書きや先祖に関する書類など江戸時代からの史料、生田安宅の医学館時代から県病院への過渡期の文書・辞令、主に安宅が勉強したと思われる医学書、漢詩を趣味とした安宅の草稿、安宅の子息たちの賞状などである。

岡山藩藩医としての生田安宅

生田安宅とはどのような人物だったのだろうか。

彼は、天保11年（1840）岡山藩医の家に生まれ、幼少期は藩学校で漢学を学び、18歳の時、京都時習堂で広瀬元恭について蘭方を、岡山では難波経直（抱節の子）に入門し産科学を修めて岡山で開業した。明治元年（1868）に出仕し、明治2年藩主池田章政に従って東京に行った折、大病院で英国人医師ウィリスからイ



『日講紀聞』（明治2年 東京医学校）

明治2年（1869）に安宅は藩主池田章政について上京した時、東京でイギリス人医師ウィリスに学んだ。これはそのウィリスの講座の内容が刊行されたもの。

脚注：この記事は大塚ホールディングス(株)発行「大塚薬報」2017年5月号/No.275、6月号/No.276から許可を得て転載

ギリス流の医学を半年間学んだ。同年7月に藩主章政に従って岡山に帰った後は西洋内科・外科として開業し、引き続き章政の侍医も務めた。明治3年、西洋医学を導入して医学の開化を願う藩主章政の発案で、若い医学生に西洋医学を学ばせる医学館設立の意向が3月に示され4月に開校した。安宅は多くの藩医をはじめ、優秀な郡医者らとともに6月に教授に任じられた。父客衆は隠居していたが、明治4年1月に員外として医学館出仕を命じられている。

医学館創設は、明治元年に政府から医師の免許制と医学研究の振興の方針が示され、各地でも医業に関わる者へその覚悟を伝えるようにとの布告があったことへの対応策でもあった。この後、藩の公的記録『留帳』（池田家文庫）の明治4年5月には医業を志す者は医学館での「検校」（取り調べ）を経て、許可のない者は医業に携わってはならない、これは朝廷のお達しでもあると心得るよという記事があることからうかがえる。

のちに県病院が設立された頃に安宅が書いた「病院設立の趣旨（仮題）」には、「藩知事公（章政）大に此に見る所あって、異常の噴発（奮発：気力を奮い起こすこと）を起し医学館を創立し」とあり、医学館創設は政府の意向に沿っただけでなく、章政の西洋医学導入に対する並々ならぬ決意がうかがえるのである。

また、明治3年の藩の『留帳』（池田家文庫）には、医学館が設立されて間もない6月に教授と学生の間でトラブルがあり、章政の裁定で責任者をはじめ何人かの教授、学生が処分された記事がある。章政はこの事件に対してかなり厳しい態度で臨んでいる様子がある。安宅はこの騒動には巻き込まれていないが、こ

した章政の医学館にかける熱い志を身近で見ていたはずである。

医学館維持に奔走 そしてその後

廃藩置県の後、医学館の改組や維持費がなくなるなどで、多くの同僚たちが辞めていったが、安宅たち数人はとどまり、遠近を問わず診療に出かけて得た診療代で医学教育の灯を守った。

明治6年（1873）6月、岡山県はその功労を表彰し、11月には新たに岡山県病院として維持費を出すこととなり、治療と医学生の養成がはかられることとなった。こうして医学館は県病院に引き継がれ、明治8年に安宅は初代病院長となり医療と学生の教育にあたった。

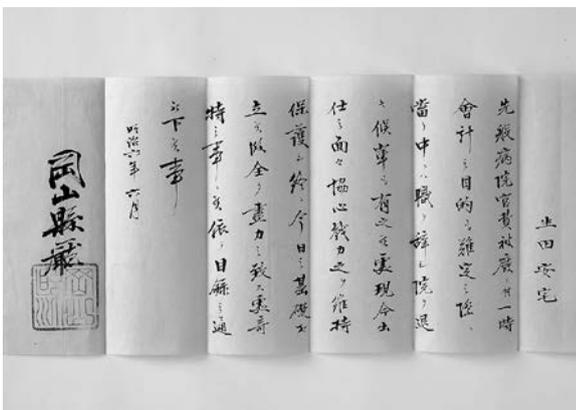
明治9年、将来性を考えてイギリス医学を修め海軍軍医寮にいた若栗 章を病院長に招き、自らは副院長となり、引き続き診療と医学生養成に携わった。

『生理提要附録』の翻訳本刊行

明治12年には、アメリカのダルトンの生理学のうち生殖機能の部分を翻訳し『生理提要附録』として刊行した。この本には、生命の誕生とその成長が細胞レベルから解説されている。

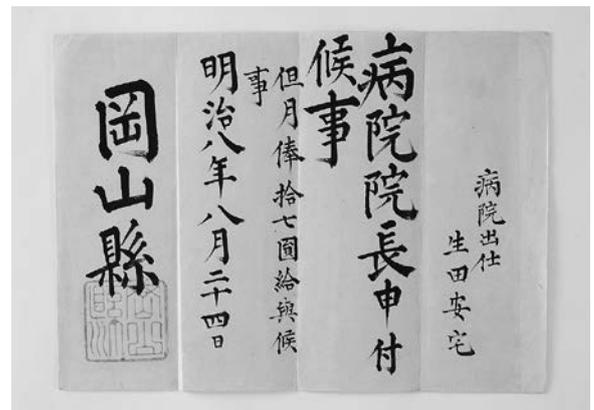
これについて、安宅の自序には、生理学については数多く刊行されているが、胎生発育について説いたものは少なく、学生と話をしてみても胎生については曖昧なことを鑑みてこの本を訳した、と当時の様子を伝えている。ここには、学生と親しく言葉を交わしながら、必要な新しい知識をもたらそうという教育者の姿が垣間見える。

ひるがえって考えると、安宅が修業していた時代に



感謝状（明治6年）

廃藩置県の後、医学館（医学所）維持のための官費がなくなり、辞めていく医師も多かったが、安宅ら数人の医師は診療などで資金を調達し維持に努めた。その功績に対して、岡山県から贈られたもの。



病院長の辞令（明治8年）

安宅たちが必死に守った岡山藩医学館の灯は岡山県病院へと受け継がれ、西洋医学による医師の養成と医療ができるようになった。

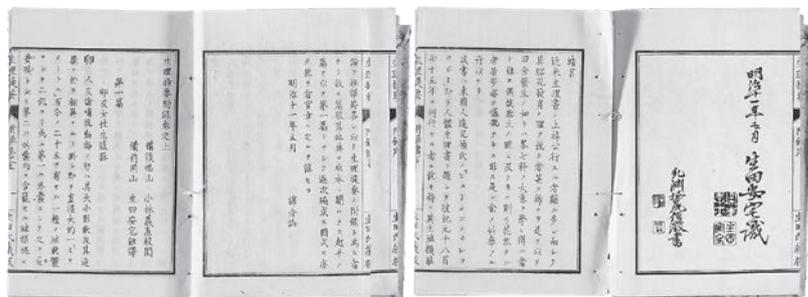
安宅は初代病院長に任命された。県病院は現在の岡山大学医学部の基礎の一つとなった。

安宅がアメリカのダルトンの生理学のうち、生殖関係の部を訳したもの。西洋医学の他の知識はあっても、胎生発育に関しては曖昧な部分の多い医学生のために出版した、と序文にある。当時の医療や医学知識の状況が垣間見える。あわせて、安宅は序文に「田舎医生」と書いているが、当時の岡山が地方にありながら、こうした翻訳書が理解できる医学の先進地であったこともわかる。



『生理提要附録』(明治12年 細謹舎)

『生理提要附録』序文



は新たな生命をどうこの世に誕生させるかというお産に力点が置かれていたわけだが、新しい時代になり諸外国からの知識は生命誕生の仕組みとその成長過程を教えるものであった。これは、岡山では画期的な事柄ではなかったと思われる。

その後、当時の県令高崎五六の招聘でアメリカ人医師が来岡したことで大きな改革があり、安宅は一時は職務を解かれたり、また再任用されたりなどの中、病院長はドイツ流の医学を学んだ清野 勇に交代した。組織内のさまざまな改革で葛藤も続く中、コレラが流行した時にはその対策にも奔走している。

池田章政の書「春輝」

さて、当財団に「生田家文書」が寄贈されるきっかけとなった池田章政の書「春輝」は、どういうものであったか。結局、その由来が記された史料はなかったのだが、落款の印をみると「備前国主」とあることから、まだ藩主だった頃の書ではないかと思われる。

また、岡山藩の『留帳』(池田家文庫)、生田家が藩に提出するための「奉公書」の下書き、安宅の書き物を見ると、明治初期に起きた政府の改革に連動した動き以上に西洋医学による医師養成にかける章政の心意気、安宅が言うところの「異常の噴発」を込めた書ではなかったかと思われる。それを生田容衆・安宅親子

に託したかったのではなかったか。

長い年月生田家に伝えられたこの書は、岡山藩主池田章政の志と、それを受け継ぎ岡山に医学の開化をもたらした生田安宅たちの努力を忘れてはならない、と語りかけているようでもある。

岡山大学医学部の資料群とともに

生田家の資料は岡山大学医学部から当財団に移管されたが、豊富な医学関係資料は同大学附属図書館医学部分館・資料室で保存管理、顕彰されている。そして、これらの資料群は研究での活用が望まれるところでもある。

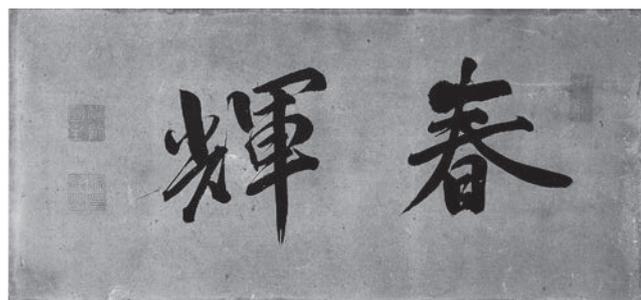
このシリーズでは、岡山藩医学館に始まり、県病院や医学校などを経て今日の岡山大学医学部となるにいたるまでの医学の進歩に大きな足跡を残した方々の資料、さらには同大学で所蔵されている蘭学の系譜などの資料が紹介される。

個々人の事績や思想は小さなことでも、やがてその積み重ねが歴史となり、そのうえに輝かしい未来がある。医学部資料室などの資料群とともに、「生田家文書」も未来を考える資料となることを願っている。

【参考文献】

- ・生田安宅関係資料(岡山県郷土文化財団所蔵)〔履歴書、辞令、「生田安宅自伝草稿」、「生田安宅病院尽力 岡山県」、「病院設立の趣旨(仮題)」、『生理提要附録』(生田安宅訳)]
- ・『岡山大学医学部百年史』其編集委員会(昭和47年)
- ・岡山文庫『岡山の医学』中山 沃(昭和51年日本文教出版)

※写真はすべて、岡山県郷土文化財団所蔵



書「春輝」最後の岡山藩主池田章政が生田家に贈った書

岡山大学附属図書館医学部分館・ 資料室物語③ 生田安宅〈後編〉

公益財団法人岡山県郷土文化財団
主任研究員 万城 あき

「生田家文書」には、生田安宅の若い頃の文章、漢詩の草稿などがあり、医学に対する思いが綴られている。前号で紹介した県病院設立の趣旨の起草文を見ても、漢学から出発した簡潔に整理された文体から、その思いがよく伝わってくる。また、空船という雅号を持ち、漢詩を趣味とした。漢詩を通じて、県の官吏で漢詩人の多田松莊、教育者で書家の森谷金峯などと広い交流があった。安宅の漢詩は自選集『空船詩艸』にまとめられている。

県病院から駆黈院院長へ

生田安宅の事績を伝える一文に、次の部分がある（「生田安宅（医師岡山市大字東田町）」）。

「岡山県医学の進歩著しく、他府県に秀絶する世人の聴視する所にして、其れ第三高等中学校の設立を見るに及んでや夙に医学部の本県に設置せらるるもの決して偶然に非ざるなり。抑も、本県医学の進歩斯くの如く翹楚の令誉を荷ふもの、其れ始め旧藩主池田侯の意を尽くすにあり。岡山県権令石部氏の力を致すあり、県令高崎氏の大に務むるありて、其れ時に廃されんとするを起し、其れ或いは絶えなんとするを回し、以て今日に至るものとは雖も、其れ能く直接に之が維持恢復に駆馳拮据の功あるもの生田安宅君其の人なり。

（中略）嗟乎、君本県病院の浮沈盛衰幾變遷、其間耐忍努力終始渝らず、以て今日の興運を見る、其胸中言ふ可からざるものあらん」

「旧藩主池田侯の意」は、明治3年（1870）の岡山藩による医学館設置で、安宅は教授となり、廃藩置県後は維持費がなくなる中、安宅ら数人の献身的な努力で医学教育の灯を守ったことにある。岡山県権令石部氏と県令高崎氏の力は、明治6年11月、岡山県から維持費を出して岡山県病院として、治療と医学生養成がはかられたことをいう。こうして医学館は県病院に引き継がれ、明治8年に安宅は初代病院長となった。

その後、明治9年にはイギリス医学を修めた若栗

章を病院長に招き、自らは副病院長に退き、また、明治12年には県令高崎五六が招聘したアメリカ人医師が、県病院は墮落沈滞しているとして改革を迫る中、安宅は急激な改革に反対したようで、一時は降格される。明治13年には、東京医学校出身で、当時国が進めていたドイツ流の医学を学んだ清野 勇が病院長に着任し、県病院は県医学校となり、岡山でもドイツ流の医学教育が根付くこととなった。

明治10年に県病院に設置された駆黈院が明治14年に県病院から切り離されることになり、同年1月に安宅は県病院の職務を解かれ、同年7月に駆黈院の院長となり、梅毒対策と娼妓の健康維持をはかることとなった。岡山藩医学館から続く、治療のほか医学生の養成に当たってきた役目からはここで一応退くことになった。

『岡山大学医学部百年史』ではこの出来事を、「新しい医学校教育の編成にあたって、交替を余儀なくされた生田安宅らの旧藩医の病院職員の配置転換人事」とし、もともと駆黈院は警察・衛生行政部門が担当すべきもので、この人事によって「地方医育機関の機構が、ここに県の警察・衛生行政とは別個のものであることが、明確化された」とまとめている。

その後、明治21年には第三高等中学校の医学部が岡山に置かれ、まさに「岡山県医学の進歩著しく、他府県に秀絶する世人の聴視する所」というさまたったものと思われる。

生田安宅を支えたもの

安宅の事績を伝える文の最後の「本県病院の浮沈盛衰幾變遷、其間耐忍努力終始渝らず」に、安宅たちがさまざまな困難に立ち向かった姿がみえる。医学館から県病院、そして県医学校までの変転の中、治療と医師養成に尽力してきた旧藩医たちへの毀誉褒貶や葛藤もあったが、それでも医学教育に変わらぬ情熱をもって貢献したのである。

時代の変革期にはありがちな軋轢といってしまうがおしまいが、逆風の中、安宅はなぜ強くいられたのか。

旧藩主池田章政の意志を受け継ぎ、西洋医学による医師養成を何とか軌道にのせたいと思ったのか、あるいは、安宅自身の医学にかける熱い思いが支えたのか。

安宅は若い頃から漢詩を趣味とし、「養斎」「空船」などの雅号を持ち、漢詩を通じての交友も広かった。ここからは、生田安宅が残した漢詩、文章から彼の心情に迫ってみたい。

安宅少年と読書

幼い頃の家訓として、よく学び、医を修め、その傍らで文筆（漢詩や韻文）にも通じるように、というのがあった。

若い頃の漢詩には、たしかに読書に関するものが多い。書物は「医書」とわざわざ書かれることもある。春の宵に、秋の虫の音を聞きながら、と何時いかなる時も彼は読書をしている。安宅の『読書雑記』には、中国古典などから得た知識や言葉のメモが所狭しと書き込まれており、その量に驚かされる。

また、安宅の生活が垣間見えるものに、早起きと虫歯を詠んだものがある。「春の遊びに出かけるため早く起き、鶏が鳴くのを待ち、支度も済んだが、朝食がまだ整っていない」というもの。「虫歯のどうにもならない痛みを抱えて書物も読めず、早く抜いておけばよかった、神のような技で抜き去り、この呻吟を忘りたい」と嘆くもの。かしこまった内容ではない、生き生きとした少年時代の安宅の姿が浮かぶ。

草稿集『東遊稿等雑記帳（仮題）』と「深造」の名乗り

父容衆が岡山藩に提出した「奉公書」（家臣が自分の事績を藩に報告する書類）の下書きには、変動する時代の中、まだ20歳前後の若者もその波にさらされていた様子がみえる。

岡山藩では、嘉永6年（1853）に安房国（現千葉県南部）と上総国（現千葉県中部）に設置された異国船警備のための「御備場」を預かることになり、容衆は安政元年（1854）に安房国北条の御陣屋に詰めることになった。同年、15歳で記され始めた草稿集『東遊稿等雑記帳（仮題）』の最初には、房総に派遣された兵士たちに脚気で苦しむ者が多く、土地の医者聞いてその治療に当たったと父から聞いた、などの治療体験が書き留められている。この草稿集が書かれたのは、岡山で父や難波経直について医学を学んでいた頃で、当時の自筆の講義録にはしばしば「生田深造」という

名が記される。

この名乗りについては、『孟子』の一節「深造自得」からとって「深造」とするという一文がある。意味は「学問の奥深い意義をきわめて我が身にわきまえる、造はいたるの意」（『新字源』角川書店）で、学問や医の道を修める気構えを当時の名乗りにしたのである。また、「医の道は広く、大きい」と言い、「内外科のほか古今の産科、眼科、鍼灸の術までその蘊奥^{うんおう}を極めたい」と書いている。

安政3年（1856）2月、17歳で初めて藩主池田章政に謁見が許され、まだ無役ではあるが、岡山藩藩士としての勤めが始まった。

『東行記』

安政5年（1858）には、19歳の安宅が父に伴われて安房国北条の御陣屋に赴いている。『東行記』は、その道中の東海道の景色を自分なりの筆にのせて書くのではなく、書物から得た内容を見極めるように、また、藩主池田家のゆかりの地で知ったさまざまなことを記している。

また、時折故郷の母と弟を案じる様子があるが、この旅は物見遊山ではなく、いざという時には戦争になりかねない状況の最前線に向かう旅であったことを考えるとかなりの緊張状態であったものと思われる。

手紙・草稿から

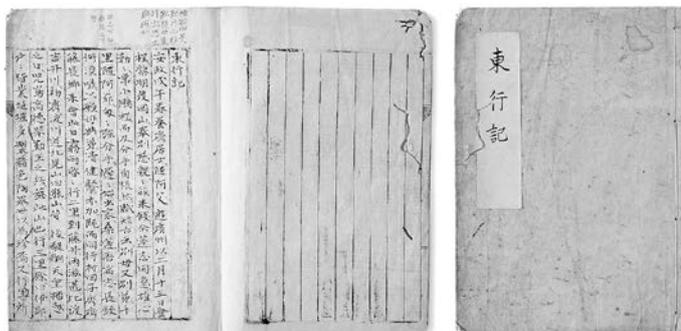
万延元年（1860）、21歳の安宅は、京都時習堂の広瀬元恭のもとで「合信（ホブソン）」の訳本と出会い、西洋医学を学ぶ熱い思いを綴っている。

また、慶応2年（1866）前後の草稿集『養齋文稿』^{ことわり}には、友人に「陰陽五行による治療は曖昧で、理が空虚である。自分は儒書や漢詩を読んだり、書いたりするのは好きだが、それは医の道とは違うものである。



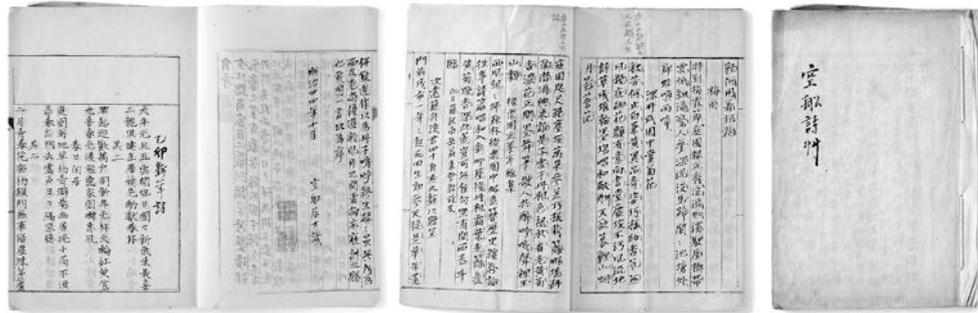
『産術弁』裏面（岡山県郷土文化財団所蔵）

生田安宅は、若い頃は鶴吉、原、深造などと名乗っていた。養齋、空船は号。「深造」は『孟子』の一節に「深造自得」【学問を深く究めて会得する】があり、これを名乗りにして、真摯な態度で学問に向かおうという心構えがうかがえる。



『東行記』（岡山県郷土文化財団所蔵）

生田安宅が父の任地、安房国についていった時の道中記。



『空船詩舛』明治34年（岡山県郷土文化財団所蔵）

若い頃からの漢詩や文章を、亡くなる前年の明治34年（1901）にひとまとめでしたものの。中には漢学者として有名だった藤沢南岳（「通天閣」、「寒霞溪」などを命名した人物）が来岡し、後楽園で交流会が開かれた時のことも記されている。このほかにも数多くの草稿が残され、岡山の漢学者、書家などの感想や添削もみえ、文人とつきあいがあったことがうかがえる。

解体学で体内が明確にわかり、病理学で病気の原因を察する、薬性学で薬効・毒性を知り、窮理実測に基づいたものを勉強して、医術に活かしたい」という内容の手紙を書いている。

それは、後に「病院設立の趣旨（仮題）」で、医学生も西洋医学の施療の実効性を知ると曖昧な漢方は取るに足らないものだ実感する、と書いていることとも符合する。

青年期に、医の道を進むうえで自分の探していた答えは西洋医学にある、という思いを得て、実践してきたことがわかる。

士（サムライ） 生田安宅

20歳前後の草稿集に自分が医の道を志したのは、「富貴を好むからではない、功名は身を誤る、ただ父母の心で慰め、天下の民を寿す」と書いている。これは、医者としての心がけそのものである。

また、安宅たち武士が生きた時代は、朝廷や藩主の意向に従うことは絶対であった。

「病院設立の趣旨（仮題）」では、武士であるのに漢方に従事することは厳命を犯すとまではいわないが、開化を妨^{ぼうがい}碍する人だ。朝廷や県庁の意向を遵守して医学の進歩を扶^{たす}けるのだ、と言っている。

安宅の文によく出てくる窮理、理を窮める姿のほか、武士としてのあり方、精神の持ちようがうかがえる。

少年期から和漢の書物や西洋医学の勉強を通じて得た、武士、医者としての哲学が生涯にわたり人生を支えたのだろう。さまざまな状況下での毀誉褒貶にくじけず、常に医学発展のために尽くすというのは、安宅の人生のあり方そのものだったのだろう。

『空船詩舛』

空船は安宅が晩年に用いた雅号で、『空船詩舛』は

若い頃からの漢詩の自選集である。序文には、「父母の訓戒で、よく学び、医術を修め、空き時間には詩文を習った。人生の大半では西洋医術に専ら力を尽くし、開業もし、医学生の指導もした。多忙を極めたが、今や息子たちも医学の道に進み、やっと自分の時間が持てた。この辺りで風流を楽しみたい気持ちが起き、悠々自適に老いを養い、かつての詩文と近作を選んでみた。こうした風月を楽しむ心が残っていたのは、父母の教えがあったからにほかならない」ということを書いている。

漢詩や韻文の中には、花鳥風月を楽しむだけでなく、友人とのやりとり、漢詩壇の人々との交流を知るものなどがある。別世界に遊ぶことが、生田安宅の豊かな人間性につながっていた。

若い頃、京都時習堂に学ぼうとした頃、母は病床にあった。なかなか出かけない安宅に、母は「自分を大切にすることこそが大孝だ」と励まし、遊学させた。京都では西洋医学を知り、理を窮めるすばらしさは後の人生の心の糧となっていく。京都遊学中に亡くなった母、医師として安宅を導いた父の恩に報いるためにも、安宅は医の道に尽力したことがこの詩集からも読み取れる。

明治34年秋、截癱症に罹り、翌年衰弱のため63歳で死去した。追悼文には、温厚篤実な人柄で、勤儉を旨とした生活であったとある。

【参考文献】

- ・生田安宅関係資料（岡山県郷土文化財団所蔵）〔履歴書、辞令、草稿集、「生田安宅」、『読書雑記』、「東遊稿等雑記帳（仮題）」、『東行記』、「病院設立の趣旨（仮題）」、『空船詩舛』「碑文」]
- ・『岡山大学医学部百年史』其編集委員会（昭和47年）
- ・岡山文庫『岡山の医学』中山 沃（昭和51年 日本文教出版）

関連病院だより

社会医療法人製鉄記念広畑病院

病院長 橋 史朗

この度は岡山大学医学部の関連病院としてご承認いただき、誠にありがとうございます。

当院を御紹介申し上げます。

当院は、兵庫県姫路市の南西部に位置する許可病床数392床27診療科の中播磨医療圏の基幹病院です。昭和15年日本製鉄広畑製鉄所の企業病院として開設され、平成10年に分社化、同23年に社会医療法人製鉄記念広畑病院となりました。同25年には姫路救命救急センターを併設し、同26年にヘリポートの共用が始まりました。

兵庫県がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院、兵庫県僻地診療拠点病院等の認可を受けています。

医師は、消化器内科、救急科を除き、神戸大学各科から派遣を受けています。岡山大学救急科より28年10月から非常勤救急医1名週1の派遣を頂いています。

以下に、施設の概要を示します。

「病床数」392床の内訳

ICU 18床（4対1）、救急病棟 20床（4対1）
一般病床 298床（7対1）、地域包括ケア病床 56床（13対1）

「診療科」内科、消化器内科、循環器内科、緩和ケア内科、腎臓内科、糖尿病内科、神経内科、外科、消化器外科、乳腺外科、血管外科、頸部外科、肛門外科、胸部外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、皮膚科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、放射線科、理学診療科、リウマチ科、病理科救急科、麻酔科、救急科

「医師数」常勤医 64名、初期研修医 16名、

「主な医療職」

看護師 378名、薬剤師 24名、診療放射線技師 20名、臨床検査技師 23名、臨床工学技士 18名、理学療法士16名、作業療法士 3名、言語治療士 2名、管理栄養士 3名、社会福祉士 7名、

「主な設備」

CT 64列 1台、20列 1台、16列 1台
MRI 3テスラ 1台、1.5テスラ 1台
放射線治療装置 1台、血管造影装置 2台

救命救急センターについて述べます。

平成19年にマスコミで報道された食道静脈瘤破裂患者の中播磨圏域19施設不応事例が発生しました。他圏域の市民病院へ搬送中に死亡されました。これを契機に当地での救命救急センター開設の機運がおこり、平成25年に当院に「姫路救命救急センター」が開設されました。

活動実績ですが、救急車受け入れ台数は3400～3700台/年walk in患者は4500～7400人/年です。

開設時は救急医9名でスタートでしたが、28年秋には4名に減少しました。救急部中尾教授のご厚意で28年10月から、非常勤救急医週1日、1名の派遣を頂いています。救命救急センターの維持は圏域の救急医療に大変重要な意味があり、本当に有り難いご支援で感謝に堪えません。ここで改めてお礼を申し上げます。

最後になりますが、岡山大学病院の皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。



社会医療法人三栄会ツカザキ病院

院長 脳神経外科 夫 由彦

この度は岡山大学医学部の関連病院としてご承認いただき、誠にありがとうございます。

当院は兵庫県姫路市西部に位置し、中播磨・西播磨医療圏の急性期医療、救急医療の中核として活動している病院です。JR網干駅から徒歩12分の田畑の真ん中に立地しています（写真）。周辺地域は人口当たり医師数が全国平均よりかなり少なく、かつ医師の高齢化率も高いため、競合する急性期医療施設はありません。病床数 201 床と中規模ではありますが、急性期一般病院として診療密度の高い地域医療をおこなっています。

ここで当院施設の概要を以下に示します。

【所在地】 兵庫県姫路市網干区和久68番 1

【病床数】 201床（HCU 6床、SCU12床、一般病棟159床、地域包括ケア病棟24床）

【診療科目】 外科・脳神経外科・消化器外科・心臓血管外科・呼吸器外科・総合内科・消化器内科・循環器内科・神経内科・眼科・整形外科・乳腺外科・泌尿器科・人工透析内科・麻酔科・放射線科・リハビリテーション科

【医師数】 71人

【職員数】 641人（平成29年12月1日現在）

看護師264人、薬剤師13人、放射線技師13人、検査技師18人、理学療法士25人、作業療法士10人、管理栄養士5人、臨床心理士1人など

【主な施設設備】 手術室用移動型DSAシステム、手術用ナビゲーション完全連動フラットパネルCT（0アームシステム）、MRI、マルチスライスCT撮影装置（64列）、FPDデジタルアンギオグラフィーシステム、血管内焼灼用高周波（ラジオ波）治療機器、体外衝撃波結石破碎装置等（平成30年度 バイプレーンDSA2台、256列MD-CT、3テスラMRIの導入予定）

当院に対する地域の期待は高く、病院全体の症例数は年々増加しています。平成29年（1～12月）の診療実績は新規入院患者数 6,485名、病床稼働率99.7%、救急対応患者数 6,959名（内救急車搬送 2,923名）、手術件数 11,467件でした。特に救急医療・脳卒中医療・心血管系医療において、他の基幹病院からも紹介を受ける中核的な医療施設となっています。

第二代理事長 塚崎高志は岡山大学第2外科出身であり、そのご縁で以前より岡山大学第2外科、心臓血

管学教室から常勤医・非常勤医を派遣いただいております。心臓血管外科は現在、三井秀也（岡山大学S57年卒;主任部長）、増田善逸（岡山大学H5年卒;部長）、田内祐也（医長）の常勤医3名体制となり、昨年は約100件の心大血管手術を行いました。

当院は中播磨・西播磨地域で唯一の『心臓血管外科・循環器内科・維持透析施設』を備えた病院です。急性心筋梗塞などに対する再灌流療法や緊急心臓血管外科手術を365日24時間途切れることなく対応すべく、循環器内科・心臓血管外科医が常時当直体制を整えています。これもひとえに岡山大学心臓血管学教室のご支援の賜物と、心より感謝しております。

また基幹型臨床研修病院として研修医受入もしています。平成30年度には1・2年次合わせて9名となる予定です。医局だけでなく病院全体がより一層、明るく活気に満ちた雰囲気となるものと楽しみにしています。

兵庫県中播磨・西播磨医療圏においては、2022年に当院近隣の姫路循環器病センターと製鉄記念広畑病院の統合移転が決定しています。移転後の地域医療を維持するため、広畑地区に当法人が新病院を運営することも決まりました。また今年度、この網干地区ツカザキ病院の増床増築も許可されました。まさに地域の方々の当院への期待が高まっている状況です。今後益々の増加が確実となる『救急医療・脳卒中医療・心血管系医療』において適時適切な医療を提供できるよう、全職員一丸となって励む所存です。

当院に対する地域の期待に応える為には、岡山大学医学部、各診療機関方々からのご支援ご協力が必要です。岡山大学関連病院の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



医療法人 重仁「まるがめ医療センター」

理事長 青木 伸弘

この度は、岡山大学医学部の関連病院としてご承認頂き、誠にありがとうございます。

当センターは、昨年8月迄は「麻田総合病院」として香川県の中讃地区に位置し、約73年の伝統を誇る民間病院として地域に根付いておりましたが、縁あって2014年4月より当法人の下に経営移譲が成され、昨年の9月に「まるがめ医療センター」と名称を変えて現在に至っております。

当センターのある香川県の中讃地区といいますと、近隣には「香川労災病院」、「四国こどもとおとなの医療センター」「坂出市立病院」と公的医療機関に囲まれ、民間病院としては坂出市に「回生病院」が位置しており、それぞれが急性期病院としての役割を主に果たしております。

当院は開設当初は、産婦人科が主の医療機関でしたから、当院の30代から40代の職員の中には、当院で産声を上げた職員も少なくありません。

当法人傘下になって約4年近くになりますが、95%の職員は前法人からの継続雇用であり、経営体質の違いを経営側も職員側も感じながらの疑心暗鬼な出発でした。ですから、新たな体制の違いに付いていけない職員も多く、お互いの力量を模索しながらの1年でした。しかしながら、医療機関である以上間違いが許される訳もなく、今残っている職員は、強制的に古いものを捨てながら、新しいものに取り組まなければならない改革・改善に当初は戸惑っていたことと想像します。

私が就任した年の秋には、その戸惑いを早期に打破すべく、医療機関としての理念の作成を果たし、更に経営姿勢、行動指針を追加して、速やかにこの船がスムーズに出航できる体制を整えました。

病院から医療センターに変えた大きな理由を申し上げますと、もともと「健診センター」「小児リハビリセンター」「内視鏡センター」「糖尿病センター」などの既存のセンターがありましたから、センター化するにあたり、医療・医療機器の発展により内科や外科の様な今となっては利用する患者様にとって分かり難い(科)の表示ではなく、疾患名や臓器名の様に患者様に理解しやすい表示にすることが重要との観点と、近隣医療機関との競争ではなく、共存・共栄を考えた場合に、患者様同様、同僚医療機関からも認知されやす

い表示が良いのではと考えました。更に、今後の少子・高齢化社会での厳しい厚生行政の下では、中途半端な(科)の存在は、返って生き残りが難しくなるとの判断で、近隣医療機関に無い新たな科の増設により、当院の特徴をより鮮明にアピールしていきたいと考えております。例えば、手術だけではなく疼痛緩和や化学療法、腹水還元など癌に関わる様々な症状の改善を目的とした「癌治療支援センター」や、今後は女性の増加が予想される「乳腺・甲状腺センター」などの増設なども考慮しており、実際この近隣にはそのような専門的な医療機関はほとんどありません。その他にも本格的な種々のセンター化に向けて、着々と準備を進めているところであります。

【病床数】 300床

【診療科】 内科、神経内科、呼吸内科、呼吸器外科、消化器外科、消化器内科、循環器科、外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科(含人工透析)、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、神経小児科、糖尿病内科

【医師数】 25人

【病床機能】

- * 一般病棟 (内科・外科・整形外科・皮膚科・眼科)
- * 回復期病棟
- * 障害者病棟
- * 地域包括ケア病棟

【主な医療職】 看護師135人、薬剤師5人、理学療法士39人、作業療法士12人 言語聴覚士5人、放射線技師8人、臨床検査技師15人、臨床工学技士3人、管理栄養士6人、栄養士2人

先述したように、急性期医療機関が犇めく当該区域では、競合しない科の選定に始まり、何にもまして働く職員にとって魅力的な病院作りを早急に形作ることが先決であり、その結果、患者様に信頼され、且つ周囲の関係者から心から喜んで貰える医療機関として成



長して行きたいという願いを抱いています。その為には、遣り甲斐のある職場・職務を客観的に評価する職員の評価規定の作成や、部下から信頼される上司としての中間管理職の教育・指導を率先してやり、更に院内のレベルアップの為に院内勉強会や学会・研修会へ行った職員の帰朝報告会などを、頻繁に行うことで内外共に「日々是研鑽」を怠ることなく、病院発展の為の努力を継続して行きたいと考えております。この3年間、日々の学習の強化、医療チームとしての各部署との緊密な関係・協力の強化など、インフラ整備を徹底して行って来ましたし、地域での多職種連携研修会への積極的な職員の参加も多く、今後もレベルを上げて更なる充実を目指したいと考えております。本年5月には「日本医療評価機構」の受診に向けての準備もしており、立ち止まっては居られない状況でもあります。

「最高・最新・最善の医療の飽くなき追求」という高い志の下、常に職員は、心にこの言葉を刻みながら、毎日の勤務に精進しております。今後は、大学における症例だけでなく、関連病院での症例もお役に立てると言う話も聞き及びますので、先生方の大切な症例に少しでもお役に立てるような関連病院として整備をしていく所存ですので、なにとぞ今後とも宜しくお願い申し上げます。



海外だより

2017年度 韓国整形外科学会 —日本整形外科学会 トラベリングフェロー体験記

平10 古松 毅 之

この度、第61回 韓国整形外科 (Korean Orthopaedic Association, KOA) 学術集會にトラベリングフェローとして参加する機会をいただきましたので、学会の様子や開催地であるソウルの雰囲気を含めて報告します。KOAとの公式なトラベリングフェローシップは今回がはじめてとのことで、日本整形外科学会からは北海道大学整形外科の小野寺智洋先生と私の2人が派遣されることとなりました。最初で最後のフェローシップとならないように、「日本人整形外科医の存在感をしっかりとアピールしてこなければ…」と私自身3度目のトラベリングフェローでしたがプレッシャーを感じていました。

会場はインチョン国際空港から車で約1時間の距離にあるGrand Hilton Seoulで、小高い丘の上にあるソウル中心街から離れたホテルでした。参加者1000名規模の学会を開催するにはいい施設だったように感じます。KOA学術集會は春と秋の年間2回開催されており、春は地方都市で開催され、秋は主にソウルで開催されアカデミックかつ国際的なものになるとのことでした。今回は秋期学会にあたり、2017年10月19日から21日までの3日間にわたり学術集會が開催されました。英語のセッションは全体の1/3ぐらいを占めており、かつスライドやポスターは全て英語で作成されていました。海外からの参加者でも内容を理解できる構成となっており、国際化を推進しようとしている学会では取り入れるべきシステムだと感じました。

若い韓国人医師の英語の発音は素晴らしく、かつスライドの構成や内容などもレベルの高いものでした。おそらく英語論文として投稿済み、もしくは投稿直前といった演題が採択されていたのでしょう。その他、個人的に導入したいと感じたものとして、「口演の残り時間がスライドの左上に表示される」、「3演題まとめて発表し、総合討論で締めくくるメリハリのあるスタイル」などが挙げられます。残念な点としては、若い韓国人医師は遠慮しているためかほとんど質問せず、中堅以上の先生方ばかりが質問する点が挙げられ

ます。また、会場からの質問に演者が少しでも答えられない素振りをみせると、すぐに上級医が助け船を出してしまうことも残念に感じました。

会長招宴は300人規模の洋風ディナーパーティーであり、Suh会長と写真を撮る機会にも恵まれました(写真1)。また、招待演者やトラベリングフェローをそれぞれスライドで紹介する心配りに感銘を受けました。海外からの招待者はどちらも日本からが最多であり、韓国と日本における整形外科医師の交流を今後も継続させたいと感じました。

日本は台風接近に伴い、全国的に雨が降り続いていたようですが、ソウルは快晴で汗ばむ陽気でした。小野寺先生と連れ立って市内観光へ出発です！ナンデムン市場の雰囲気を楽しみながら、ミョンドンでお決まりのKoreanフードをいただく。古宮巡りで疲れたら、カフェで一休み。それにしても、コーヒーショップの多さは異常です！（ハングル文字があふれる所で、理解できる看板がコーヒーショップぐらいしかないから、そう感じるのか…？）ミョンドンは新宿といった感じ。「綺麗なOLがたくさんいますけど…、んっ？さっきすれ違った人と同じような…」そうなんです！髪型、顔の雰囲気、メイクまでもそっくりなんです！若い社会人女性はみんな美容整形美人かと邪推してしまいます。一方、中学生の集団やおば様方は、それぞれ異なる「お顔」をしています。原宿と渋谷を融合したような街であるホンデ(写真2)では、顔を包帯でグルグル巻きにした女子の集団や、大きな絆創膏が黒いマスクからはみ出ている女性達が、ショッピングを楽しんでいます。日本もそうですが、韓国では女性が本当に元気！日本から来たおじ様も負けてはいられないと、小野寺先生と一緒に「焼肉」・「真っ赤な料理」・「マッコリ」を楽しみながら韓国の夜は更けていくのです…。

最後にこのような機会を与えていただきました日本整形外科学会 国際委員会の先生方、岡山大学整形外科の尾崎敏文先生・教室員の先生方、KOAトラベリングフェローシップ関係者の方々、ご同道いただいた小野寺智洋先生に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



写真1: KOA会長招宴。左から筆者、Suh会長、小野寺先生、古賀先生（東京医科歯科大学）。



写真2: 若者の街ホンデ。ストリートパフォーマーがいたるところに。夜はもっと賑やかになる。

教室だより

(平成29年8月～平成30年3月)

細胞組織学

昨年10月より、岡山大学・中国東北部大学院留学交流プログラム(O-NECUS)の留学生Liu Yangさんを迎え、佐藤助教とゲノム編集による眼疾患モデル動物の作製を試みています。本年3月には、土生田大学院生が医歯科学専攻修士課程を修了し、4月より本学医歯薬学総合研究科博士課程に進学します。

研究面では、総説「昆虫脚再生の分子メカニズム」について*Int J Dev Biol*誌に発表しました(2018年;板東講師、大内教授)。昨年9月には、本学医歯薬学研究科主催のブレインストーミング2017に藤田助教、大内が参加し、「ゲノム編集動物の作製」について情報提供しました。学会活動としては、第57回日本先天異常学会(8月)にて「視覚器の発生と先天異常」について講演しました(大内)。第72回日本解剖学会中国・四国支部学術集会(10月)にて、「CRISPRモザイク変異マウスの解析」(土生田)について、第40回日本分子生物学会年会(12月)にて「自然免疫シグナルと昆虫脚再生」(板東)について発表しました。第123回日本解剖学会(3月)では、土生田(*Fgf10*モザイク変異体の解析)、佐藤(小型魚類非視覚性オプシン3類の研究)、藤田(破骨細胞分化の研究)、板東(再生におけるToll様受容体の役割の研究)が発表しました。第22回眼科分子生物学研究会(3月)にて眼基礎研究紹介の講演をしました(大内)。

教育面では、昨年11月に細胞組織学特別講義として、近藤洋一先生(大阪医科大学教授)、佐々木順造先生(岡山大学名誉教授)、金井正美先生(東京医科歯科大学教授)よりご講義いただきました。1月には、発生学特別講義として、井関祥子先生(東京医科歯科大学教授)より「顔面・頭頸部の発生」について、中島裕司先生(大阪市立大学解剖学教授)より「心臓形態形成と先天性心疾患」についてご講義いただきました。(藤田 記)

人体構成学

9-11月に医学科2年の系統解剖実習を行いました。現在、技術職員らはより安全で解剖し易い固定法

の開発を進めています。L'Aquila大学Antonouli大学院生が来学し研究しました(9月1日-11月29日)。

学会等の活動として、小見山技術職員が「SSS法(Saturated Salt Solution Method)講習会」(9月23-24日、東京)に参加、品岡助教は、26thWorld Congress of Lymphology(9月25-29日、バルセロナ)、第10回蛍光Navigation Surgery研究会(10月7日、京都市)に参加、ICG蛍光リンパ管造影法による皮下リンパ管解剖研究を発表しました。大塚教授・小阪助教・品岡助教は、日本解剖学会第72回中国・四国支部学術集会(10月28-29日、広島市)に参加、ワークショップでは「医療専門職教育における解剖実習の現状と課題:岡山大学の場合」と題して大塚教授が発表しました。篤志解剖全国連合会「第35回献体実務担当者研修会」(11月24日、松山市)では「解剖学教室(献体実務担当者)の負担について」大塚教授が講演しました。

また、大塚教授、百田助教、谷野事務職員は“7th International Seminar Conference-a multidisciplinary cross talk from basic research to virtual reality(11月9-11日L'Aquila大学)”に参加し解剖学研究と教育についての討議を行いました。また今春もL'Aquila大学より2名の学生が春の解剖学実習に参加します。

長年にわたり当教室およびともしび会の運営にご尽力頂きました、溝口技術職員と谷野事務職員が今年度で退職します。寂しい限りですが、益々のご健勝をお祈りします。(小阪 記)

脳神経機構学

人事関係では、昨年10月から岡山大学交換留学制度(EPOK)により当研究室に留学していた、イギリスSurrey大学のKyle Quinが8月に帰国しました。また10月には、同じくSurrey大学のRhiannon Redmanを迎えました。日本語の学習をする傍ら、パーキンソン病モデル動物における神経保護薬の探索およびメカニズムの解明に関する研究を行っております。

研究活動では、7月の第27回創薬・薬理フォーラム(岡山)で磯岡院生と菊岡院生が研究成果を発表しました。9月の23rd World Congress of Neurology(Kyoto, Japan)では、浅沼教授がパーキンソン病治療薬ロチゴチンのアストロサイトを標的としたドパミン神経保護について、宮崎が農薬ロテノンによる非細胞自律性ドパミン神経障害へのアストロサイトの関与について発表しました。9月の第39回日本生物学的精神医学会・第47回日本神経精神薬理学会合同年会(札幌)では、宮崎がロテノンによるアストロサ

イトの機能異常について、磯岡がパーキンソン病モデルへのコーヒー成分カフェイン酸、クロロゲン酸投与による神経保護効果について、菊岡院生が抗うつ薬ミルタザピンのアストロサイトにおけるメタロチオネイン発現誘導およびドパミン神経保護効果について発表しました。10月の第11回パーキンソン病・運動障害疾患コンgres (MDSJ) (品川) では、宮崎がロテノン暴露による腸管神経障害とコーヒー成分による神経保護について発表しました。11月の47th Annual Meeting of Society for Neuroscience (Neuroscience 2017) (Washington, DC) で、菊岡がミルタザピンの5-HT_{1A}レセプターを介したドパミン神経保護作用について発表しました。10月13-14日に日本毒性学会生体金属部会主催メタルバイオサイエンス研究会2017 (第44回岡山脳研究セミナー合同開催) を岡山国際交流センターにて主催しました。多くの先生方にご参加いただき盛会のうちに終了することができました。また、研究会では宮崎、磯岡、菊岡がそれぞれ発表し、菊岡が関賞 (若手優秀研究賞) を受賞しました。主催にあたり、浅沼が公益財団法人両備糧園記念財団 学術研究集会助成および一般財団法人積善会 研究助成をいただきました。

研究活動の詳細および発表論文に関しては、教室のホームページ (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mnb>) をご覧下さい。(宮崎 記)

細胞生理学

10月上旬、中国から二人の留学生がやってきました。一人は岡山大と中国東北部5大学との共同プログラムO-NECUSによる修士課程特別聴講学生の李佳桐 (リ・ジャトン)、もう一人は博士課程の黄榮生 (ホワン・ロンシュヨン) です。李さんは、教授の松井が兼任教員を務める中性子医療研究センター (NTRC) の井川和代准教授に、黄さんは当教室の藤村助教に指導を受けることになりました。

修士2年生の福永と山田は、社会人になる準備をしながら追加実験や学会発表の準備、後輩たちの指導と、残り20日余りとなった学生最後の時間を過ごしています。修士1年生の4名は、3月1日の新卒採用活動解禁に向け準備をしながら、課題研究に励んでいます。2月18日の日曜日に開催した同門会には、学位を取得して40年以上になる垣内氏、早川氏、板野氏の大先輩から、昨年修了した大松、佐々木、佐藤、立壁まで幅広い年齢層の37名が参加しました。県内や香川はもちろん、千葉、山梨、静岡、大阪、神戸、鳴門、米子、

宇部、熊本など遠方からも多くの会員が集まり、松井のこれまでの労をねぎらうとともに旧交を温める、とても楽しい会となりました。

10月28日、大学院生ヘイン・ミン・ラットが第69回日本生理学会中国四国地方会 (於: 徳島) でオキシトシンの神経保護作用についての研究成果を発表、その内容が評価され奨励賞 (学生) に選ばれました。12月5日、第1回NTRCシンポジウム『中性子医療の近未来~これからのがん治療~』がJホールで開催され、松井が次世代ホウ素薬剤開発と国際原子力機構との連携について講演しました。3月には、西木が分担執筆した『脳神経化学』が化学同人社から出版されました。高松市で開催される第95回日本生理学会大会 (3月28日~30日) では、松井が特別講演をする機会をいただくとともに、シンポジウム「神経幹細胞の可塑性と異常」を企画します。松井の退職記念講義は、5月に行う予定です。(西木 記)

システム生理学

当研究室は基盤研究 (S) 「メカノメディスン: メカノ医工学を駆使した再生医療・生殖医療への展開」および新学術領域研究「宇宙からひも解く新たな生命制御機構の統合的理解」の研究課題「重力変化を含む力学的ストレスに対するメカノセンシング機構」を継続して行っています。

今期は以下の学会で参加・発表を行いました。第55回日本生物物理学会年会 (9月: 成瀬、森松)、日本宇宙生物科学会第31回大会 (9月: 成瀬)、日本宇宙生物科学会第31回大会 (9月: 成瀬)、AGCテクノグラス株式会社・学術講演 (9月: 成瀬)、第40回日本生体医工学学会中国四国支部大会 (10月: 成瀬)、第69回日本生理学会中国・四国地方会 (10月: 高橋、魏)、第81回MACメディカル交流会 (11月: 成瀬)、第5回 若手による骨格筋細胞研究会 (11月: 片野坂)、ASCB EMBO 2017 meeting (12月: 森松、藤田 (歯周科))、第40回日本分子生物学会年会 (12月: 成瀬、片野坂)、3rd International Symposium on Mechanobiology (12月: 片野坂、高橋 (招待講演))、第7回臨床ペプチドゲル研究会 (1月: 成瀬)、第95回日本生理学会大会 (成瀬、入部、貝原、千葉、高橋、片野坂、縄稚、多田、魏、王、藤田 (歯周科)、森松、甲斐、早間)。

生物物理学会では藤田が学生発表賞を、生体医工学学会中国四国支部大会では森松が若手講演奨励賞を受賞しました。

メンバーに関しては、博士課程を修了した山口陽平が10月よりUniversity of Freiburg (独) に留学しました。12月から非常勤研究員として渡邊恵子を迎えました。(高橋 記)

分子医化学

魅力ある研究分野をつくるべく教育および各研究テーマに取り組んでいます。

人事関係では、本年度1月に修士栗原、2月に博士浅野の学位審査があり無事修了しました。今後それぞれの道で活躍が期待されます。浅野は4月よりマウントサイナイ医科大学のRamirez研究室に留学を予定しています。10月に大連医科大学よりShaoying Tangさんが博士課程院生として入学しました。大橋はO-NECUSの面接試験のため3月に大連医科大学を訪問しました。

学会活動として、大橋が日本軟骨代謝学会、日本結合組織学会理事に就任しました。微力ながら両学会の発展に貢献していく所存です。6月に骨免疫学会(沖縄)、補綴学会(横浜)にて大野がポスター発表を行いました。9月にイタリアVareseにて開催されたプロテオグリカン国際会議2017に大橋が参加し、口演を行いました。同会議が2年後に日本で開催されることが決定され、大橋は組織委員を務める予定です。また、口腔インプラント学会(仙台)にて大野が口演発表を行い、優秀演題賞を受賞しました。10月には博士大学院生の前場が日本形成外科学会基礎学術集会(大阪)にて口演発表しました。12月に神戸で基礎系学会が合同で開催したCombio2017では、博士大学院生の鳥原がポスター発表しました。2月にNIDCR/NIH(アメリカ)に大野が訪問し、研究打ち合わせ、および、セミナーを行ってきました。3月の日本軟骨代謝学会(名古屋)に大野・大橋が参加し、大橋が発表しました。続いて大野はAMEDの会議(東京)でシーズの発表を行いました。3月5日に香港大学Danny Chan教授を招聘し、J Hallで第160回ECM Society Seminarとして特別講演を拝聴しました。医学系・歯学系・保健学系から多くの方に参加いただきました。Chan教授は香港大学の再生医学部門の教授として大学院の研究部門を統括されており、今後の共同研究や研究者・学生交流への進展が期待されます。

教育関係では、2年次生対象の授業・実習が9月から12月まであり、教員全員で取り組みました。医学科非常勤講師として京都大iPS細胞研究所・渡辺亮先生、東京都医学総合研究所・神村圭亮先生、大分大学・佐々

木隆子先生を招聘し、特別講義を拝聴しました。大学院の非常勤講師として同志社大学・堀哲也先生を招聘し、「神経内在分子の過剰発現によるシナプス毒性」の講義を拝聴し、共同研究打ち合わせを行いました。

(大橋 記)

薬理学

当教室は、「炎症反応の制御機構の解明、及び創薬開発」を目指しています。現在、抗HMGB1中和抗体を用いた脳梗塞・脳出血・脳外傷などの治療、そして血漿高ヒスチジン糖タンパク(HRG)を用いた敗血症治療・診断法開発を研究室の主要テーマとして、研究をおこなっています。

薬理学教室メンバーは、西堀正洋教授、和氣秀徳講師、勅使川原匡助教、王登莉助教、劉克約非常勤研究員、出石恭久客員研究員、大学院生・短期留学生の寺尾欣也、高遠、Soe Soe Htwe、西村義人、高尚澤、吉井将哲、高橋陽平、江帆、陈芳、乔寒栋、技術補佐員の佐藤まどか、教室秘書の矢田真理子、木田由希子で構成されています。留学生の人数が多く、国際色の豊かな研究室です。ウダヤナ大学からNi Wayan Sucindra Dewiさんの短期受け入れもありました。

昨年度の研究成果は、日本薬理学会年会・近畿部会(西堀正洋、和氣秀徳、高尚澤)、日本神経科学大会(西堀正洋)、Sepsis 2017(西堀正洋)、International DAMPs and Alarmins Symposium(西堀正洋、和氣秀徳)で発表をおこないました。さらに、国際科学誌に森岡祐太院生(J Pharmacol Sci)、黒田浩佐院生(Crit Care Med)、衷輝院生(J Pharmacol Sci)、高遠院生(Oxidative Medicine and Cellular Longevity)の研究成果が掲載されました。学位修了した富麗院生、森岡祐太院生、衷輝院生は、教室を巣立って、新たな社会の場で活躍し始めました。また、Rumaポスドクが母国インドネシアに帰国しました。医師としての益々の活躍を願っています。

新年1月には、教室員一同が日頃の感謝の気持ちを込めて同門会を開催しました。

ここ数年の薬理学教室は、人材・研究資金共に充実し、他教室との連携も緊密なものとなり、学術的研究と臨床的創薬開発の双方が一步一步着実に進展してきています。今後もさらに鋭意努力していきたいと思えます。(勅使川原 記)

病理学（免疫病理）

平成29年9月から平成30年3月までの教室の動きを、簡単ではありますがご報告いたします。松川教授をはじめ一同、医学部・医学科3年生の講義・実習・試験その他で多忙な毎日を送っております。期間中にミャンマーからの大学院留学生Thar Het Sanと当教室大学院生板倉淳哉がそれぞれの研究を終え、学位を取得し卒業しました。その他、昨年よりO-NECUSの留学生として1年間当教室で訓練を受けていた4人の中国人学生のうち2人（ZENG, ZhengとXIN, Boyi）が帰国しましたが、残りの2人（LI, ChunlingとGAO, Tong）が本学大学院へ入学し、それぞれの研究を始めました。また、新たに2人のO-NECUSの中国人留学生（SUN, Yingfu, TIAN, Miao）が加わりました。当大学医学部医学科の学生も5年生2人、4年生2人、3年生2人が研究や抄読会などの目的で教室に出入りしています。教室の人事面では技術職員・秘書として7年間教室の運営・発展に貢献した美野愛が1月31日付けで教室を去り、2月1日付けで大森夕貴が新たに秘書として着任しました。研究面では平成29年10月には金沢で国際サイトカイン学会が開催され、本教室からも数名が参加し研究成果を発表しました。今後も諸先生方との連携を緊密にして教室を更に発展させていきたいと存じますので、ご協力・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。（吉村 記）

病理学（腫瘍病理）

吉野は引き続き医学部創立150周年記念事業の実行委員長として活動しております。みなさまよろしくお願いたします。また、今年度から日本リンパ網内学会理事長、日本病理学会監事、来年から国際病理アカデミー日本支部理事長をすることが内定しており、これから国際学会を含めた複数の関係学会を主催いたします。また、春には国際リンパ腫研究グループの会を主催するため、教室員一丸となって活動する所存です。国際リンパ腫研究グループは20名余りの世界最高峰の集団であり、WHO分類のリンパ腫関係を主導しています。完全なclosed meetingとして世界の研究の方向性を決定することとなっています。

人事面では、O-NECUSプログラムで研究を行っていたXuanが帰国し、入れ替わりでHanを迎えました。大学院生として春から岡谷、白杵、Yang、秋からXuan, Hanの5名を迎えます。11月末林が助教の職を辞しました。4月から助教の竹内が久留米大学に国内

留学し、両名の代わりに田中健大、田端哲也が助教になります。岡山大学病理診断科の田中顕之が関西医科大学に昇進異動、田中健大の後任には都地が昇任し、広島市民から谷口が帰任特任助教に就任します。岩国医療センターの高田が職を辞し、広島市民の守都が着任、常勤となった佐藤と二人体制を維持します。広島市民には岡山赤十字の大西が着任します。保健学科の佐藤妃映は北陸大学准教授に昇任します。諸先生方の新天地でのますますのご発展をお祈り申し上げます。

学業・資格面では、能島、祇園、藤井、永喜多、田端が学位を取得しました。病理専門医試験に能島、大野が合格し、細胞診専門医には安藤、都地が合格しました。真鍋は臨床検査専門医の資格を取得しました。また、教室で学位を取得し開業されている三浦寛人先生が岡山市医師会長に就任されました。8月には高知で行われた夏の学校に学生2名とともに参加しました。10月には第24回中四リンパ腫カンファレンスが開催され、中四国のリンパ腫症例を討議するとともに、日本大学の三浦勝浩先生に高齢者リンパ腫に関する治療についてのご講演をいただきました。11月には津山中央病院の三宅を世話人として岡山大学で中四スライドカンファレンスを開催し、井川が症例発表を行いました。12月には医学部生向けの特別講義に福島医科大学の橋本優子先生をお迎えし、震災被害の大きな福島県の現状も交え、病理概論についての特別講演をいただきました。同月には、台湾で催された国際リンパ腫学会（International Lymphoma Symposium-3rd Takeda APAC Pathology Workshop）において吉野が招待講演を行いました。また、恒例のリンパ腫アップデートin岡山が開催され、愛知県がんセンター研究所の松尾恵太郎先生にリンパ腫の疫学、国立がん研究センター中央病院の伊豆津宏二先生に濾胞性リンパ腫の治療についてのご講演いただきました。年末にて種々の会と重なる条件下で80名程度の出席者があり、盛会となりました。年末には大学院生が期末発表にて現在進行している研究を発表し、今後の方針について皆で意見を出し合いました。同日夜には恒例の忘年会を行い、岡山県内だけでなく、四国や広島からも50名程度のご参加いただき、親睦を深めました。1月には箱根で行われた日韓リンパ網内系学会（シンガポール、台湾を含む60名以上の参加）で、吉野、田端、井川が発表し、特別講演と一般演題の司会を吉野が行いました。

（井川 記）

病原細菌学

10月にインドネシアからの国費外国人留学生I Putu Bayu Mayuraさんが大学院博士課程に入学しました。中居さん（修士1年）とAgusさん（博士4年）の協力も得て日本での生活を立ち上げ、順調に研究をスタートさせました。2月にはAgusさんが「*Vibrio alginolyticus* VepA induces lysosomal membrane permeability and cathepsin-independent cell death」のタイトルで立派な博士論文発表を行いました。学位取得後は帰国してユダヤナ大学医学部の教員に戻ります。

教育関係では、10月～11月に3年生対象の細菌学講義、実習を担当しました。教員とTAの大学院生が一丸となって全力で取り組み、実習事故もなく無事に終わることが出来ました。12月には、インドネシア共和国ユダヤナ大学医学部との部局間協定（屋根瓦方式による教育プログラム）に基づいて、医学部5年生の3名を特別聴講学生として受け入れました。3名はユダヤナ大学の教員でもあるAgusさんとBayuさんの指導のもとで細菌学や分子生物学の基本的手法を習得した後、細胞生物学分野や博士課程入学を希望している分子腫瘍学分野でも実験を行いました。また、医学科2年生の生化学実習に参加したり、シミュレータを体験したりして、充実した一ヶ月間を過ごし、博士課程入学への思いを強くしたようです。彼らが博士課程大学院生としてまた鹿田キャンパスにやって来ることを今から心待ちにしています。

研究関係では、10月に広島で開催された第70回日本細菌学会中国・四国支部総会で美間助教と後藤助教が日頃の研究成果を発表しました。今年8月には細菌学若手コロッセウム in Okayamaを当分野と口腔微生物学分野（歯学系）が共同開催します。世話人の後藤助教が中心となって準備を進めています。（山本 記）

病原ウイルス学

学会として、平成29年10月24日第63回日本ウイルス学会（大阪）で山田が、12月6日第41回日本分子生物学学会（神戸）で難波が、各1題発表いたしました。

講義関係では、3学期の基礎放射線学に引き続いて、4学期には、腫瘍ウイルス学加藤教授、鳥取大学林教授のご支援を受け、今年度もウイルス学講義・実習をスタッフ全員で担当しました。恒例の岡山医学振興会特別講義（平成30年1月9日）では、AMDA理事長菅波茂先生（昭和47年卒）から「AMDAの国際緊急

人道支援と相互扶助の世界」についてお話を伺いました。

国際貢献では、小川が、ザンビアでのフィロウイルスについて現地調査の成果を、アフリカ地域研究会（京都大学、平成30年2月15日）で特別講演しました。

（山田 記）

疫学・衛生学

第76回日本公衆衛生学会総会（2017年10月～11月@鹿児島）に土居教授、高尾講師、越田院生（発表）が出席しました。高尾講師は代表世話人として「“地域の力”（ソーシャル・キャピタル）と健康－最新の知見と実際の保健医療行政への応用－」と題する自由集会を主催しました。それに関連して、訳本「社会疫学」（大修館書店）の出版記念イベントも盛況のうちに終わりました。また、10月には、鈴木助教が以下の2つのセミナーを実施しました。ハーバード大学公衆衛生大学院で「How could the sufficient-cause model deepen our understanding of causality?」、ノースカロライナ大学チャペルヒル校で「Sufficient-cause model and potential-outcome model」。疫学理論や因果論に関心のある人が大勢出席し、質疑応答も活発になされました。なお、教室HPでは多数の論文も紹介していますのでご覧ください。

恒例のハーバード大学公衆衛生大学院講義ではIchiro Kawachi教授とXiaoyu Li先生を招聘し、社会疫学と統計学の大学院講義を実施しました。また、学部2年生の「医学統計学」と学部4年生の「衛生学」を担当し、学部生が幅広い疫学・統計学的知識を習得できるよう注力しています。

岡山産業保健総合支援センターおよび岡山労災病院と協力した産業医研修会の他、NPO法人岡山健康医学研究会と協力した行政職員向け食中毒疫学研修会（初級）および感染症疫学基礎研修会を継続的に実施しています。

来年度は、公衆衛生学（MPH）コース（修士課程）に7名が入学します。医師3名の他、待望の一般市民も加わり、多彩な院生集団となります。MPHコース修了予定の山中隆夫先生は、4月から医薬品医療機器総合機構（PMDA）に勤務する予定です。

今後ともご支援いただきますよう宜しくお願い致します。（鈴木 記）

公衆衛生学

伊藤達男助教が、大気中のPMにチロシンニトロ化タンパク質を実測し、その発生にオゾン及び湿度と関連性があることを証明したことが*Environ Pollut*に掲載され、岡山大学からプレス発信された。さらに、伊藤達男助教、久保正幸元助教（米国留学中）は、軽度肥満状態でも、肝臓のアルギナーゼIの発現が亢進し、全身の一酸化窒素（NO）代謝に影響していること突き止め、共著論文として、*J Physiol Biochem* に掲載された。科研の挑戦的萌芽研究代表である萩野景規教授は、PM2.5に特異的に付着するタンパク質の生体影響研究を進めた。科研基盤C・代表である伊藤助教は悪性中皮腫に発現する遺伝子安定化因子BAP1の変異を細胞、病理組織レベルで解析した。それぞれ世界初の画期的な研究である。江口依里助教の「笑い療法が生活習慣病発症・重症化予防に及ぼす影響についての前向きコホート・介入研究」（AMED・分担）の研究発表会が、マスコミの取材を受けた。10月に第76回日本公衆衛生学会で坪井綾香が、11月に第30回岡山市医師会医学会で伊藤達男助教が、2月に第28回日本疫学会に山崎雷太（代理江口）がそれぞれ口演発表した。preARTプログラムとして、医学科学生の西山莉由が伊藤助教の指導下でCRISPR-Cas9技術を用いた癌の発生実験を行っている。

公衆衛生学の教育活動は、大学院生に9月に「臨床研究・疫学実践論」12月に「メタボリックシンドローム特論」の講義をした。11月に4年生にCBT直前対策講座を開催した。その他、教室では毎週水曜日に論文の抄読会、毎週月曜又は火曜日に大学院生・教員が参加する基礎研究に関する勉強会・進捗報告会を実施している。

(<http://square.umin.ac.jp/okayamadph/>) をご参照ください。(江口 記)

法 医 学

法医学実務面では、昨年1年間の剖検数は237体となり、一昨年の総剖検数を大幅に上回りました。ここ数年は取り扱い数がやや減少する傾向が続いていましたが、この減少傾向は一段落した形です。年が明けてから2月20日までの剖検数は35体と、昨年をさらに上回っています。一昨年に新築の融合型教育研究棟に移転した新しい法医解剖室（2階）に近接して1階に設置されたコンピューター断層撮影装置（CT）が、死後画像診断に本格的に活用され始めました。また、平

成25年から法医学教室が参画して進められてきた、第3次岡山県医療再生計画の一端である「在宅死への適切な対処能力の習得事業」も今年から「在宅死“等”への…」と名称変更され、三浦助教がコーディネーターとなり救急医学教室と共同開催している「死因究明等推進のための勉強会」も6年目に入りました。

教室内では、水島海上保安部からの法医学研修生として、平成29年9月から約半年間の予定で奥谷麻実さんを受け入れており、死体解剖の補助を中心とした法医学教室の各種業務を体験すると同時に、教室カンファレンスにも参加し、過去の海上保安部取り扱いの法医解剖および検屍事例についての統計解析にも取り組んでいます。また、修士課程大学院生の小林智瑛さんは学位審査に合格し、4月には博士課程に進学します。中毒の検査などを担当していた技術職員の柴田淳子さんは任期満了により3月末で退職の予定です。

昨年末の同門会総会・忘年会は、12月2日（土）にメルパルク岡山で開催致しました。昨年に引き続き石津名誉教授、妹尾昌美先生にご出席いただきましたが、同門会長はご療養中のため欠席されました。参加者数はこのところの15名前後をやや上回り、昨年と同じ18名となり、皆様もお話で盛りあがっておりました。

学術面では、学会発表としては、9月11日から15日までの間ドイツのDüsseldorfで開催された10th International Symposium Advances in Legal Medicine (ISALM) において、山本が「Application of vital staining of microorganisms in the forensic diagnosis of freshwater drowning」など2題、三浦助教が「One case of complete decapitation resulting from suicide by hanging」、小林大学院生が「Postmortem exudation of myoglobin from striated muscle during formalin fixation」の発表を行いました。その他、日本法中毒学会第36年会、第34回日本法医学会学術中四国地方集会等でも教室員が発表を行いました。(山本 記)

医療政策・医療経済学

昨秋から、教養で「多職種連携と地域包括ケアのワークショップ」という講義を行っている。これは岡山大学の特色である「実践型社会連携」講義で、笠岡諸島の北木島で1泊2日のワークショップ、笠岡市で認知症セミナーに参加、笠岡市の愛育委員、栄養委員らとグループワークという、学生にとっては、負担の大きいものである。最近の学生の授業選択基準は「コスパが良いかどうか」だそうで、「コスパの良くない」こ

の授業は10数人の受講にとどまる。しかし、そのためもあって、教員と学生が「顔の見える関係」を作ることができる。授業が終わってからも元気のいい学生たちと語り合える喜びを味わっている。

岡山市の助成を受けて行っている「大学生まちづくりチャレンジ」は取りまとめの段階に入っている。新見市・渡辺病院の溝尾妙子医師、岡山市役所の大谷哲子さん、厚労省の元老健局長の宮島俊彦さんらにインタビューし、岡山市社会福祉協議会の藤村息吹さんこゝろきいのご紹介で半田山ハイツの町内会活動に参加し、岡西公民館の松村裕正館長や坪井玲子さんのアドバイスを受けながら、三門学区の「地域のみんなでつながり隊」の皆様と意見交換した。2月17日には、岡西公民館で、発表を兼ねた意見交換会を行った。

さて、医療政策の分野では、平成30年4月から、都道府県が市町村と共に国民健康保険の保険者となり、財政責任を負う仕組みに代わる。岡山県国保運営協議会の会長として、その取りまとめ作業に参加させていただいている。医療費適正化の新計画も4月からスタートするが、この作業にも県の協議会の会長として、参画させていただいている。

医療政策については、国や地方自治体の財政状況を脅かすことなく、同時に、医療機関も安定した経営を行い、患者には適切なサービスが提供されなければならない。しかし現実には、医療費の抑制政策が続いていることもあり、医療機関経営は困難な状況を迎えている。医療と介護の状況をみながら、こうした問題を実証的に取り上げる研究を行っていききたい。(浜田 記)

分子腫瘍学

今期の人事としては、高岡修平が修士課程を無事に修了しました。12月にはインドネシアのウダヤナ大学から、学部生3名が特別聴講生として来日し、当研究室で約2週間の実験研修をおこない、にぎやかに過ごしました。また、2月からは上海中医薬大学のQIU, Yanyanさんが、留学生として1年間研究に参加します。

研究面では、岡山医学振興会の研究助成に笹井香織が、両備櫻園記念財団の研究助成に保田雪子が採択されました。

学会発表は、ConBio2017（生命科学系学会合同年次大会：第40回日本分子生物学会年会、第90回日本生化学大会；2017年12月、神戸）にて、以下の発表をおこないました。「EGFR変異陰性喫煙男性肺腺癌患者に特化した早期疾患診断のためのmicroRNA発現プロ

ファイル解析（伊藤佐智夫）」、「CDH17のハプロタイプSNPは、日本人の膵がん発症リスクに關与する（堺明子）」、「RNA結合タンパク質hnRNPFは細胞分裂進行を調節している（高岡修平）」。また、西日本医学生学術フォーラム2017（12月、奈良）にて、5回生の坂本萌さんが、hnRNPF関連の発表をおこないました。

(堺 記)

腫瘍ウイルス学

当教室の本年度下半期の活動内容について報告します。研究面では、上田 優輝助教が米国・ケープコッドで開催された第24回国際HCV会議（平成29年9月25～28日）で研究成果を発表し、国内外の研究者と熱心に討論を行いました。また、教室員は第65回日本ウイルス学会学術集会（大阪市、平成29年10月24～26日）に参加し、谷 焯琳院生、今井 大誉院生、佐藤 伸哉助教、上田助教と團迫の5名が日頃の研究成果を英語で発表しました。このように、教室員は国内外の学術集会に積極的に参加し、日頃の研究成果の発表と情報収集を熱心に行っております。また、佐藤助教と小野村大地院生は国立感染症研究所で開催された第6回肝炎ウイルス研修会（平成30年3月5～6日）に参加し、小野村院生が「抗HCV薬リバビリンによる脂質合成抑制機序の解明」というタイトルで発表を行いました。当教室の研究活動の詳細などについては、教室のホームページ（<http://www.okayama-u.ac.jp/user/med/dmb/index.html>）をご覧ください。当教室は、メンバー、プロジェクトともに一層充実して研究及び教育に取り組んでいます。これまで以上に、御指導、御支援をよろしくお願いいたします。(團迫 記)

細胞生物学

[人事] 1月26日に修士2年生の西川茜さんが修士論文発表を行い、無事に審査を通過しました。

[研究成果発表] 論文としては、阪口政清准教授が筆頭の研究成果“Signal Diversity of Receptor for Advanced Glycation End Products.”がActa Medica Okayama誌に、また博士課程3年生のSmardika I Wayanさんの研究成果“ β -1, 3-galactosyl-O-glycosylglycoprotein β -1, 6-N-acetylglucosaminyltransferase 3 Increases MCAM Stability, Which Enhances S100A 8/A9-Mediated Cancer Motility.”がOncology Research誌に掲載されました。

学会発表については、12月6日～9日に行われた第

39回日本分子生物学会にて村田等講師がポスター発表を行いました。また、12月16日の第28回創薬・薬理フォーラム岡山にて阪口政清准教授が招待口演にて発表を行いました。

[受賞・研究資金の獲得状況] 阪口政清准教授が岡山医学振興会、公益財団法人小林国際奨学財団、公益財団法人がん研究振興財団の研究助成の対象に選ばれました。また、木下理恵助教が両備檉園記念財団の研究助成の対象に選ばれました。

最後になりましたが、今後も同窓の皆様には御指導、御支援をよろしくお願いいたします。(山本 記)

細胞化学

当分野では、Photodynamic therapy (PDT) によるがん治療の基礎研究、ミトコンドリア機能と細胞機能発現の解析、動脈硬化の発症機序解明と分子イメージング技術(体内診断法)の確立、がんの新規画像診断・治療法(Theranostics)の確立、酸化脂質を中心とするメタボノミクス研究、低酸素により誘導される細胞外マトリックス分解酵素であるADAMTS1に関する研究が、次世代がん医療創生研究事業(AMED)、基盤研究(JSPS)、さらには、特別電源所在県科学技術振興事業(岡山県)などの公的資金によって実施されています。これらの研究については、細胞化学、中性子医療研究センター、産学官連携センターの研究スタッフ、工学部、薬学部などの学内研究者、および、日本人大学院生(博士)、マレーシアからの大学院生、さらには、京都大学の共同研究者が従事しています。10月より、新たに、マレーシアからMelissa Siaw Han LIMさん(MEXT大学推薦枠の奨学生)が博士課程に入学し研究をスタートしました。また、大学間協定に基づき、インドネシア大学より来学したAndisyah Putri Sekarさんが、糖代謝とオートファジーの研究に3ヶ月間、取り組みました。

教育関係では、2年次生対象の「生化学・分子医化学」講義および実習では、本科目の面白さを理解して貰えるように様々な改善を加えて取り組みました。また、教養科目の「生命の不思議2」においては、松浦、稲垣、小淵が津島キャンパスへ赴き最新のトピックを紹介するなどして、学部の異なる学生に対して最適な授業を模索しています。大学院特別講義では、3月に佐藤英介先生(鈴鹿医療科学大学薬学部医化学講座教授)に「好中球の細胞死:細胞外トラップ」と題し、NETosisの分子機構と様々な疾患との関連について講義して頂きました。

学会関係では、松浦が、メルボルンで、3月に、Joint meeting of Lupus and Asian Congress on Autoimmunity、5月に、Joint meeting of Australia's MedTech Conference and International Conference on Mechanics in Medicine and Biology (ICMMB)、さらに、インドネシアで、10月にScholar Summit 2017 (Depok)、International Conference on Advance Pharmacy and Pharmaceutical Sciences (ICAPPS) (Rombok島)、Intensive Scientific Writing Coaching Clinic (Bali島)、12月には、Joint meeting of Coronary Revascularization 2017 (韓国、釜山)で招聘講演を行いました。小淵は、2017年度生命科学系学会合同年次大会(第90回日本生化学会大会)でPDTに関する研究を発表しました。(小淵 記)

組織機能修復学

平成28年4月より新設された本分野もはや2年が経過しようとしております。半期に1度の教室だよりを寄稿させていただくことで、時の流れの早さを実感するとともに、分野・教室員の成長と、自己の反省ができる良い機会となっています。今年度から参画してくれた先生方や大学院生のお陰で、実験系も整ってきました。特に培養細胞や遺伝子改変マウスの実験系の充実を図り、以前より着想していた研究計画を粛々と進めることができいております。山田先生は、京都大学再生医科学研究所にてFeeder freeのiPS細胞培養技術を習得し、当分野で実験系を立ち上げてくれました。これで、マウスで得られた知見をヒト多能性幹細胞研究へ応用展開することができます。河邊先生は、フローサイトメトリーの実験系確立に尽力され、希少ポピュレーションのセルソートをルーチンに実施できるようになりました。また、昨年度より実施していた仕事を論文としてまとめることができたことが嬉しいイベントとなりました。医学修士2年の松本さんは、河邊先生のサポートの下、修士論文の提出・発表を滞りなく済ませることができました。おめでとうございます。大学院生の土佐さんは、まだ半年ほどしか経過していないにも関わらず、その頑張りから実験系も安定してきて、データも少しずつ出てきました。医学修士1年の大学院生4名も、実験になれてきて、個々のペースで研究を推進させております。宝田は、研究結果に一喜一憂しつつ、相変わらず研究費獲得や論文投稿が日々の課題です。着任以来、多くの方々にサポートいただいているお陰で、分野が着実に前に進んでいる実感を得ております。最後になりましたが、今後とも諸

先生方のご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひいたします。
(宝田 記)

消化器・肝臓内科学

人事ですが、昨年10月より平岡佐規子（H6卒）が消化器内科講師に就任し、中村進一郎（H5）が長い大学病院勤務を終え、姫路赤十字病院へ赴任しました。また、本年1月より友田健（H16）が三朝病院へ半年間の期限付きで出向し、4月より衣笠秀明（H17）が広島市民病院から消化器内科助教として帰局します。同じく本年4月から、松下浩志（H18）が岡山市市民病院、河野吉泰（H19）が広島市民病院、高嶋志保（H20）が市立備前病院、水川翔（H21）が岡山済生会総合病院、加藤諒（H26）が岩国医療センターへ赴任致します。これまでに修得した知識と技術を生かし、新天地での活躍を期待しております。

竹内康人（H17）は4月より厚生労働省に2年間出向し、行政側からみた研究構築のノウハウを学びます。赤穂宗一郎（H19）は4月よりアメリカのUCLAに留学します。大学に戻って来る際には、多くの学んだことを教室に還元し、大きな力になるものと確信しております。

病棟医の異動ですが、昨年10月に岡昌平（H22）が病棟医を終え、医員として臨床研究を開始しました。同じく10月より松枝克典（H24；福山医療センター）、平井麻美（H22；倉敷中央病院）が帰局し、病棟医を担当しております。また、3月で病棟医を終える濱田健太（H21）、石原裕基（H23）、松三明宏（H24）、安富絵里子（H24）は大学病院の医員として診療を行いながら臨床研究を、寺澤裕之（H23）は基礎研究を開始します。同じく、坂口智紘（H22）は四国がんセンターへ国内留学します。

これからも、消化器内科の発展のために医局員全員で精進、同窓の皆様に貢献できるよう努力致しますので引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。
(加藤 記)

血液・腫瘍・呼吸器内科学

平成29年10月から3月につき、ご報告させていただきます。岡山大学同窓の先生方におかれましては、平素から大変なご支援をいただき御礼申し上げます。

10月に当教室の准教授として長年活躍してこられた金廣有彦准教授が、岡山ろうさい病院の特任副院長としてご栄転されました。あらためて、この場を借りて

長年の当教室への貢献へ感謝したいと思います。新天地で益々のご活躍を祈念申し上げます。

その他の人事として、大橋圭明助教が10月に講師へ昇任、1月に松岡賢市講師が准教授、市原英基助教が講師へ昇任、保健管理センター助教の谷口暁彦が教室助教、三朝助教の二宮崇が保健管理センター助教へ配置転換、大学院生二宮貴一朗が三朝助教へ昇任となりました。また呼吸器・アレルギー内科医員の中西将元が、1月より宇部医療センターへ、岡山赤十字病院呼吸器内科より梅野貴裕が大学病院医員として帰局いたしました。

臨床・研究面でのご報告です。岡山大学は厚生労働省から造血幹細胞移植推進拠点病院に指定されています。血液グループは全国の国公立大学病院でトップクラスの移植を行っております。最後の砦として他施設で難渋して当科へ転院、治療を受けられる患者さんも多いのが実情であり、BCRのみならずICUの先生方、メディカルスタッフのお力も借りながら、白血病をはじめとした難治性血液悪性疾患の根治を目指し診療を行っております。呼吸器・アレルギーグループは、肺癌をはじめとした胸部悪性腫瘍、肉腫など希少、難治性悪性腫瘍の化学療法、また難治性喘息に対する抗体療法などを行っております。当科は新しい治療選択を創出すべく多数の臨床試験、治験への参加、また臨床中核拠点病院の一員として臨床研究を主導、運営しております。ガイドラインを変えるような成果の創出を継続したいと思います。また社会に還元できるような成果を目指し活発にトランスレーショナル研究も行っております。本年は、基礎研究成果を元に立案された前田教授、松岡准教授が主導した医師主導治験の最終年度でもあり、その結果がまたれるところであります。

教室の実務体制は、10月より、医局長 大橋圭明、副医局長 西森久和・久保寿夫、外来医長 西森久和、病棟医長 市原英基（西8）・浅田騰（西3BCR）、教育医長 西森久和が担当しております。引き続きご支援、ご指導の程どうぞお願ひ申し上げます。

(大橋 記)

腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田淳教授は、教育・臨床・研究・学会活動を初め、広く精力的に活動を行っております。

当科は、基礎研究、臨床研究問わず、幅広く研究活動を行っており、とくに和田教授が研究代表者である「尿中糖鎖プロファイリングによるIgA腎症の診断法の開発」は革新的医療シーズ実用化研究事業（AMED）

に採択され、IgA腎症の新たなバイオマーカーの開発が期待されます。

教室員は国内外問わず大変活発に学会発表を行っております。野島一郎医師が第56回日本糖尿病学会中国四国地方会で若手研究奨励賞を、竹内英実医師が岡山県医師会学術奨励賞を、松本佳則助教が日本リウマチ学会第4回ベーシックリサーチカンファレンスで優秀演題賞を、渡辺晴樹助教、林啓悟医師、大橋敬司医師、宮脇義重医師がAPLAR2017トラベルグラントをそれぞれ受賞しました。

人事面では、平成29年9月に米国ハーバード大学 Massachusetts General HospitalのHua A Jenny Lu先生の研究室へ留学していた辻憲二医師が帰局いたしました。

最後になりましたが、今後とも同門並びに同窓の諸先生方の御指導・御支援宜しくお願い申し上げます。

(江口 記)

精神神経病態学

平成29年度下半期の当教室のご報告です。

来年度も医局長は川田清宏、病棟医長は酒本真次、外来医長は井上真一郎、教育医長は岡久祐子と今年度と同じ布陣で教室運営を進めていく予定です。

秋の学会シーズンでは各先生が日本サイコソニコロジ学会（埼玉）、臨床精神薬理学会（島根）、日本総合病院精神医学会（富山）、中四国精神神経学会（徳島）、日本心身医学会中国・四国地方会（島根）などで発表されました。後期研修医ら若手5名もそれぞれ活発に発表しました。

昨年12月9日（土）にプラザホテルで第120回岡山大学大学院精神神経病態学教室同門会臨床集談会に100名を超える方々に参加いただきました。今回は一般講演で貴重な症例の報告が多く活発な議論が見られました。教育講演ではまず岡山大学病院の酒本真次先生に自己免疫性脳炎について講演をしていただき、最後に岡山県精神保健福祉センターの野口正行先生に「多職種アウトリーチの経験から」という演題でご講演いただき、訪問診療など長年地域精神医療に取り組んで来られたご経験を踏まえて今後の地域精神保健医療についてお話いただきました。

教室人事では、来年4月より岸本真希子が国立成育医療センターに、福武周作が希望ヶ丘ホスピタルに、三宅啓太が万成病院に、李大賢が山陽病院にそれぞれ赴任予定です。岸本真希子は異動後も当教室での研究は続きます。

4月から始まる新専門医制度プログラムでは6人の専攻医を迎える予定です。制度が始まったばかりで手探りの中ではありますが、初期研修や学生への指導も含め臨床指導にも重点を置いています。

今後ともご指導のほど、よろしく願い申し上げます。
(川田 記)

小児医科学

岡山大学病院小児科と岡山大学大学院小児医科学教室の現況を報告させていただきます。

私たちは昨年11月25日（土）と26日（日）の2日間、岡山コンベンションセンターにて第69回中国四国小児科学会を開催しました（写真を添付させていただきます）。当院小児科の長谷川高誠、樋口洋介、馬場健児が中心になり、医局員と秘書さんが1年間かけて準備しました。当日は天候にも恵まれて、約400名の方が参加して下さいました。そして、26日（日）午後には小児医療についての県民公開講座も開催しました。テーマは「小児慢性疾患の医療的ケア」でした。倉敷中央病院の脇研自先生、津山中央病院の梶俊策先生の司会のもと、岡山医療センターの久保俊英先生、岡山済生会総合病院の田中弘之先生、岡山大学小児科の岡田あゆみ、塚原宏一が講演しました。

私たちは、各地域の小児医療、保健、福祉を堅守するためには、大学病院と拠点機能を有する総合病院が中心になって多くの医療関係者が連携して協働することが必須であると考えています。場合によっては県境を越えた体制作りも必要と思います。そのような思いにのって、今後も小児医療関係者による県民（あるいは市民）公開講座を継続的に開催するつもりです。

私たちは、医学部学生、若手～中堅医師の育成、教育も大学病院と地域の病院が一緒になって進めるべきと考えています。現在、来年度の岡山大学病院「小児科医専門研修プログラム」への希望者を募っています。ちなみに、今年度、私たちのプログラムを開始した若手医師は10名でした。この数字は中部地方を含めた西日本で最多で、日本全体としても上から5番目でした。数で比較するのもどうかですが、当院小児科は院内Student Doctorsによる投票でも第1位をいただきました。「万物は数である」（ピタゴラス）…私は、当教室員の教育への意志、行動、成果は十分に実態のあるものと思っています。

研究成果の方も触れさせていただきます。お陰さまで、英語論文も継続的に出ています。とりわけ、Pediatrics、Journal of Pediatrics、Circulation

Research、Journal of Clinical Lipidology、Leukemia Lymphoma、Journal of Clinical Oncology、Clinical and Experimental Allergyなどの一流誌での論文発表がありました。ここ数年、インパクトファクターの年間合計は100前後を維持しています。

この国も急激な転換を求められています。様々な境界～時間の境界（未来志向）、地域の境界（国際志向）～を超えないといけません。当院小児科でも beyond bordersの取り組みが進んでいます。それに応じた責任も積極的に担っています。私たちの小児科や連携している中国四国地域の総合病院小児科に興味のある方は、ひきつづき、私（tsukah-h@cc.okayama-u.ac.jp）か、教育医長の岡田あゆみ（doidoi@cc.okayama-u.ac.jp）、医局長の馬場健児（kenjibaba@cc.okayama-u.ac.jp）など、各教室員にご連絡いただけましたらありがたいです。（塚原 記）



発達神経病態学

小林勝弘教授のもと、秋山倫之が准教授・てんかんセンター副センター長・医局長を併任し、岡牧郎講師が教育医長、遠藤文香講師が外来医長、秋山麻里助教が病棟医長の体制で、教室運営を行っております。

医局人事に関しては、林裕美子が広島市立広島市民病院に赴任いたしました。

診療に関しては、小児医療センター、てんかんセンター、結節性硬化症ボードに所属し、院内での連携体制を進めております。今年度は、厚生労働省のモデル事業であるてんかん地域診療連携体制整備事業の最終年度にあたりますが、来年度以降も継続が決定いたしましたので、てんかん診療拠点機関として地域医療における連携体制の整備を引き続き行っていく予定です。

学会活動では、小林教授が9月に国際てんかん学会議（開催地：バルセロナ）で発表した後、日本てんかん学会（発表：小林、秋山倫之、遠藤、花岡、土屋、

兵頭）、日本先天代謝異常学会（発表：土屋）、日本臨床神経生理学学会（発表：林）や地方会で多数の演題発表を行いました。また、日本小児科学会岡山地方会、第96回岡山小児てんかん懇話会、第48回中国・四国点頭てんかん研究会を事務局として運営いたしました。

研究面では、てんかんや神経生理学、発達障害等に関する臨床研究、代謝物質分析の研究と厚生労働省班研究「稀少てんかんに関する調査研究」を継続しております。同門の諸先生方のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。（秋山 記）

消化器外科学

平成29年9月～平成30年3月の教室だよりをお届けします。

第83回岡山大学医学部第一外科教室開講記念会が10月1日に開催され、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 救急医学 中尾篤典教授に「岡山大学救急医学講座はどうあるべきか？何をすべきか？」とのテーマでご講演いただきました。平成30年1月21日には、岡山大学関連の消化器外科医が一堂に会する第6回消化器外科フォーラムが開催され、150名を越える多くの先生方にご参加いただきました。皆様からいただきましたご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。

人事面では、古口契児が児島中央病院、永坂岳司が川崎医科大学へ異動し、岸本浩行が低侵襲治療センター講師に就任しました。病棟勤務を終えた國府島健は姫路赤十字病院へ、研究を終えた香川哲也は四国がんセンターへ、加藤卓也は福山医療センターへ赴任しました。また、病棟勤務を終えた熊野健二郎がベイラー大学（米国）へ、高木弘誠がエラスムス大学（オランダ）へ留学しました。寺石文則が高知医療センターから消化管外科助教に着任し、ベイラー大学留学から帰国した吉田一博、臨床研修を終えた岡林弘樹、小川俊博、小西大輔、公文剣斗、大学院での研究を終えた安井和也、谷本光隆は消化管外科・肝胆膵外科・小児外科にて病棟で日夜奮闘しています。谷 守通、鳴坂徹、伏見卓郎は病棟勤務を終え、大学院生として研究生活に入りました。

研究・学会活動では、例年通り、国内外の各種学会・研究会において日頃の成果を多数発表しております。競争的資金では、AMED研究助成2件、文科省高度医療人材養成プログラム1件、基盤B、C科研費等12件を獲得できており、活発な基礎研究、臨床研究の支援ができております。また、杭瀬 崇・伏見卓郎が Asian Transplantation Week 2017にてBest Abstract

Award、大学院生の武田 正が平成29年度日本臨床外科学会優秀論文賞（臨床経験）、加藤卓也が第30回日本バイオセラピー学会奨励賞の荣誉に輝きました。

今年は、明治21年の岡山県医学校の廃止、第三高等学校医学部の設置に伴う外科講座開設からちょうど130年となり、本年9月15日には外科3教室で第5回岡山大学外科同窓会が開催される予定です。

副院長として多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育になお一層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。

（岸本 記）

呼吸器・乳腺内分泌外科学

呼吸器・乳腺内分泌外科学（旧第二外科学）第8代教授に豊岡伸一が就任し早9か月が経ちました。豊岡教授は、医師の行動規範プロフェッショナルリズムでも重要な“利他”を掲げており、教室の行動規範とすべき理念の設定を教室員とともに行ってまいります。

新体制では岡山大学外科MC、外科同窓会の流れをさらに推し進め、各外科教室との連携を強化し外科医育成のみならず人的配置においても各外科教室と協働しています。岡山大学外科として今年創立130周年を迎えるにあたり岡山大学外科同窓会誌創刊号も発刊いたしました。会誌には第三高等学校医学部時代の外科から旧第一外科、旧第二外科、心臓血管外科学教室の歴史を掲載し、各教室の歴代主任教授20名の写真と説明を加えました。各外科教室開講以来の業績として、62名の輩出教授一覧、主催した全国学会一覧を初めてまとめました。

教室の消化器外科分野を支えてきた佃和憲講師が10月に岡山市立市民病院へ赴任いたしました。新任地には研修医も多く集まり、日常外科診療だけではなく外科分野の人材育成を活性化させる任務もあります。新体制では人材育成を重要課題に掲げておりますが、これまで関連病院指導医への外科指導者養成講習会を計3回行ってまいりました。今後はこうした指導者向け教育セミナーを各現場のニーズに沿う形として、特に臨床実習学生を受け入れる臨床教授を対象として継続していく方針としています。

研究面では教室内各グループとも活発な学術活動を継続しており、外部資金獲得額も年々増加し、特に文部科学省の科学研究費について呼吸器外科学分野では全国1位となりました。さらに研究の裾野を広げ、よ

り幅広い人材育成と地域医療への貢献を目的に連携大学院として岡山市立市民病院に実践地域総合外科学講座を立ち上げる予定です。

最後になりましたが同窓の先生方のご多幸と益々の発展をお祈り申し上げます。（山根 記）

整形外科

平成29年8月から平成30年3月までの教室だよりをお届けします。

教室の大きな行事としまして、平成29年8月20日に岡山大学整形外科桃整会夏季セミナーを開催し、生熊久敬医師、中西一夫医師、荒瀧慎也医師、塩崎泰之医師による4題の教育研修講演と防衛医科大学校整形外科講座 千葉一裕教授による特別講演があり、多数の参加がありました。

10月22日には岡山県医師会館三木記念ホールにて「骨と関節の日」のイベントが行われ、尾崎敏文教授による「ロコモって知っていますか?」、鉄永倫子助教による「ロコモチャレンジ」、岡山大学全学教育・学生支援機構の吉岡哲助教による「日常生活に取り入れよう!足腰づくり体操」の講演があり、200名にも及ぶ多数の市民の方の参加がありました。

また、平成29年12月9日に岡山大学整形外科桃整会総会、桃整会学術講演会岡山運動器フォーラムならびに忘年会を開催し、独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）医療機器審査第一部の井上円加先生（平成20年入局）の教育研修講演と国立がん研究センター中央病院骨軟部腫瘍・リハビリテーション科長川井章先生（昭和60年入局）による特別講演があり、150名を越える盛大な会となりました。

人事面では平成29年10月に大学院生の小田孔明が岡山ろうさい病院へ異動になり、平成30年2月には中道亮がアメリカのスクリプス研究所へ留学しました。

学術面では平成29年12月に町田崇博、平成30年3月に山川泰明、堀田昌宏、小田孔明、魚谷弘二、児玉有弥、張偉、吉田晶が学位を取得しました。

最後になりましたが、同門の諸先生方の益々の健康とご活躍をお祈り申し上げます。（島村 記）

皮膚科学

2017年9月～2018年2月についてご報告いたします。

学術面では2017年9月8日東京品川で行われた第32回日本乾癬学会学術大会にて『IL36RN遺伝子変

異と血中サイトカインの経時的変化につき解析したImpetigo Herpetiformisの1例』の演題で山下が発表しました。

9月14日岡山市で行われた第16回OKAYAMAリウマチネットワーク研究会にて『リウマチ診療で遭遇する皮膚症状』の題目で森実が講演しました。

9月16日岡山市で行われた岡山超音波実技講習会2017にて『皮膚科医からみた関節炎-関節炎におけるTNFとIL-17のかかわり-』の題目で森実が講演しました。

9月23-24日福島県郡山市で行われた第81回日本皮膚科学会東部支部学術大会のシンポジウムにて『原著に触れる旅：フランス編』の題目で岩月が担当しました。

9月27-30日オーストリア・ザルツブルグで行われたESDRにて岩月がoral presentationを行いました。

9月28-30日横浜市で行われた第76回日本癌学会学術総会にて『メラノーマにおける腫瘍組織と血中循環腫瘍DNAのドライバー遺伝子変異解析』の題目で山崎が発表しました。

10月7-8日京都市で開催された第68回日本皮膚科学会中部支部学術大会にて『当科における皮膚動脈炎の予後不良因子の検討』の題目で加藤が発表しました。

10月21日広島市で開催された第13回中国研究皮膚科セミナーにて『抗ARS抗体症候群の皮膚・肺・筋の臨床的特徴について』の題目で深松が発表しました。

10月28日熊本市で開催された第69回日本皮膚科学会西部支部学術大会のシンポジウムにて『糖尿病性潰瘍』の題目で山崎が講演しました。また、イブニングセミナーにて『皮膚T細胞リンパ腫の治療総論』の題目で濱田が講演しました。また、黒田・神野・光井が発表しました。

11月28日岡山市で行われた第43回岡山膠原病研究会にて『皮膚動脈炎の予後不良因子の検討』の題目で加藤が発表しました。

12月6日岡山市で行われたMOMO太郎セミナーにて『生物学的製剤によるパラドキシカル反応』の題目で森実が講演しました。

12月8-10日鹿児島市で行われた第47回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会・第41回皮膚脈管・膠原病研究会において『皮膚症状が長期に遷延するも免疫抑制剤の併用により軽快したDIHSの1例』の題目で三宅が発表しました。

12月9日ソウルで開催された第19回Hamchun Dermatology Symposiumにて『Prognostic factors of hydroa vacciniforme and hypersensitivity to

mosquito bites』の題目で岩月が講演しました。

12月15-17日高知市で行われた第42回日本研究皮膚科学会学術大会で『Regional incidences of adult T-cell leukemia/lymphoma with cutaneous involvement in Japan』の題目で濱田が講演しました。また、森実・加持・平井・三宅・中川が発表しました。

2018年1月27日福島県郡山市で行われた郡山アレルギー研究会にて『アトピー性皮膚炎と皮膚細菌叢』の題目で岩月が講演しました。

人事面では2018年1月に藤本が帰局、濱田が高松赤十字病院に異動、岡崎が岡山市市民病院へ異動、山下が三豊総合病院に異動、松三が岡山医療センターに異動、藤原が福山市市民病院へ異動しました。また、2月には香曾我が部が帰局、野村が岡山済生会総合病院へ異動しました。

平成30年3月末で藤本教授・岩月教授がご退任され、そして4月よりいよいよ新専門医プログラムが開始となる激動の時期を迎えます。引き続き同門の先生方のご助力を賜れますようお願い致します。

末筆ながら、皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。(平井 記)

泌尿器病態学

平成29年9月から平成30年3月までの教室だよりをお送りいたします。

那須教授は平成28年4月より研究科長としても多忙な毎日をご過ごししており、研究科長として、教授として益々多忙になる那須教授を教室員一同で支えていきたいと思っております。

人事面では、平成30年度は11名の研修医に入局して頂く見込みですが、その一方で、未だ欠員・増員希望の関連施設が数多くあることから、まだまだ泌尿器科医が不足していることを実感しております。医局員や同門一同、教育や診療を通じて学生さんや研修医と密にコンタクトを取り、ひとりでも多く泌尿器科に興味を持って頂けるよう頑張りたいと思っております。

臨床では小林講師が中心となってロボット手術症例は順調に増加しております。特に来年度からは膀胱全摘へと適応が拡大されることになり、同時に外科や婦人科のロボット手術も保険適応になる見込みですので、他科と連携してますます安全かつ低侵襲な手術を推進します。また、腎盂尿管移行部狭窄に対する腎盂形成や自家腎移植もロボットで行う環境を整えております。副腎摘除、腎尿管全摘に加え、膀胱全摘も現在ルーチンとして腹腔鏡下に行っております。泌尿器内

視鏡手術は谷本助教を中心として、腎尿管結石や上部尿路上皮癌に対するレーザー治療を行っております。荒木講師が2009年に立ち上げた腎移植は80例を超え、1年生着率は100%を保っております。また渡邊准教授、高本助教の尽力により治験件数も増えました。基礎研究では渡部新医療研究開発センター教授を中心として遺伝子治療をはじめ、新規医療の研究開発およびその橋渡し研究を進めています。

教育面では学生や大学院生、研修医の教育に力を入れており、平成29年度に4名の大学院生が卒業します。

関連病院の先生方におかれましては、今後とも益々のご指導ご鞭撻の程、宜しくお願ひ致します。末筆ながら、同窓の先生方のご健康とご活躍をお祈り致します。(和田 記)

眼 科 学

当科に関係する学会発表や学会の開催については、2017年9月29日(金)～10月1日(日)にかけて、第28回日本緑内障学会が、広島リーガロイヤルホテルにて開催されました。当院からは、内藤が発表しました。2017年10月12日(木)～15日(日)にかけて、第71回日本臨床眼科学会が、東京国際フォーラム、JPタワー ホール&カンファレンスにて開催されました。当院からは、松尾、森實、内藤、濱崎、細川、塩出、平野、河野、三木、柴田、荒木、清水、藤原篤之が発表しました。2017年11月10日(金)～11日(土)にかけて、第55回日本神経眼科学会総会が、パシフィコ横浜アネックスホールにて開催されました。当院からは、濱崎が発表しました。2017年12月1日(金)～3日(日)にかけて、第56回日本網膜硝子体学会総会が、東京国際フォーラムにて開催されました。当院からは、森實、木村、塩出、高橋、松前、難波が発表しました。2018年2月3日(土)に第97回岡山大学眼科研究会『巨匠の手術』が、ホテルグランヴィア岡山にて開催されました。聖母眼科医院 永原國宏先生、福島アイクリニック 桑山泰明先生、名古屋市立大学医学部眼科学教室 小椋祐一郎先生にご講演いただきました。

人事については、2017年11月に岡山大学病院から清水が岡山赤十字病院に赴任しました。

最後になりましたが、患者様をご紹介くださる各診療科の先生方、近隣の関連病院や診療所の先生方にこの場を借りてお礼を申し上げます。引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。(濱崎 記)

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

耳鼻咽喉科教室現況をお知らせいたします。学会関係ではInternational Society of Inflammation and Allergy of the Nose (ISIAN)、日本口腔咽頭科学会、日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会、日本鼻科学会、日本聴覚医学会、日本耳科学会、日本めまい平衡医学会、日本頭頸部外科学会、日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会などで医局員が多数の演題を発表いたしました。

人事関係では小野田友男、三木健太郎が開業し、松本淳也が香川労災病院、春名威範が姫路赤十字病院、梶原壮平が国立岡山医療センターへそれぞれ異動しました。

また丸中秀格が国立岡山医療センターから、藤本将平が香川県立中央病院から帰局いたしました。

大道亮太郎は2年間アメリカ合衆国のアイオワ大学にて留学いたします。

臨床面では頭頸部がんセンターを中心に頭頸部腫瘍診療を積極的に実施しており、耳科手術(含人工内耳)、内視鏡下鼻手術も引き続き実績を伸ばしております。今後とも同門の諸先生がたのご支援をよろしくお願ひ申し上げます。(片岡 記)

放射線医学・放射線部

放射線医学教室の近況を御報告致します。4月に5名の新入医局員を迎えることができました。松田恵治、梶田真理、丸山拓夢、三道幹大、永田まりあです。松田恵治、梶田真理は岡山赤十字病院で、三道幹大は岡山大学病院で、丸山拓夢は倉敷成人病センターで、永田まりあは岡山医療センターでそれぞれ放射線専門医を目指し後期研修を開始しています。

4月の人事異動として、岡山大学病院から、講師の藤原寛康が岡山市立市民病院に、助教の多田明博が岡山画像診断センターに赴任致しました。浅野雄大は福山市市民病院、松本晋作は慶応義塾大学病院に赴任しています。また、岡山大学病院には姫路赤十字病院から富田晃司が、岡山労災病院から福原隆一郎が帰局しています。研修医では、岡山赤十字病院から宗友一晃、湯浅直未が、岡山市立市民病院から福岡省吾が帰局しています。医局役員に関しては、医局長は生口俊浩、副医局長は松井裕輔、教育医長は正岡佳久、外来医長は富田晃司に変更となっています。病棟医長は片山敬久で変更はありません。

大学外では、笹井信也が笠岡第一病院に、河原道子、

井上大作、蟹江悠一郎が姫路赤十字病院に、佐藤卓也が岡山西大寺病院に、石井裕朗が岡山赤十字病院に、田尻展久が香川県立中央病院に、渡邊将生が赤穂中央病院に、土橋一代が福山医療センターに、川端隆寛、杉山聡一が津山中央病院に、沼 真吾が岡山済生会総合病院にそれぞれ赴任しています。

新天地でそれぞれの先生方が、すばらしい御活躍をされていることと思います。

放射線科では、画像診断、IVR、放射線治療において、高度先進化した充実した医療の提供を心掛けております。皆様の御力添えを受けながらこれからも日々精進してまいりますので、御指導御鞭撻の程宜しく御願ひ申し上げます。以上、簡単に教室の近況を報告させていただきます。 (藤原 記)

産科・婦人科学

増山 寿教授をはじめ教室員一同、臨床、研究、教育へと日々励んでおります。昨秋からも日本産科婦人科内視鏡学会、中国四国産科婦人科学会、日本癌治療学会、日本女性医学学会、日本生殖医学会などの学会・研究会で、教室から多数の演題を発表いたしました。また10月15日の「増山 寿教授就任記念祝賀会」はおかげさまで非常に荘厳な会となりました。御臨席いただきました学内外の先生方、同門の先生方におかれましては、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ひき続き「チーム岡大」として、同門が丸一となって中国四国地方の産婦人科医療の充実に務めて参ります。

続いて人事の御報告ですが、10月は岡山大学の大平安希子が兵庫県立こども病院でのNICU研修を開始。兼森美帆が岡山済生会総合病院、宮原友里が福山医療センターにそれぞれ異動。福山医療センターの檜野千明が岡山赤十字病院に異動。岡山済生会総合病院の長谷川 徹が帰局いたしました。また大学病院で研修をしていた谷村吏香が中国中央病院に異動。後期研修2年目の杉井裕和が津山中央病院、三島桜子が広島市立広島市民病院、矢野肇子が香川県立中央病院にそれぞれ異動。後期研修3年目の津山中央病院の鈴井泉、中国中央病院の松原侑子が帰局し、研修の仕上げに入りました。1月には中村圭一郎が医歯薬学総合研究科准教授、鎌田泰彦が周産母子センター准教授、小川千加子が助教にそれぞれ着任いたしました。さらに三豊総合病院の藤原晴菜が1月から産休に入り、育休中の澤田麻里が10月から倉敷成人病センターに、平野友美加が11月に福山市民病院に、岡 真由子が1月に

津山中央病院にそれぞれ復職いたしました。なお1月からの教室内役職は、医局長 鎌田泰彦、婦人科病棟医長 中村圭一郎、周産母子センター産科部門長 早田桂、外来医長 小谷早葉子、教育医長 楠本知行の体制となっております。

産婦人科医不足は本学の関連病院におきましても喫緊の課題です。同門のベテランの先生方には、定年後も嘱託医や非常勤医師という形で現役を続行いただき、厚く御礼申し上げます。ただ現況において「分娩施設の集約化」が必要であることは自明の理です。

今後とも同窓の先生方の御指導ならびに御支援の程よろしく御願ひ申し上げます。 (鎌田 記)

麻醉・蘇生学・集中治療部・周術期管理センター

森松教授が就任して5年が経過しようとしております。これまで岩崎先生、小林求先生が医局長を歴任されてこられました。昨年10月より賀来が拝命いたしております。同門の皆様方より、一層のご指導ご鞭撻の程よろしく御願ひ申し上げます。

本年度、当教室は総勢12名のレジデントを迎えました。初期研修医時に13ヶ月コースを選択した者、関連病院で初期研修を終えた者、ART選択者など様々ですが、ここまで全員が岡大の麻醉科医として、充実した研修を行ってきました。それぞれ学会での発表を経験し、またearly exposureとして海外学会にも参加して、4月から比べると一回りも二回りも成長しております。春からは各関連病院でお世話になると思っておりますので、どうぞよろしく御願ひ申し上げます。来年度のプログラムには15名が登録済みで、そのうち当院では8名がレジデントとして研修を開始する予定です。来年度もスタッフ一同、精一杯教育に取り組む所存です。

当院の手術件数は本年度も昨年度同様に、年間1万例、麻醉科管理症例7000例を超えます。ただ数をこなすだけでなく、質の高い周術期管理を行うために発足した、周術期管理チーム「PERIO」も発足から10年を迎えます。全国の多職種による周術期管理チームの先駆けとして、現在でも大きな役割を果たしていますが、さらなる発展を目指します。秋頃には10周年記念式典を予定しており、皆様のご出席をお待ちしております。

集中治療室は、総合診療棟に20床、東病棟に12床を麻醉科管理の下、運営しております。本年度も、臓器移植患者、先天性心疾患に対する心臓手術後患者を含めた約2000症例が入室し、当院の急性期治療の中心を担っております。

ペインクリニックは、これまで外来休診日であった水曜日を、森松教授の外来日として再開いたしました。より一層、質の高い痛みへの介入が出来るよう、今後も努力してまいります。

来年度も、皆様方からのご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。(賀来 記)

脳神経外科学

同門の先生方におかれましては益々御清栄のことと存じます。2017年度は、2020年日本脳神経外科学会総会の伊達教授主催が決定し、また、2018年度から始まる新専攻医登録も12名という多数の登録をいただき、伊達教授の御還暦とあわせ、慶事の多い年度でありました。同門の先生方には日常診療・学会活動・若手指導など多くの面で助けていただき、誠にありがとうございます。

臨床面では各グループの専門的医療を中心に精力的な診療を続けております。また、教育面では伊達教授を中心とした丁寧な指導と実習が学生に好評を得ています。研究面では、移植・再生、ステレオ、血管、腫瘍の各グループとも、着実に成果をあげ、積極的に論文、学会等で発表しております。

平成29年8月に行われた日本脳神経外科学会専門医認定試験に高杉祐二先生、岡哲生先生、久壽米木亮先生が優秀な成績で合格をされました。

人事関連では、まず新入局者ですが、川上真人先生(呉共済病院勤務)、谷本駿先生(岡山赤十字病院勤務)、劔持直也先生(香川県立中央病院勤務)、木村颯先生(津山中央病院勤務)、谷口美季先生(川崎医科大学総合医療センター勤務)、高野昌平先生(愛媛大学医学部脳神経外科勤務)、松田勇輝先生(福山市民病院勤務)が入局されました。

異動につきましては平成29年8月から平成30年3月の間について記します。平成29年8月に、近間正典先生が岡山協立病院から倉敷リハビリテーション病院勤務、平成29年9月に、則兼博先生が屋島総合病院を平成29年7月で御退職後、医療法人ブルースカイ 松井病院勤務、平成29年10月に、岡崎三保子先生、西廣真吾先生、守本純先生がそれぞれ大学研究室から岡山大学病院脳神経外科勤務、平成29年11月に、久壽米木亮先生が、岡山大学病院から新小文字病院脊椎脊椎外科治療センター勤務、平成29年12月に、國塩勝三先生が倉敷リハビリテーション病院から西高松脳外科・内科クリニック勤務となりました。

教室の役職は、医局長は安原隆雄が、外来医長は菱

川朋人が、病棟医長は亀田雅博が、教育医長・教育企画委員は平松匡文が勤めました。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告致しました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。(安原 記)

総合内科学

大塚文男教授は、全人的医療のできる総合内科医の育成と大学院教育の両立を目指して精力的に活動しながら、副病院長として本院全体の教育・企画における多くの新しい取り組みに尽力しております。

教室の動きです。臨床面では、頼 冠名病棟医長、花山宜久外来医長(総外来医長)を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取り、引き続き診療体制の更なる充実化を目指しております。責任病床12床の病棟では、炎症・腫瘍性病態や代謝・内分泌病態が含まれる診断困難例や、複数の問題を抱える症例など、症例は多彩ですが、病棟チーム内や全体カンファレンスで活発にディスカッションを行い、的確かつ丁寧な診療を提供するよう心がけております。外来では、地域からの紹介患者を積極的に受け入れています。木曜、金曜外来では、岡山県南東部(玉野)総合診療医学講座の植田圭吾准教授が漢方診療を行っており、受診者が増えてまいりました。引き続きよろしく願いいたします。なお、当科は9月に日本東洋医学会指定研修施設の認定を受け、現在、専攻医1名が研修中です。

教育面です。教育医長の花山宜久医師のもと、卒前教育については教育企画委員の堀口繁医師を中心に、卒後教育については卒研コーディネーターの灘隆宏医師を中心に指導を行っております。当科の学生実習では、外来において、student doctorである学生主体で医療面接、身体診察を行うなど、参加型実習を積極的に取り入れています。また若手医師による週1回のレジデント回診では、屋根瓦式にレジデントが初期研修医を指導し、また、症例に応じたclinical questionについて各自で最新のエビデンスを調べ共有し、診療に還元しています。

研究面です。毎週のケースレポート・研究カンファレンスは、研究担当の花山宜久医師、長谷川功医師を中心に開催され、学会発表、論文執筆など積極的に活動しています。8月の第49回日本医学教育学会大会(札幌)、第18回日本内分泌学会中国地方会(島根)、9月の第15回日本病院総合診療医学会学術総会(千葉)、10月の日本神経内分泌学会(神奈川)、11月の日本糖尿病学会中国四国地方会第55回総会(岡山)、第

117回日本内科学会中国地方会（島根）、第25回日本ステロイドホルモン学会（東京）、第27回臨床内分泌代謝Update（神戸）などにて多数の演題を発表した他、若手医師が続々と論文発表しています。なお、第25回日本ステロイドホルモン学会では、大塚教授がメラトニンの基礎研究で研究奨励賞を受賞しました。

人事面です。10月、岡山労災病院より道谷友医師がレジデントに採用となり、11月よりキャリア支援枠の中道晶子医師が産休に入りました。

昨年4月にスタートとした、岡山県南東部（玉野）総合診療医学講座、岡山県南西部（笠岡）総合診療医学講座は、植田圭吾准教授・小川弘子准教授のもと、学生・研修医・レジデントの教育・研究の新たなフィールドとして活動しております。こちらも引き続きよろしくお願いたします。その他、いよいよ4月にスタートする新専門医制度にあわせて、当院の「内科専門医研修プログラム」に加えて「総合診療専門医研修プログラム」でも専攻医を募集することとなりました。連携施設の先生方にご協力頂きながら、地域で活躍できる内科医、総合診療医育成を目指してまいります。

今後も、臨床・教育・研究のバランスをとりつつ、診療科全体で、総合内科医として全人的医療に貢献していきます。引き続き、岡山大学総合内科をご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いたします。（小比賀 記）

循環器内科学

伊藤浩教授は、相変わらずの多忙な毎日を過ごしております。

平成30年度2月までの大学の人事異動では、寺西仁先生が岡山大学から姫路赤十字病院へ転勤されました。また、湘南鎌倉病院から佃 早央莉先生が帰局されました。また関連病院では、平成29年9月から済生会岡山病院の部長に寺坂律子先生、平成30年1月から福山市民病院の部長に吉川昌樹先生が就任されました。

臨床に関しては、虚血、不整脈いずれも症例数が伸びております。治療に携わる医師が徐々に増えてきたこと、当科に関わる臨床工学士の増加などがその一因としてあげられます。

入院患者も徐々に増えておりますが、スタッフや病棟医の先生は力を合わせて診療にあたっております。

研究会、学会活動も盛んに行われ、Heart Rhythm、米国心臓病学会、ヨーロッパ心臓病学会では、関連病院も含め多数の演題を発表しました。平成29年12月9日に行われた若手医師症例検討会では、中国四国地方

の関連病院から多数の若手医師が参加して、活発な議論がなされました。津山中央病院 池田政勝先生、岩国医療センター 斎藤宇亮先生、岡山済生会病院 河原林卓馬先生が最優秀賞を受賞されました。高橋生先生がAPCASH Abstract Competitionで2位を受賞しました。年が明けて平成30年1月13日には岡山でbest management 研究会で冠動脈形成術の研究会、また、東京では臨床不整脈研究会で、森本先生が best abstract 賞にノミネートされました。また、平成30年1月27～28日に行われた日本成人先天性心疾患学会では、木島康文先生（現 聖路加国際病院循環器内科）がYIAを受賞されました。

英語論文も2017年は昨年の27本から47本と大いに伸びてきております。

今後も、臨床・研究・教育にはげみ、やりがいのあふれる楽しい医局を目指したいと考えておりますので、御指導御鞭撻のほどをよろしくお願申し上げます。

（西井 記）

心臓血管外科学

2017年9月から2018年3月の教室の動きをご報告いたします。

2018年8月に第三代心臓血管外科教授として笠原真悟医師が就任し教室の新たな門出の半年間となりました。小児部門の診療は笠原真悟医師をはじめ新井禎彦医師、黒子洋介医師、小谷恭弘で、成人部門は増田善逸医師が2017年11月にツカザキ病院に転勤したことにより衛藤弘城医師が中心となって診療を行っております。血管部門は引き続き大澤晋医師が中心となり診療を行っております。新たに小児心臓血管外科部門が設置されることとなり、笠原真悟医師が科長として就任いたしました。皆様におかれましては、今後とも引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願申し上げます。

2018年2月には、奥山倫弘医師がアメリカのケンタッキー州立大学に研究留学のため出局、また6月には佐野俊和医師が、アメリカのUCSFに研究留学予定であります。臨床面では、引き続き小児先天性心疾患の治療を軸に、成人先天性心疾患に対する外科治療、成人後天性心疾患、血管疾患の多岐にわたる診療が特徴であるが、新体制のもと今後5年でさらなる内容の充実化を目指しています。

教室としての国際貢献としては引き続きJICA草の根パートナー型技術交流の大型プロジェクトによりプロジェクトマネージャーの新井禎彦医師を中心に、ベ

トナムからの研修の受け入れを定期的に行っています。

今後も教室の広範囲での活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。(小谷 記)

脳神経内科学

阿部康二教授は、世界へ発信しかつ世界をリードできるような、教育・臨床・研究の各分野でのさらなる発展を目指して教室員の指導を行い、国内・国際的学術活動において活躍しています。さらに、複数の厚労省班会議の班員としての活動や山陽神経難病ネットワークや山陽脳卒中協議会などの社会的活動において中心的役割を果たしています。まず特筆すべきこととして、平成29年9月1-2日に倉敷アイビースクエアにて第15回日本臨床医療福祉学会を、また9月22-24日に岡山コンベンションセンターにて第7回日本認知症予防学会を開催させて頂きました。日本臨床医療福祉学会は海外招待講演者4名、オープニングセミナー・特別講演・特別セミナー・特別シンポジウム・シンポジウム・セミナー10企画、口演140演題、ポスター64演題、合計210演題、参加者数420名であり、日本認知症予防学会では招待講演・特別講演・シンポジウム・教育講演30企画、口演210演題、参加者数1000名と、どちらの学会も過去最大規模の演題数、参加者数となり、盛会裏に終えることが出来ました。

人事面に関して、平成29年10月より佐々木諒が倉敷平成病院から津山中央病院へ、田所功が津山中央病院から倉敷平成病院へそれぞれ異動し、今後の活躍が期待されます。スタッフ業務については、平成30年4月より医局長には山下徹講師が、佐藤恒太助教が病棟医長、武本麻美助教が外来医長、商敬偉助教が教育医長をそれぞれ担当しています。

臨床面では一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パーキンソン、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療）のさらなる充実化を目指し、神経内科独自の外来検査を導入し、待ち時間の短縮と効率的な外来診療を目指して努力をしています。特に、患者数の増加が著しい認知症については、外来検査の結果を基に、簡易認知機能検査の開発や治療研究などを基礎研究と並行して推進しています。またALS専門外来では、ペランパネルおよびメコバラミン臨床治験を担当しております。このように多様な専門外来の評判を聞いて岡山県外からも多くの患者さんが受診しています。

研究面では、脳卒中・アルツハイマー病などの認知

症・ALSなどの神経変性疾患の分野において新規治療の開発を目指し、様々な観点から研究活動を継続しています。特に岡山大学神経内科と京都大学の共同研究で原因遺伝子を同定した、小脳失調症と運動ニューロン疾患の臨床的特徴を併せ持つ新たな遺伝性神経変性疾患Asidan (SCA36) の病態解明・治療法開発を目指した基礎研究やiPS細胞/iN細胞などの新たな手法を用いた再生医療分野の研究、認知症モデルマウスを用いた基礎研究など、様々な研究が進行中です。平成30年11月には第6回日本難病医療ネットワーク学会学術集会を岡山市で開催予定であり、今後とも宜しくお願いいたします。(太田 記)

救命救急・災害医学

中尾教授のもと、教室員一丸となって、臨床・教育・研究に勤しんでおります。

臨床では、中尾教授就任以降右肩上がりに患者数増加をみており、前年度に比べて、救急患者受け入れ件数は約1.5倍に伸びました。いまや、地域に無くてはならない最後の砦として、プレゼンスが高まっております。また国全体として災害時の医療を整備しようという気運が高まる中、政府主体や岡山県主体の防災訓練にも企画の段階から積極的に参加し、岡山県において中心的役割を担うようになっております。岡山県保健福祉部医療推進課より災害時に岡山空港に設置するSCU（広域搬送拠点臨時医療施設）への協力依頼もあり、来年度から6年間の医療提供体制の指針となる第8次岡山県保健医療計画に、その旨が記載される事となりました。

教育では、学生、研修医教育共に好評価を得られるようになり、加えて、コメディカルや救急救命士の教育にも盛んに取り組んでおります。

研究面では、盛んに臨床研究を進めており、英文論文数も着々と増え結果に表れつつあります。基礎研究にも着手すべく研究室の整備も行なっております。

人事においては、2018年4月より後期研修医として庵谷、兵庫医科大学病院から藤崎が新たに教室員として加わる予定です。また同時期より内藤が准教授として昇格し、尾迫が地域救急・災害医療学講座講師として着任する事となっております。人は力、教室も大変に活気付いて参りました。

当教室は、2018年4月より名称を「救急医学講座」から「救命救急・災害医学講座」へ、診療科名は「救急科」から「救命救急科」へ変更し、臨床・教育・研究へ邁進する所存です。皆様、今後とも、何卒御指導

御鞭撻宜しく御願ひ申し上げます。(山田 記)

形成再建外科学

2017年2月までの近況につきご報告いたします。

教室人事では2016年10月より松本洋が新医局長として就任いたしました。

また2017年1月に形成外科専門医試験があり、当医局員では品岡、北口、森田の3名が無事合格しております。

臨床においては頭頸部がんセンター、乳がん治療・再建センター、ジェンダーセンター、小児頭蓋顔面形成センター、口唇裂・口蓋裂総合治療センター等の各連携部門をはじめ、リンパ浮腫診療など、何れも例年通り多くの症例数を治療しております。

特にジェンダーセンターについては、次年度から性同一性障害に対する外科的治療の一部が保険収載される見通しとなり、現在調整のため多忙を極めております。

国際活動に関しては例年通りミャンマーでの医療支援ミッションを1月に無事完了しました。当科からは木股、杉山、徳山、妹尾、駒越が参加し、岩国医療センターから青 雅一先生が参加されました。また、1月よりミャンマー人形成外科医であるYi Yi Cho Thein先生を留学生として迎えました。現地の形成外科医療をけん引すべくマイクロサージャリをはじめとした技術を約半年かけて習得していただく予定です。

その他教育分野では当科の特徴であるマイクロサージャリトレーニングプログラムにおいて、インドネシアより2名の形成外科医師を学外訓練生として受け入れ、無事修了されました。

当教室は今後も、地域医療を担う医師の育成と、常に最良の医療の開発、改良を臨床、研究両面から追い求め、世界に発信していくよう日々邁進してまいります。

同窓の先生方におかれましては、引き続き変わらぬご指導・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。(妹尾 記)

老年医学

老年医学分野の近況をご報告させていただきます。

研究面では、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構(JAEA)および岡山大学大学院保健学研究科/耐災安全・安心センターとの共同で、「極微量ウラン影響効果試験」を平成19年度から継続していま

す。本研究は、ラドンの影響効果の実験的検証(岡山大学成果)及び解析評価から得られるラドンの体内動態のメカニズム(JAEA成果)を双方の成果として得ることを目的としています。平成29年度、学会(第70回日本酸化ストレス学会学術集会、日本放射線影響学会第60回大会など)および論文(Radiation and Environmental Biophysics、Journal of Radiation Research)でその成果を発表しています。

教育面では、高齢者の特性を踏まえた医療に関する最新の知識を学習し臨床・研究に生かすことを目標として、大学院博士課程選択プログラム「臨床老年医学特論」を平成29年度より開講いたしました。今後、高齢者医療に関して、実際の臨床に即して、学部から大学院を通して一貫した教育ができるよう体制を整えていこうと考えています。

また、平成30年1月、岡田 茂 名誉教授ならびに形成再建外科学 木股敬裕教授のご尽力で、光延は第46回ミャンマー医学研究会総会において老年医学に関する講演をする機会を与您いただきました。高齢者医療については、日本とかなり状況が異なっている印象でしたが、多くの医療関係者、医学生が参加されていて、非常に熱心な討議がなされました。

診療・研究・教育の面で、さらに少しでも貢献できるよう努力する所存です。同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしく御願ひ申し上げます。(光延 記)

臨床遺伝子医療学

腫瘍制御学講座 臨床遺伝子医療学分野の2017年度下半期の活動報告をさせていただきます。

近年益々ゲノム医療は広まってきており、社会的な需要も高いのですが、それに応えるべき医学的エビデンスが膨大な需要に比すとまだ少ない事、また遺伝子型(genotype)による差別を抑制するための法律が未整備である事など、問題が山積しております。これらの問題点を抽出し改善しつつ、ゲノム医療と医学を進める事が必要とされております。

ユニバーサルスクリーニング検査や遺伝子パネル検査が広がるスピードは大変速く、二次的所見として予期せぬ疾患に関与している可能性がみつかった場合のフォロー体制の構築などが早急に必要で有り、当講座も岡山大学病院のゲノム医療に協力してゆきたいと存じます。

2017年11月に岡山大学病院にゲノム医療総合推進センターが設立され、当講座も他の診療科やスタッフと

共にゲノム医療の推進のための仕事に関わる事になりました。このようにゲノム医療を取り巻くシステムが少しずつ改善していく過程で、横のつながりがさらに強化されて参りました。例えば継続しております抗がん剤適応遺伝子検査外来の次世代シーケンサー解析による腫瘍関連遺伝子パネル検査でも、検査結果開示前のエキスパートパネル会議（多職種から成るゲノム検査結果の検討会議）に、複数の病理の先生、複数の分野の癌診療の先生方に参加いただき、組織検体の質や、組織学的検査から予想される腫瘍の特徴、入手可能な最新の癌治療の情報を教えていただきながら、検査を受けられた患者さんに対する治療法を探求しております。

また岡山大学病院神経内科から引き継ぎ、3年前から当講座が主催しております岡山臨床遺伝カンファレンスでも複数の職種、複数の診療科から症例提示・参加いただいております。

2017年の人事の動きとしましては4月から病理部の井上博文が当講座の大学院に入学し、豊岡教授指導の下研究を行っております。また同じく4月からリサーチコーディネーターの中務美貴も仲間に加わり多方面のコーディネートを行っております。

当講座は少人数で成っており、その活動は全て、多くの、広い分野にわたる専門家の方々の御指導や御協力で成り立っております。この場を借りまして心より御礼申し上げます。（母里 記）

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設（光・放射線鹿田施設）のスタッフは小野俊朗施設長（教授）、花房直志准教授、長田直之助教、金野郁雄技術専門員、永松知洋技術専門職員、富永亜希特別契約職員（技術職員）、今田 結特別契約職員（技術職員、6月16日着任）、寺田輝子事務補佐員の8人です。このうち小野俊朗施設長、金野郁雄技術専門員、富永亜希特別契約職員が本年度末を持って退職します。後任の選任や技術職員の補充の有無については未定の部分がありますが、決定次第ご報告します。平成29年度後期の主な報告事項としては、まず料金の改定があります。これは運営予算の圧縮や施設の老化に伴う維持管理費の増加に対応するため、受益者負担をお願いするものです。よろしくご協力お願いします。詳細は鹿田施設のウェブサイトでご確認ください。そのほかの報告事項としては平成29年4月に公布された法令改正への対応の動きがあります。これはセ

キュリティーやセイフティーの強化を主眼とする改正ですが、利用者に関わる部分では教育訓練の項目と時間数の変更が行われています。詳細はこれから公開されるガイドライン等に基づいて事業所毎に定めるようになりますが、動向にご留意ください。平成29年11月1日には新規利用者を募るためSPECT/CT装置の利用者講習会を開催しました。平成30年1月26日には自然生命科学研究支援センターコロキウムが開催され、花房が「e-ラーニングを用いた放射線教育の取組み」の演題で発表しました。平成29年度後期の教育訓練講習会は例年通り9月、11月、1月に開催しました。また英語での教育訓練を11月に2回目を開催しました。e-ラーニングによるエックス線業務従事者のための教育訓練は3回目を開講しました。

（花房 記）

動物資源部門

動物資源部門鹿田施設では、飼育設備として個別換気飼育装置1台、イヌ・ブタ兼用飼育ケージ5台を整備した。小動物の実験環境整備として、マウス・ラット実験区域等にスイング式冷却遠心機2台、パッケージエアコン2台、製氷機2台、麻酔気化器1台並びに安楽死用ボックスの設置を行った。また、マウス・ラット行動観察装置（細胞生理学教室松井秀樹教授から提供）の共同利用化を行った。中型動物実験区域には、中型動物用の生体モニター1台と移動式无影灯1台の増設を行うとともに、本学病院で医療用として用途廃止となったダヴィンチシステムを動物実験用として再活用するために移設した。

施設設備面では、3階の霊長類等飼育室の防水、蒸気配管並びに排気ダクト等の手直しを行うとともに、冷暖空調チラー装置（平成21年設置）等の不具合修理を行ったが、特に目立った整備は行わなかった。

施設の教育活動では、平成28年12月12日～21日にかけて例年通り医学部医学科の生物学実習を、平成29年1月27日及び28日にかけて実験用ブタの取り扱い手技（入門）講習会を昨年度に引き続き開催した。さらに、10月23日～11月2日にかけて、秋期のマウス及びラットを用いた取り扱い初心者&初級講習会を開催した。さらに、11月25日に麻酔蘇生学教室主催のセミナー「術中RMとPEEP」が、ヤギを用いてメインウェットラボ室で開催され、本部門が実施の支援にあたった。

人事面では、特に動きはなかった。（椛木 記）

薬 劑 部

人事関係では、特に異動はなかった。

業務関係では入院病棟業務の拡大を目指して手術部での薬剤師業務の在り方の検討を開始している。服薬指導件数は昨年より増加が予測され、安全・安心な薬物療法の実践を行っている。

学会活動として、国際学会としてNeuroscience2017(米国：ワシントンDC)、国内学会としては第27回日本医療薬学会年会(千葉)、日本糖尿病学会中国四国地方会第55回総会(岡山)、第65回日本化学療法学会西日本支部総会(長崎)、第56回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会(徳島)、第55回日本癌治療学会学術集会(横浜)、メタルバイオサイエンス研究会2017(岡山)、第76回日本癌学会学術集会(横浜)、第39回日本生物学的精神医学会・第47回日本神経精神薬理学会 合同年会(札幌)、第1回日本精神薬学会総会・学術集会(東京)、第2回薬学教育学会大会(名古屋)、日本医療マネジメント学会 第19回 岡山県支部学術集会(岡山)、第17回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2017 in 名古屋(名古屋)で発表を行った。

学術論文として、2017年度は英文原著論文に15報、和文に5報、総説・解説20報の研究成果を掲載した。

学会シンポジウムは17口演(国際学会含む)、地域・研究会での講演は68口演を行った。

教育関係では、薬学部5年次の長期実務実習が開始され、平成29年度第Ⅱ期(9月4日～11月17日)16名(岡山大学薬学部)、第Ⅲ期(1月9日～3月23日)(岡山大学10名：福山大学1名：大阪薬科大学1名：神戸薬科大学2名)を受け入れた。(北村 記)

卒後臨床研修センター 医科研修部門

平成29年度マッチ結果では、先進プログラム42名、小児科特別プログラム2名、産婦人科特別プログラム2名がマッチし、昨年に続きフルマッチとなりました。46名中26名(海外大学2名)が他学出身の学生であり、これも協力型病院・施設との連携によるたすき掛けプログラムの充実によるものと思います。

11月4日(土)には、1年目 原田洸 研修医が中心となり『第3回瀬戸内レジデント』を開催いたしました。研修医による研修医と医学生のためのセミナー・ワークショップであり、岡山県内の研修医と協力して運営し、昨年にも増す60名の参加がありました。

平成30年1月5日の岡山大学病院互礼会では、病院

長賞である榎の木賞を、学生の勧誘やプログラム改善に貢献した2年目 松尾逸平 研修医が受賞しました。

各学会では、原田洸 研修医が第110回日本循環器学会中国・四国合同地方会で研修医奨励賞を、安原大貴 研修医が第57回日本呼吸器学会中国・四国地方会で研修医優秀賞を、岡凌也 研修医と藤井裕美子 研修医が第92回中国四国外科学会総会 第22回中国四国内視鏡外科学会研究会で奨励賞を、内藤修子 研修医が第108回日本消化器病学会中国支部例会で研修医奨励賞を受賞しました。また、原田洸 研修医は救急科、循環器内科、福山医療センターで、岸良匡 研修医と中井友美 研修医は救急科で論文発表をしております。ご指導頂きました先生方にこの場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

また、10月28日～29日には、卒後臨床研修指導医講習会を開催し、36名の指導医の先生方にご参加頂き、より良い臨床研修を考える2日間になりました。

若手医師がアカデミックに活躍し、切磋琢磨しながら成長することができるのは、日ごろから熱心にご指導頂き、教育の重要性を肌で感じ取る環境で育ってきた賜物と思います。協力型病院・施設の先生方、今後とも研修医のご指導をよろしくお願いいたします。

(三好 記)

先端循環器治療学講座

先端循環器治療学講座は平成22年4月に、循環器疾患の新しい診断、治療に関連する研究を行う目的で開講され、今年で9年目となります。当講座の母体である循環器内科の伊藤教授のご尽力により、今年度末までの継続が決まっております。スタッフは、森田(教授)、西井(講師)で、2名と少人数でございますが、循環器内科とともに、研究・臨床に精力的に活動しております。臨床研究では西井が中心で行っている心臓植込み型デバイスを用いた多施設共同研究が論文化され、現在、治療介入を行った研究が進行中です。さらにはランダム化試験も構築中です。研究・遠隔診療のデータ解析については循環器内科の三好(章)先生、川田先生、森本先生、宮本先生など多くの先生にもご協力頂き、順調に進んでおります。学会では植込みデバイス関連冬季大会(2月)、日本循環器学会(3月)などで発表し、また、新たな多施設共同研究も進めております。今後も、Heart Rhythm(5月)、European Society of Cardiology(8月)、日本心不整脈心電学会(7月)、アジア・太平洋不整脈学会(10月)

など国内外の学会で報告を予定しており、論文作成も行っています。これからも広く循環器系の臨床・基礎研究に取り組んでまいります。多くの先生方の協力のもと、研究・教育・診療を行っており、ここに感謝の意を表させていただきます。今後とも、ますますのご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

(森田 記)

地域医療人材育成講座

地域医療人材育成講座が設立されて9年目を迎えます。平成29年度の活動について報告します。

本講座は多くの医療機関にご協力いただきながら、1年生に早期地域医療体験実習、2～3年生にかけて地域医療体験実習、5～6年生に選択性臨床実習を行っています。低学年の実習では、臨床医学の視点ではなく、望ましい医療人のあり方、実際が多職種連携の様子といった医療そのものを学んでいます。また、指導医の先生方を対象として、12月6日にFaculty Developmentを開催しました。医療法人松藤会入江病院の入江聰五郎先生をお招きし、「研修医が落ちこぼれたらどうするか、落ちこぼれない研修環境はどう作るか？」と題して講演をいただきました。講演後には、学生・研修医指導の疑問、なんでも相談室と開き、現場で苦慮している事例にどう対応すべきかグループディスカッションを行い、アイデアを共有しました。

この春からは新たに地域卒業医師3名が地域勤務を開始しました。新しい専門医制度もスタートし、それぞれ希望する専門性と地域貢献を両立できるよう支援することが求められます。岡山県地域医療支援センター、岡山県医療推進課と連携し、継続的にサポートしていきます。文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業に採択された「地域を支え、地域を科学する総合診療医の育成」のプロジェクトは昨年度で終了となりましたが、実質的な活動を継続し、地域で求められる総合診療医の育成に努めていきます。

今後も地域医療を担う医師の育成とより良い地域医療の推進のため努力して参りますので、引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくようお願い申し上げます。

(岩瀬 記)

CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、平成23年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座の仕事を引き継ぎ発展させる目的で、平成28年11月から3年間の設置とな

りました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病（CKD）重症化や心血管疾患（CVD）合併の予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁准教授（腎臓内科）と吉田賢司講師（循環器内科）より構成されています。

内田は日本慢性腎臓病対策協議会（J-CKDI）の幹事、岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部委員等を務めております。病診連携におきましては、岡山市CKDネットワーク（OCKD-NET）セミナーを平成30年3月に開催しました。OCKD-NETでは病診連携患者の前向き追跡検討を継続して実施しております。県や市など自治体との連携に関しましては、岡山市や美作市などでの特定健診フォローアップ事業の効果解析を各自治体と共同で実施しています。啓発活動としては、平成29年10月に奈義町で、同年11月に勝央町で、平成30年2月には赤磐市および美作市で、それぞれCKDに関する一般住民向けの講演会を開催しました。平成30年3月には毎年恒例の世界腎臓デーのイベントおよびCKD県民公開講座を開催しました。

研究活動ですが、臨床研究としましてCVD進展リスク因子の解明・重症化予防診療システムの開発を目的とした多施設共同CKD・CVDコホート研究（Kakusyo 3C study）を継続しております。参加施設の先生方におかれましては、最大で平成32年までのfollow upのご協力を何卒宜しくようお願い申し上げます。基礎研究としまして、内田はアンジオテンシンⅡが心・腎・血管へ及ぼす影響の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて成果を報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方のご指導、ご鞭撻の程宜しくようお願い申し上げます。（内田 記）

救急外傷治療学講座

平成26年11月に開講した本講座は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院を母体とした寄付講座です。聖マリア病院は、年間救急車受け入れ台数1万台を超える西日本最大級の救急病院で、一次から三次まで内因性外因性を問わず全ての疾患を対象として地域救急医療に大きく貢献しています。診療ベッド数は1097床で、全診療科が救急外来に協力し、内科・外科・循環器科・産婦人科・小児科のみならず脳疾患チーム・形成外科・整形外科も常に院内オンコール体制で待機し、あらゆる

る患者の受け入れに万全を期しています。

さらに当講座は平成28年4月より岡山大学病院の救急初期研修協定病院として連携を開始しています。初期研修医は交代で3ヶ月間の救急研修を行っており、各科専門医の指導の下で多様な救急患者の診察と治療に当たり、多くの症例を経験して充実した救急研修を行っております。

人事関係では、鶴川・山内が昨年3月で退職し、9月より山本（助教）と小崎（助教）が就任しました。2名と少数ではありますが、各科の先生方に力添え頂き、救急科と一丸となって臨床業務を行っております。小崎はJPTECインストラクターとして、救急隊を中心に病院前外傷診療の指導を定期的に行っており、多職種とも連携しながら外傷診療の向上を目指しております。

研究面では、10月の日本救急医学会にて小崎がマムシ咬傷の抗毒素治療に関する報告を発表しており、山本は小児痙攣重積での心停止症例をActa Medica Okayamaに論文投稿中です。今後はさらに研究成果を充実させていきたいと考えております。

救急医療は医学教育・研修医教育の初期段階において大変重要な分野であり、この責務を全うできるように一層の努力を重ねていく所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い致します。

（山本 記）

医療資源開発・学習支援環境デザイン学講座

開講3年目に入った本講座は、Society5.0におけるAI（人工知能）時代のスマート医療を見据え、医療人その他の医療資源（機器、材料、システム、インフラなど）とのつなぎ目となる、プロセス・マネジメントとしての「学び」をさらに深掘りし、未来医療の研究・開発・教育イノベーションを誘発することを目的とした未来創発型寄付講座です。そして、ついに今年が講座最終年度となりました。

また昨年度より、本講座は医療系鹿田キャンパス全体を包括するかたちで新設された「医療教育センター」において、情報戦略部門である「医療教育IR/IE部門」の担当を拝命し、今後は学内外の皆さまと医療系教育人材をより有機的につなぐ役割も果たしてまいります。

各種組織開発、製品開発・プロセス改善等に関するご相談がありましたら、専任職員である伊野（教授）並びに山下（技術職員）までお気軽にご連絡いただければと思います。

（山下範 記）

陽子線治療学講座

津山中央病院での陽子線治療は、平成28年4月28日に自由診療として開始、7月1日に先進医療適応となりました。岡山大学病院は津山中央病院と共同でがん陽子線治療センターを運用しております。大学病院では陽子線治療の外来を勝井が、井原と片山が診療にあたっています。紹介患者さんを含めて治療を受けた患者さんは徐々に増えてきており、中国からの患者さんもいます。今後も各診療科・センターの専門家の先生方とご協力して最適な放射線治療を提供してまいります。引き続き何卒お願い申し上げます。

陽子線治療は平成30年2月時点で前立腺癌、肝臓癌（原発、転移）、肺癌（原発、転移）、小児腫瘍、胆管癌、膵臓癌、食道癌、脳腫瘍に対して行っています。陽子線治療の現在の保険適応は診断時20歳未満の小児腫瘍ですが、平成30年4月の改正で適応疾患拡大の可能性がります。その他の対象疾患は先進医療で運用され、技術料として自費にて288.3万円（津山中央病院の場合）必要で、入院・薬剤・検査等は公的保険が適応されます。超希少がんを扱うことが多い小児・脳腫瘍は、岡山大学病院小児血液・腫瘍科、脳神経外科、血液・腫瘍内科とのカンファレンスにて方針を決定しております。

陽子線治療の説明会は、井上病院、岡山市医師会、松田病院、姫路赤十字病院、岡村一心堂病院、松山市民病院、水島協同病院、姫路聖マリア病院、山口宇部医療センター、KKR高松病院にて開催していただきました。同窓の先生方にはこの場をお借りして深謝申し上げます。

陽子線治療を皆様には是非ご利用いただき、お役に立てればと考えておりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

（勝井 記）

三朝地域医療支援寄付講座

2017年3月から2018年2月までの報告をさせていただきます。

人事では、1月から6月まで、循環器内科学教室の更科俊洋医師が、7月から12月まで、血液・腫瘍・呼吸器・アレルギー内科の二宮 崇医師がそれぞれ半年間勤務されました。

本年1月より消化器・肝臓内科学教室の友田健先生が赴任・診療にあたっています。

当講座は、三朝医療センターの診療部を継続しながら、地域住民の健康意識向上も目的としております。

本年度も昨年に引き続き、10月21日に東京大学秋下雅弘教授（老年医学）をお招きし、倉吉市で市民公開講座「高齢者のための医療講座：健康長寿を達成するために」を開催いたしました。

また、芦田がその中四国支部幹事を務めておりますので、日本温泉気候物理医学会・温泉療法医学会の近畿・中国四国地区合同研修会を2月25日三朝温泉で開催しました。特別講演の一部は地域住民・温泉関係者に公開して開催しております。

講座が開設され2年間が経過いたしました。この間、ご協力いただきました諸先生方には、心より感謝申し上げます。

そして、今後ともよろしくお願い申し上げます。

（芦田 記）

血液浄化療法人材育成システム開発学講座

本寄付講座は平成28年1月に開講し、腎不全、特に血液透析を主体とする血液浄化療法に関する教育、研究等に力を入れております。杉山 斉教授は、慢性腎臓病（CKD）や腎不全治療に関する研究・教育・臨床に精力的に取り組んでおり、研究は基礎研究から疫学調査、臨床研究に至るまで幅広く網羅しております。腎不全治療の更なる向上と地域連携による人材育成システムの開発を目指しております。

平成29年9月に主催した岡山アクセスセミナー2017では岡山大学病院 腎臓・糖尿病・内分泌内科 竹内英実先生と重井医学研究所附属病院 臨床工学科 北原崇之先生に一般講演を、特別講演では洛和会音羽記念病院 副院長 中村智宏先生よりバスキュラーアクセスとアクセス地域連携について非常に実践的な内容の講演をして頂きました。また、杉山教授が、岡山県透析医部会関連施設にご協力いただき行ったアンケート調査「アクセス管理と連携」の結果報告を行いました。アクセス地域連携についてパネルディスカッションも行い、有意義な討論を行うことが出来ました。

学会等の活動では、杉山教授が平成29年9月に第6回糖尿病性腎症勉強会（福山）にて特別講演「慢性腎臓病の最近の話題～糖尿病性腎症、腎臓リハビリテーションを含めて～」を行いました。10月に第23回日本腹膜透析医学会学術集会・総会でワークショップ「失敗から学ぶ腹膜透析」にて「長期PDの課題と今後の展望～EPS、残存腎機能の問題を含めて～」の発表を行い、同月に第40回日本高血圧学会総会ランチョンセミナー「ファブリー病の早期診断と治療～最新のトピックスを含めて～」にて講演を行い、11月に中国腎

不全研究会（広島）にて基調講演「岡山県におけるアクセス連携」を行いました。大西は平成30年2月に岡山県CKD・CVD対策専門会議の事業の一環として慢性腎臓病（CKD）研修会にて講演を行いました。

今後も腎不全、血液浄化療法の研究、教育や診療を通じて人材育成システム開発に尽力して参りたい所存です。本年6月には、第103回岡山透析懇話会を開催し、当番世話人を杉山教授が務める予定です。

本講座は岡山県医師会透析医部会を中心に、透析関連施設よりご支援を頂いております。末筆となりましたが、関連病院における先生方には、平素よりお力添え頂いておりますことを厚く御礼申し上げます。引き続き御指導御高配を賜りますようお願い申し上げます。（大西 記）

運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に対する治療法の研究・開発を行い、国内の運動器外傷に関する教育を牽引することを目的としています。スタッフは野田知之（准教授）、中原龍一（助教）、増田鈴子（秘書）の計3名です。

基礎研究では「整形外科インプラントのMRI発熱予測システムの開発」、免疫病理・松川教授との共同研究で「抗菌性骨接合材」にかかわる研究など、臨床研究では野田を研究責任者とする“脛骨遠位端骨折に対するDTN（ディスタルティビアルネイル）の有効性と安全性に関する多施設共同臨床研究”も当院を含む国内9施設で継続中です。

臨床面では救急科と連携しての多発外傷・高エネルギー外傷に関連した重度整形外傷に対する専門的・集学的治療を急性期から一貫して提供しており、最近では人喰いバクテリアなど重傷感染症の治療も増加しております。またさらに他院で対応困難な骨盤骨折・寛骨臼骨折など難治性骨折に対する紹介や手術支援も多数の依頼があり対応しています。

国内外の学会活動も精力的に行っており、野田は日本骨折治療学会の理事（国際委員会担当理事）として国際交流など精力的に活動しています。また教育活動としては本年度も恒例の臨床解剖実習を、大塚教授はじめ人体構成学教室のご協力により3月に開催予定です。多くの若手医師の手術技術向上に寄与しており、ご協力に感謝するとともに、今後も若手整形外科医師の積極的な参加を期待します。

同窓・同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。（野田 記）

地域救急・災害医療学講座

本講座も発足して1年が経過しました。人事異動については救急科内での異動ではありますが、2018年4月をもって准教授の任に就いていた内藤宏道が救急科・准教授への異動となり、後任として救急科・助教尾迫貴章が本講座の講師として着任します。

講座員2名（内藤・山川）での活動ではありましたが、臨床・教育はもちろんのこと11月には内藤がアメリカ・アナハイムへAHAの学会へ参加しました。山川は7-9月の6週間、ドイツ・マインツへの短期留学を終えて帰国しております。そのほか10月の日本救急医学会学術総会で発表した「指切創処置時における私の工夫」の指ブロック（1回腱鞘内注入ブロック法）が医師向け最新医学・医療情報サイトであるm3.comに取り上げられ注目記事ランキング1位を獲得するなどしました。

今年度も臨床・教育・学会活動に積極的に取り組み、講座の運営に取り組んでいきたい次第でございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。（山川 記）

岡山県南東部（玉野）総合診療医学講座

平成29年4月に玉野市と総合内科学への連携で開講した講座であり、玉野市を中心とした岡山県南東部における地域医療に多面的な貢献を行うことを目標のひとつとして活動いたしました。

玉野市民病院においては内科診療を担当し、総合内科医として診療を行う中で、担当教官の専門である伝統医学（漢方医学）領域、循環器科領域の診療を積極的に行いました。伝統医学領域においてはコメディカルに対し講演会を通じた教育も実施いたしました。循環器科領域においては心臓超音波検査の実施と同時に検査技師への教育も行い、診療内容の充実を図りました。

地域医療においては病診連携も重要な要素と思われるため、定期的に行われている玉野市臨床研究会での演題発表を行い、玉野市医師会の医師、コメディカルとの交流を行いました。

これまで岡山大学医学部では学生の地域医療体験実習が実施されてきましたが、玉野市民病院においては今年度初めて早期地域医療体験実習（1年生）及び地域医療体験実習（2-3年生）を行う学生の受け入れが行われました。受け入れに際して、各科の医師をはじめスタッフの方々に多大なご協力をいただきましたことに感謝申し上げます。学生からは貴重な経験に

なったという言葉が多く聞かれており、こうした活動が将来の地域医療に貢献する医療人の育成の基盤になることを期待しております。

岡山大学においては、総合内科での診療を担当いたしました。教育面では総合内科において学生の臨床実習を担当し、医学部学生に対する内科総論、東洋医学の講義も担当いたしました。また、伝統医学の卒前・卒後教育として定期的に勉強会を開催し、その普及を図りました。

来年度も同様な活動を行いたいと考えております。

（植田 記）

岡山県南西部（笠岡）総合診療医学講座

本講座は、平成29年4月に笠岡市と総合内科学への連携のもと、寄付講座として開講いたしました。現在、医学教育において地域基盤型医学教育【Community-based medical education】が重要とされており、高齢化が進行し、かつ島嶼部を併せ持つ笠岡市という特色のある地域で、医学教育、研究を行っていきたくと考えております。現在は、笠岡市民病院での診療を通して、地域医療の実際を学ばせていただいているのと同時に、白石島での診療を通じて、離島医療の難しさ、島民の方の不安などを含めた実情を学ばせていただいております。平成29年度は、医学部1年生に対する早期体験地域医療体験実習で1名を、2-3年生に行っている地域医療体験実習で2名の学生の受入れを行いました。地域医療体験実習は地域医療人材育成講座が中心となって行っているものですが、実習や実習前の講義等について連携・協力を行っています。また、卒後臨床研修センターとの連携を通して、笠岡の地域でも卒前-卒後のシームレスな医学教育活動を行い、臨床、教育、研究の分野でリーダーシップをとれる総合内科医・総合診療医の育成に努めたいと考えております。多くの先生方のお力もお借りしながら、教育、研究、臨床のそれぞれの場面で、努力を重ねてまいりたいと思っております。引き続きご指導のほど、よろしくお願いいたします。（小川 記）

高齢者救急医療学講座

本講座は、平成29年11月1日付で救急医学講座、中尾篤典教授のもと井原市の寄付により開講をいたしました。この講座の設置目的は、高齢化のすすむ地域医療における高齢者救急医療の在り方についての課題に取り組むとともに、救急医療を含めた地域医療体制の

構築や人材育成を実践することにあります。スタッフは万代康弘、青景聡之の2名で頑張っておりたいと思っておりますが、大学においても地域においても救急医療や人材育成は様々な方々のご支援を頂かなければ成り立つものではありませんので、お力添えをどうぞ宜しくお願い申し上げます。

まだ開講してわずか数カ月ではありますが、井原市と岡山大学において活動を開始しております。主に現時点で井原地域医療における救急体制の構築のための現状把握とニーズアセスメント、多職種にわたる人材育成プランの実践と育成システムの構築を手掛けてきております。

今後は更に活動を本格化させ、高齢化社会における地域救急医療の実態調査・研究、救急患者の背景等の実態調査、高齢社会での在宅医療を含む地域医療の在り方について、また人材育成面では救急に携わる医師、看護師は勿論ですが、地域医療で重要な役割を果たす訪問薬剤師、訪問看護師、ケアマネージャー、介護福祉士、理学療法士などの多職種にわたる人材育成をそれぞれの目標設定のもと、実践してまいります。

まだまだ未熟な本講座でございますが、同窓・同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。(万代 記)

授)、難波由美子看護師長の新しい体制となりました。看護師数は約80人、20以上の診療科が年間10,000件以上の手術を行っています。手術室はハイブリッドを含む20部屋、臨床工学技師10名とともに安全な手術室環境を提供しています。最後の砦病院を支える手術部では、診療科が希望する手術を断らない体制を整えています。全国国立大学病院第4位の手術件数で、手術割合(Kコード)は94%以上、そのほとんどが手術です。

麻酔科管理症例は約70%で、診療科医にとって安心して手術が行える環境となっています。本年よりPACU(Post Anesthesia Care Unit)と改称したりカバリーでは専従の看護師と麻酔科医師を配置し、術後患者の全身状態への継続的な介入を行い安定した状態で一般病棟へ橋渡しを行っています。また、海外医療支援に積極的に協力し、ベトナム、ミャンマーへ専門性の高い手術室看護師を派遣しています。

滅菌材料部門では年間60万個の滅菌を行い、外来含むすべての診療に安全で確実な滅菌物を提供しています。

今後も皆さまの診療を支える手術部として、その役割を担っていきたく思います。

ご協力ご支援のほどよろしくお願い致します。

(川上 記)

検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。渡部俊幸副技師長が平成30年3月で早期退職、後神克徳主任が平成30年3月で定年退職されました。業務上では昨年5月に新総合診療棟へ検査部が移転し、順調に稼動しています。教育関係では保健学科学生および倉敷芸術科学大学学生の臨地実習および本学医学科学生のポリクリを受け入れました。資格関係では日本臨床神経生理学会認定技術師認定証 脳波分野 筋電図・神経伝導分野が2名、感染制御認定臨床微生物検査技師に1名が認定を取得しました。研究・学会活動では、全国学会で7演題、地方学会で10演題発表しました。また、邦文論文5編が掲載されました。その他にも臨床検査技師教本などの執筆もありました。表彰関係では10月に渡部俊幸副技師長が病院優良職員表彰、11月に青江佐佳恵技師と信定さおり技師が岡山大学永年勤続表彰を受賞されました。(岡田 記)

手術部

手術部は本年4月より尾崎敏文部長(整形外科学教

循環器疾患集中治療部

循環器疾患集中治療部は心疾患術後の集中管理を行うユニットで、これまでの集中治療室の概念を破る高度な医療設備とスペースを備えています。これまでと同様に循環器部門、特に重症心不全患者と心臓血管外科に全国から受診されるハイリスクな心疾患患者の術前・術後管理を担当する部門として高度な集中管理を行っています。

先天性心疾患においては2017年の人工心肺手術が371例でありました。この術前術後管理を担っていますが、これは全国で3番目であり、国公立及び私立大学では1番の症例数であります。岡山大学では循環器内科の伊藤浩教授と循環器疾患治療の赤木禎治准教授が中心となって成人先天性心疾患センターが国立大学で初めて2014年の8月に設立されました。成人先天性心疾患は、心機能に直結した問題や、医学的な全身臓器の問題のみならず、就職、結婚、妊娠、出産、社会保障と多岐多様な問題を持っております。循環器内科、小児科、心臓血管外科のみならず、肝臓内科、腎臓内科、歯科、精神科、看護部が積極的に集い1ヶ月に1回の症例検討会を行っています。年間20-30例の成

人先天性心疾患手術症例が、関東や九州からも紹介され手術治療を行なっております。循環器疾患治療部もこの中心メンバーとして、岡山大学のチーム医療の実践を行なっております。

心房中隔欠損症や動脈管開存症のカテーテル治療はこれまでに1000例を越す治療を実施し、国内トップの症例数と実績をあげています。全国各地から患者さんの紹介をいただいています。さらに同様の治療を行う各地の大学病院へ治療技術指導を行っています。治療実績は海外でも高く評価されており、数々の国際学会から招請を受けています。奇異性脳梗塞再発予防のための卵円孔閉鎖術、片頭痛治療目的とした卵円孔閉鎖術（自由診療）も国内で先陣をきって実施しており、これからも新しい知見を国内外に発信していきたいと思っています。（赤木 記）

総合リハビリテーション部

千田益生教授のもと、PT28名、OT6名、ST4名、看護師1名、クラーク1名で日常業務をこなしております。医師は整形外科より、交代でリハビリテーション（以下、リハ）の診療業務をリハ医とともに行っています。リハ室は総合診療棟西4階にあり、オープンスペースで明るく快適な空間となっています。スタッフ一同、心新たに日常業務を頑張っています。

学会は日本リハ医学会、日本運動器科学会、中国四国リハ研究会、日本PT学会、日本OT学会、日本食道学会などスタッフ一同、慣れないながら発表を行っています。療法士の発表は、様々な分野にわたり、多科の先生方にいろいろとご指導いただいております。大変感謝いたしております。カンファレンスも担当者を決めて参加させていただき、連絡事項などはリハ部へ持ち帰り、全員で共有できるよう心がけております。

教育面では、医学生4・5年生が整形外科の2週間の中でリハ実習の時間に、リハ診察・筋電図実習・理学療法・作業療法など学んでもらっています。選択実習も4名ではありますが、選んでくれた医学生には、筋電図やリハ診察を積極的に学んでもらい、最終日にはリハ関連の課題についてプレゼンテーションを行っています。

スタッフ同士でいつも連絡も密にとるよう心がけておりますが、行き届かない点多々あると思います。お気づきの点がございましたら、お知らせいただくと幸いです。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（堅山 記）

病理診断科・病理部

柳井広之教授のもと、助教3名（田中健大、田中顕之、都地友紘）、医員3名（谷口香、柴田嶺、小野早和子）の合計7名で日常の業務にあたっています。技師では1月末をもって濱田香菜が退職し、山口祐菜を新たに採用しました。前任地である広島大学病院での経験を活かして、赴任直後から即戦力として働いてくださっています。行事といたしましては2月16日に恒例の岡山県がん病理診断従事者研修会を開催し、熊本大学の三上芳喜先生をお招きして子宮頸がんについての講演をしていただきました。

ゲノム医療の推進や医療の個別化によって、病理診断に期待されることが多くなっていると感じています。小所帯で力を合わせて頑張っていきますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。（田中 記）

輸血部

輸血部は昨年5月に総合診療棟西3階へと移転となり、もうすぐ1年が経過します。当初は、新しい場所がわからないとの問い合わせもありましたが、外来患者さまの自己血貯血も含め大きなトラブルなく引越しが完了しました。業務面では、平成29年度を通じてアルブミンの輸血部管理開始に向けて準備を進めて参りましたが、いよいよ今春から運用開始となります。

学会活動では、9月30日に愛媛県松山市で開催された第62回日本輸血・細胞治療学会中国四国支部例会において、藤井敬子医師が「健常人ドナーにおけるクエン酸中毒」を、間結稀技師が「診療科の要望を反映した緊急輸血に関する輸血マニュアルの改訂」を発表しました。特に間結稀技師は学会発表のデビュー戦でしたが反響の良い発表でした。今後の活躍を期待します。

臨床輸血看護師は院内での活動を着々と進めています。高木尚江看護師はそのアクティビティの高さが評価され、さまざまな施設からの講演依頼が相次いでいます。本年度の論文発表は浅野尚美技師が輸血細胞治療学会雑誌に「血小板製剤内のフィブリン塊」を発表しました。

今後も引き続き院内の輸血安全に貢献し適正使用を推進していく所存ですので、ご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。（藤井 記）

血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田淳部長（腎・免疫・内分泌代謝内科学教授）のもと、スタッフ医師4名（木野村賢、田邊克幸、山成俊夫〔腎・免疫・内分泌代謝内科学〕、大西章史〔血液浄化療法人材育成システム開発学〕）、医員5名（益田加奈、田中景子、垣尾勇樹、谷村智史、川北智英子）で診療にあたっています。また、女性支援枠で秋山愛由と梅林亮子も診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでいます。

血液浄化療法部は、昨年5月に総合診療棟西棟3階へ移転し、ベッド数も15床へと増床されました。同じフロアにCAPD外来も併設し、入院及び外来での透析治療に総合的にあたることのできる診療部門となり、以前には困難であった短期的な外来での通院血液透析にも状況に応じて対応できるようになりました。移転に際しては透析患者の受け入れを延期して頂くなどご迷惑をおかけいたしました。関連病院の先生方から多数の透析患者のご紹介を頂き、平成29年の当部への延べ受け入れ件数（アフレス療法を含む）は1988件と、平成28年より若干少ないながら年間2000件近い治療件数となっております。今後も、これまで以上に多様な診療に対応し、当院での安全で確実な透析療法及びアフレス療法を提供できるよう取り組んでまいりますので、同門の先生方、関連病院の先生方におかれましては今後とも患者のご紹介をお願い申し上げます。（田邊 記）

高度救命救急センター

岡山大学病院高度救命救急センターは、岡山県内のみならず中四国地方の急性期医療最後の砦として活動しております。

当センターは、救命救急外来・集中治療・高次医療機関対象特殊病態対応（四肢再接着・血管内治療・顔面骨折等）を臨床の柱としております。多発外傷や熱傷、中毒といった外因性疾患が入室症例の半数以上を占め、残りの内因性疾患症例も複数臓器不全を有する現状にあります。そのため、医師を定期派遣いただいている整形外科・脳神経外科・口腔外科をはじめ院内各科の皆様から、また連携施設の皆様には症例のご紹介や慢性期管理症例の後送等で多大なるご協力・ご支援をいただいております。この場をお借りしまして、

厚く御礼申し上げます。

また、中尾篤典のセンター長着任以後、災害医療にも尽力してまいりました。熊本地震への災害医療チーム派遣をはじめ、DMAT隊員養成事業等、精力的に活動しております。災害拠点病院として当センターが担う役割・責務は益々増加しており、その責務に充分に見合う体制整備を進めております。

当センターは、大学が担う責務である『教育』『研究』の更なる向上にも注力しております。

学生・研修医への講義・実習指導や院内での急変対応シミュレーション・災害訓練等は勿論、県民や県内医療機関・救急隊等にも対象を広げ、心肺蘇生講習や実技指導等の教育活動を展開しております。また臨床研究のみならず基礎研究の業績も積み上げております。

前述の事項を踏まえ2018年4月から、主要講座である『救急医学講座』の名称を『救命救急・災害医学講座』に変更させていただくことになりました。『救命救急センター＝臨床だけの汚い現場』のイメージを払拭しつつ講座名に恥じぬよう、そして皆様により信頼いただけますよう精進してまいります。

スタッフ一同、今後とも末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。（尾迫 記）

周産母子センター

周産母子センターは開設後10年が経過し、地域周産期母子医療センターとして、県内外から多数の症例をご紹介いただいております。

当センターは、合併症妊娠や習慣流産・不育症、周産期合併症などのハイリスク妊娠・分娩管理だけでなく、正常妊娠例や生殖補助医療（ART）にも積極的に対応しているのが特色です。分娩時大出血などの産科救急には、高度救命救急センターや麻酔科、放射線科などと協同で母児救命に取り組んでいます。また先天性心疾患に代表される胎児異常症例につきましては、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、小児麻酔科など関係各科と協同で診療に従事しております。

当センターには産科部門（周産期および生殖内分）とNICU部門があり、増山 寿産科婦人科教授がセンター長、鎌田泰彦が副センター長・准教授、産科婦人科の早田 桂が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めております。産科部門は、周産期専従医および生殖内分専従医を中心に産婦人科専攻医とともに診療にあたっております。NICU部門は、塚原宏

一小児医科学教授の指導下に、小児科専従医の鷺尾洋介、岡村朋香および産科婦人科の谷 和祐を中心に運営されております。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科（母体）18床、新生児集中治療室（NICU）6床、重症新生児病床12床。4階西病棟に産科（母体）5床がそれぞれ配置されています。地域医療への更なる貢献のため、病棟の整備ならびに今後の業務拡大に向けて、病院を挙げて取り組み始めています。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたるとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設として専門医の育成にも力を注いでおります。同窓の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しくごお願い申し上げます。

（鎌田 記）

腫瘍センター

腫瘍センターは田端センター長と久保の腫瘍内科医2人体制で、これまでと同様に他部署の方々の甚大なるご協力を賜りながら、患者さんに満足度の高いがん治療を受けて頂けるよう取り組んでおります。

平成30年2月に岡山大学病院は、がん患者の遺伝子情報に基づき、最適な薬品や治療法を選ぶがんゲノム医療の中心的な役割を果たす「がんゲノム医療中核拠点病院」に選定されました。腫瘍センターでは、平成27年12月より「抗がん剤適応遺伝子検査外来」を開設し、がんゲノム医療を実践しています。希少がんや標準治療が無効となった患者さんを対象に、腫瘍細胞における遺伝子異常を網羅的に解析し、多職種から成るエキスパートパネルにてアクセス可能な治験を含めた治療薬の可能性について検討し、患者さんへの情報提供を行っています。平成29年2月末までに56件の依頼があり、受診患者数は右肩上がりに増えております。希少がんや治療抵抗性となった患者さんの化学療法の依頼、相談などがございましたら、是非ご紹介頂けましたら幸いです。

また、腫瘍センター外来治療室では引き続き、歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、がん相談事務員など他職種からなるチームで患者さんの治療をサポートしております。多くの患者さんに利用して頂き（約40人/日）、免疫チェックポイント阻害薬を含む多種・多様のレジメンに対応しております。さらに、分子標的薬をはじめとした経口抗がん剤で治療を受けている人を対象に「内服抗がん剤サポート外来」も行っておりますので、あわせてご利用ください。

さらに、がん患者の就労について、がん診療拠点病院およびがん診療連携推進病院、地域がん診療病院にご協力いただき、アンケート調査を行いました。2012年のアンケート調査と比較すると、就労支援に関する環境は改善傾向にあり、がん対策の効果が窺える大変興味深い結果となっております。ご協力いただいた御施設の先生方、誠にありがとうございました。

腫瘍センターでは、今後も診療科・職種の枠を超えて質の高いがんのチーム医療を実践できる場、さらには地域で求められるがん医療に対応できる人材育成のための研修の場の提供を目指して活動を充実させていく所存であります。同窓の先生方におかれましては、今後ともご支援とご鞭撻のほど、よろしくごお願い申し上げます。

（久保 記）

内分泌センター

内分泌センターでは、内科・外科Cフロアおよび西7階病棟を拠点として内分泌外科・内科スタッフが一人となり、全身多臓器にわたる内分泌疾患に対して院内関連各科とスムーズに連携しながら日々の診療にあたっております。同窓の先生方を始め中四国の多数の医療機関から内分泌疾患の患者様を御紹介頂き、センターカンファレンスなどの場で活発な意見交換を行いながらチーム医療で取り組み、専門医や学生・研修医教育にも尽力しております。

2017年度下半期の学会活動として、内分泌学会中国地方会・日本生殖内分泌学会・日本甲状腺学会・日本神経内分泌学会・日本ステロイドホルモン学会・日本内分泌学会臨床内分泌代謝Update・日本外科学会定期学術集会・日本乳癌学会総会・岡山内分泌同好会など内分泌代謝領域の主要な学会・研究会に参加し、学会発表を行いました。

最後になりましたが、今後とも同窓の諸先生方の御指導・御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

（山内 記）

臓器移植医療センター

岡山大学病院での臓器移植を集中的に管理・運営することを目的として設立された臓器移植センターですが、大藤剛宏センター長・八木孝仁副センター長の下、当院での移植医療を円滑に遂行すべく日々業務にあたっております。

2017年10月に当院で脳死と判定されたドナーからの初の脳死腎移植術が施行され、同12月にも2例目が行

われました。この2例を含めて2017年の当院泌尿器科での腎移植件数は過去最多の14例となり、腎移植チームもますます高い活動性を維持しております。

また、2017年12月に肺移植チームが4歳の女兒に当院／世界で2例目の区域肺移植を成功させました。複雑でリスクも高い手術方法ですが、臓器提供の少ない小児患者にとって有効な手段の1つと考えます。

臓器移植医療センターとして先進的な医療を提供できるのも、各診療科のチーム力のみならず、病院全体での御協力の賜物であると考えております。今後も本邦屈指の臓器移植医療施設としての自負を持ちつつ、移植医療の発展に寄与するよう精力的に活動して参る所存ですので、引き続き同窓会の諸先生方の御指導、御支援を何卒宜しくお願い致します。(大谷 記)

超音波診断センター

超音波診断センターは、2011年4月に開設され今年で8年目を迎えました。

大塚文男センター長(総合内科学教授)、高谷陽一助教(循環器内科)と共に、今年度より新しく大西秀樹副センター長(消化器内科助教)を迎え、新体制にて診療に役立てる検査を心がけて日々業務に取り組んでおります。

研究面においては、日本超音波医学会、超音波医学会中国地方会、日本心エコー図学会など超音波に関する専門学会のみならず、日本循環器学会、日本消化器学会などの領域別専門学会においても積極的に研究発表を行っております。

教育面では、初学者(研修医など)向けに超音波検査を親しんでもらう講演会の運営への参加協力や、超音波検査波検査学会等専門学会における教育講演など積極的に活動しています。

4月に新たに1名の技師が超音波検査士(循環器領域)の資格を取得したことにより、当センターの技師全員が専門の超音波検査士(領域:消化器領域、循環器領域、血管領域、体表臓器領域)を取得いたしました。また超音波専門医1名も在籍しております。

超音波診断の向上に伴い、臨床現場での検査の需要が大変増加しております。他領域にわたる検査(循環器、消化器、血管、乳腺、甲状腺、関節など)に携わっている当センターにおいては、超音波検査件数は年々増加し、スタッフ一同が獅子奮迅の働きで対応しております。開設当初から使用している超音波診断装置の老朽化により作業効率(診断効率)の低下は否めませんが、患者様のために質の高い検査を行えるよう励ん

でおります。

(渡辺 記)

低侵襲治療センター

平成23年度岡山県地域医療再生臨時特例交付金によって整備されました低侵襲治療センターは平成24年の設立から5年余りが経過しました。センター長の藤原俊義教授のもと専任・兼任スタッフが、内視鏡手術機器を整備し、鏡視下手術を推進させ、県下の術者を育成することを目的に活動を継続しております。高度な手術手技が要求される鏡視下手術は実臨床前に十分なトレーニングが必要で、センターでは学生、研修医から鏡視下手術訓練機器、手術シミュレーターに触れられる環境づくりから、手術ビデオを用いた手術手技研究会や各分野のエキスパートによる講演、実技講習会等を通じて、若手の術者育成に努めてまいりました。現在、岡山大学病院には内視鏡外科技術認定医は消化管外科だけで8名を擁し、泌尿器科、婦人科を含め多数の技術認定医が在籍するに至っております。

手術ロボットダヴィンチによる泌尿器科手術は日常臨床として施行され、普及が進みました。消化管外科でも今春の保険承認を見据えて胃癌のダヴィンチ手術の症例を順調に重ねております。肥満外科手術、腹腔鏡内視鏡合同十二指腸手術などの新規術式の導入も行い、さらに近年保険内診療となった腹腔鏡下肝切除、膵切除の導入等、様々な鏡視下手術の普及に貢献してまいりました。平成30年度からロボット手術が多くの術式で保険収載され、今後その普及は必至であり、鏡視下手術を取り巻く状況のますます変化が予想されます。安全、安心な鏡視下低侵襲手術の普及に低侵襲治療センターとしての一層の貢献をしてみたいと思います。

今季の異動は佃講師が昨年10月に岡山市市民病院へ異動となり、消化管外科より岸本講師が低侵襲治療センターへ転属になりました。今春は3月末で浅野助教が三豊総合病院へ異動の予定です。

なお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。(香川 記)

糖尿病センター

当センターでは、「岡山県糖尿病医療連携推進事業」の事務局業務に加えて、平成26年度からは「糖尿病看護認定看護師チーム岡山」と「CDEJ(日本糖尿病療養指導士)チーム岡山」の事務局業務も担当しております。また、岡山大学病院における糖尿病診療では、

多職種によるチーム医療の深化、インスリンポンプ、SAP (Sensor-augmented pump) 療法等の先進糖尿病治療の導入に取り組んでいます。特に2017年2月から開始した肥満外科手術 (腹腔鏡下スリーブ状胃切除術) は、消化管外科、糖尿病内科、周術期管理センター (PERIO) をはじめとした多部門の協力・連携の下、6症例の手術を安全に行い望ましい経過を得ています。本手術は全国でも限られた施設でのみ行われていますが、今後、肥満症治療において当院が中心的な役割を果たせるよう、引き続き取り組んでまいります。

「岡山県糖尿病医療連携推進事業」では、県内における糖尿病医療レベルの向上と医療連携体制の構築および県民への普及啓発を目的とした活動を進めており、平成26年度に新設された「おかやま糖尿病サポーター制度」は、現在までに約1,700名を認定し、認定後も独自のスキルアッププログラムにより知識とスキルの維持・向上を図っています。超高齢社会を鑑み、昨年度より訪問看護ステーションや介護老人保健施設のメディカルスタッフの育成を重点的に取り組み、160名を超える糖尿病サポーターを養成しました。

また、県内で約330の施設が糖尿病総合管理医療機関 (かかりつけ医) として岡山県知事および岡山県医師会から認定されており、かかりつけ医と専門施設との円滑な連携ならびにおかやま糖尿病サポーターも加えた地域密着型の糖尿病診療・連携体制 (「おかやまDMネット」) の構築を推進しています。

最後になりましたが、同窓の先生方におかれましては、引き続きご協力・ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。 (利根 記)

IVRセンター

IVRセンターでは多数科の医師、多職種のスタッフの協力のもと、日々高いレベルの画像ガイド下の低侵襲な治療を行っております。本年も順調に症例を重ねております。

最近の新たな取り組みとしては、循環器内科におけるリードスペースメーカー・multipoint pacingの導入、脳外科における頭蓋内動脈瘤に対するステント治療などがあります。また今年度から新たな臨床試験として、放射線科においてロボットを用いたCTガイド下の生検、MRIガイド下の生検が始まる予定です。

経営的な取り組みとして、稼働率の上昇 (不在時の検査室・麻酔枠の他科利用)、材料費の削減、材料の統一を進めています。また、患者サービスの向上のため、ICルーム内の整備、患者プレパレーションの拡大、

タイムアウトの見直し、患者待ち時間の減少、ホームページの拡充、院内接遇研修の受講を進めています。更に、スタッフの教育・研修として、各種専門医の取得や他院・海外から見学者の受け入れも積極的に行っています。医療安全における対策としては、毎月1回IVRセンター運営会議を開催し、診療科間でインシデント症例などの情報を共有することに努めています。

1月12日には恒例のIVRセンター新年会が行われ、和気藹々とした雰囲気の中、皆で今年一年の更なる飛躍を誓いました。今後もこのチームワークの良さを発揮し、最先端の高度医療を低侵襲かつ安全に提供していきたいと思っております。 (平木 記)

ジェンダーセンター

当センターとしてはGID治療に対する保険適用に向けて、これまで形成外科学会社保委員会を通じて外保連や中医協に継続して申請してきました。また関連4学会や当事者団体と連携して厚労大臣あるいは厚労省などへの働きかけも行ってきました。そしてついに2017年11月29日開催の中医協において厚労省がSRSへの保険適用について提案し、大筋で了承されました。これにより平成30年度の診療報酬改定に合わせてGID治療に対する保険適用が認可される可能性が高くなりました。認可されればこれまで高額な自費診療のため手術を受けられなかった患者さんが保険で手術を受けられるようになり、戸籍の性別を変更できるようになります。またSRSは特殊な疾患であるGIDに対する特別な治療であるという世の中の考え方も変わると思います。いずれにしてもGID患者さんには朗報ですが、現時点では本件はあくまでも中医協において審議中です。GID患者さんにとって喜ばしい最終結果が出ることを待ち望んでいます。

センター人事としては特に移動は無く、精神科医の松本、婦人科医の新井そして私の3名で頑張っています。2018年4月からは国内留学中の形成外科医、櫻井が1年間当センター専属の研修を始めます。

岡山大学病院あるいは関連施設でのSRSは順調に手術件数を伸ばしています。また岡山大学病院では第2例目のMTF音声手術と、第1例目のMTF顔面女性化手術に向けて渡邊が鋭意準備を進めています。沖縄中部病院での手術協力は引き続き行っています。

学会活動として難波は9月に第18回International course on Perforator Flaps (ベルギー・ゲント) でSRSの発表を行いました。2018年3月開催予定の第20回GID学会、第9回GID手術手技研究会ではセンター

スタッフにより複数演題を発表する予定です。

(難波 記)

核医学診療室

核医学診療室では、4名の診療放射線技師が常駐し、SPECT/CT装置2台、SPECT装置2台にて、核医学検査ならびに内照射治療を行っています。平成29年8月から平成30年1月までに、約1400件の核医学検査を行いました。最も多い検査は脳血流シンチグラフィで274件です。次いで骨、リンパ、肺換気・血流、腎、腫瘍・炎症シンチの順となっています。

内照射治療としては、平成28年10月より、去勢抵抗性前立腺癌骨転移に対するRadium-223を用いた α 線治療が開始されています。この薬剤は骨転移を有する去勢抵抗性前立腺癌の患者様が適応となる放射線医薬品・抗悪性腫瘍剤であり、骨転移に対して抗腫瘍効果を示す薬剤として、泌尿器科・放射線科を中心に期待を集めています。

核医学診療室ではその他の放射線同位元素を用いた放射線治療も行っております。子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内用療法、有痛性骨転移に対するSr-89内用療法、悪性リンパ腫に対するY-90標識抗体療法などを継続して行っています。

人事面での新たな異動はなく、引き続き、全ての核医学検査にて放射線科診断専門医がレポートを作成しています。

更に病院施設の放射線安全管理も核医学診療室の重要な役割のひとつであり、放射線取扱主任者を中心として、関連法令の教育訓練や個人放射線被ばく管理などを行っています。

今後とも臨床各科の皆様方のご指導ご協力のほどよろしくお願い致します。(新家 記)

結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石砕石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道的内視鏡下手術や経皮的腎結石砕石

術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石砕石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせる治療を行うことが必要となります。体外衝撃波結石砕石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。

今後も積極的に体外衝撃波結石砕石術を含め、総合的な結石治療を推進してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。(和田 記)

てんかんセンター

伊達勲センター長(脳神経外科)、秋山倫之副センター長(小児神経科)、脳神経外科、小児神経科、精神科神経科、神経内科の神経系診療科および関連診療科・部・病棟が共同して、横断的な診療体制をとっております。

岡山大学病院てんかんセンターには、岡山県のみならず中国四国地方および近畿地方からも多くの紹介患者が受診しており、小児から成人まで、内科的治療から外科的治療まで、包括的な診療を行っております。難治てんかんで外科的治療の適応を検討するてんかん外科カンファレンスは月1-2回の頻度で開催されており、てんかん外科施行件数も着実に増加し、治療成績も良好です。

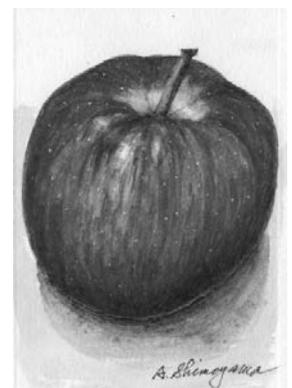
脳神経系病棟(東病棟9階)にある長時間ビデオ脳波専用個室の運用効率が上げられたことにより、長期脳波ビデオ同時記録検査の件数が増加し、より迅速で適切な検査・術前評価を行うことができるようになりました。小児病棟(西病棟2階)での検査件数も順調に増えております。これらの業績により、本年1月の病院新年互礼会で、てんかん脳波モニタリングチームが病院長賞「楷の木賞」を受賞いたしました。

疾患教育・啓発に関しては、10月にてんかん月間のポスター掲示、2月に保育士・支援員を対象としたてんかんセンターカンファレンス(テーマ:てんかん・けいれんと保育・療育)、遠隔地域への出張講義を行いました。学会発表に関しては、2月に開催された全国てんかんセンター協議会総会(開催地:新潟)に小児病棟看護師2名と臨床心理士1名が参加し、発表・討論をして参りました。

今年度は、厚生労働省による3年間のモデル事業である「てんかん地域診療連携体制整備事業」の最終年

度にあたりましたが、来年度以降も事業の継続が決定いたしました。今後もてんかん診療拠点機関としての役割を果たすべく努めていきたいと思っておりますので、同窓の先生方のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

(秋山 記)



下山 敦士

海外への留学者一覧

平成30年4月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留 学 先	期 間
分 子 医 化 学	植 木 靖 好	平 6	University Missouri-Kansas City School of Dentistry, Kansas City, Missouri U.S.A. E-mail: uekiy@umkc.edu	2000. 10～未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7～未定
病 理 学 (腫瘍病理)	高 田 尚 良	平 16	British Columbia Cancer Centre, Vancouver, Canada	2016. 4～未定
疫 学・ 生 学	鈴 木 越 治	平 17	Harvard T.H. Chan School of Public Health, Boston, U.S.A	2017. 4～2018. 9
消 化 器・ 肝 内 科	中 川 裕	平 1	University of Pennsylvania, Philadelphia, U.S.A.	1999. 4～未定
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10～未定
	赤 穂 宗 一 郎	平 19	University of California, Los Angeles, U.S.A.	2018. 4～
血 腫 呼 吸 内 科	武 田 勝 行	鳥大昭59	National Jewish Medical and Research Center, Denver, U.S.A. E-mail: mktakeda@aol.com	2000. 4～未定
	荻 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail: logino8186@gmail.com	2009. 7～未定
	小 山 幹 子	平 12	Queensland Institute of Medical Research, Herston, Australia. E-mail: mokomoko125125@yahoo.co.jp	2009. 2～未定
	藤 井 昌 学	平 14	Beth Israel Deaconess Medical Center Boston, U.S.A.	2015. 4～未定
	藤 原 英 晃	平 18	University of Michigan, Internal Medicine, Hematology and Oncology, U.S.A.	2015. 8～未定
	浅 野 豪	平 18	Dana-Farber Cancer Institute, Boston, U.S.A	2017. 4～
	藤 井 詩 子	平 18	McGill University, Montreal, Canada	2018. 4～
	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9～未定
腎・免疫・代 謝 内 科	勝 山 隆 行	平 19	Beth Israel Deaconess Medical Center, Harvard Medical School, Boston, U.S.A	2016. 9～
	勝 山 恵 理	平 19	Beth Israel Deaconess Medical Center, Harvard Medical School, Boston, U.S.A	
	寺 坂 友 博	平26院	University of California, San Diego Department of Reproductive Medicine, U.S.A.	2015.11(予定)～約3年間
小 児 科	栗 田 佳 彦	平 15	Birmingham Childrens Hospital, U.K	2018. 4～2018. 5
	野 坂 宜 之	平28院	Sinai Medical Center, Los Angeles, U.S.A	2016. 12～2018. 12
消 化 器 外 科	高 木 弘 誠	平 19	Erasmus Medical Center, Rotterdam, Netherlands	2017. 10～未定
	熊 野 健 二 郎	大学院生	Baylor Research Institute, Dallas, Texas, U.S.A	2017. 11～未定
呼 吸 器・乳 腺 内 分 泌 外 科	佐 藤 博 紀	平 21	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A	2018. 4～
	目 崎 久 美	平 22	University of Toronto, Toronto General Hospital, Canada	2018. 4～
整 形 科	藤 原 智 洋	平 16	The Royal Orthopaedic Hospital, Birmingham, U.K	2017. 8～約2年間
	尾 崎 修 平	平 18	National Institutes of Health, Bethesda, U.S.A	2017. 8～約2年間
	中 道 亮	平 19	The Scripps Research Institute, San Diego, U.S.A	2018. 2～約2年間
	山 根 健 太 郎	平 19	University of Miami Miller School of Medicine, Miami, U.S.A	2017. 4～約2年間
泌 尿 器 病 態 学	倉 繁 拓 志	平13院	Cleveland Clinic Lerner Research Institute, Ohio, U.S.A	2017. 7～約2年間
	岩 田 健 宏	平 21	Medical University of Vienna, Austria	2018. 4～約1年間
	有 吉 勇 一	平28院	Columbia University, New York, U.S.A	2017. 7～約2年間
耳 鼻 咽 喉・頭 頸 部 外 科	大 道 亮 太 郎	平29院	The University of Iowa, Iowa, U.S.A	2018. 2～2020. 2
放 射 線 医 学	田 中 高 志	平 20	Mayo Clinic Arizona, Scottsdale, U.S.A	2016. 4～約2年間
産 科・ 婦 人 科	浦 田 陽 子	平 15	Ottawa Hospital Research Institute, Ottawa, Canada	
麻 酔 学	中 平 毅 一	平 9	Brigham and Women's Hospital Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2003. 11～未定
	杉 本 健 太 郎	平 14	Stony Brook University, New York, U.S.A	2017. 3～未定
	佐 野 美 奈 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Toronto, CANADA	
脳 神 經 外 科	島 津 洋 介	平 18	Northwestern University, Chicago, U.S.A.	2018. 4～
総 合 内 科	村 上 和 敏	鳥大平11	Cincinnati Children's Hospital Medical Center, U.S.A.	2016. 4～未定
循 環 器 内 科	斉 藤 幸 弘	平 19	University of Wisconsin-Madison, Wisconsin, U.S.A	2017. 6～未定
心 臓 血 管 外 科	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
	本 浄 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12～未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8～未定

ご寄附いただきました

このたび、二三会（昭和23専卒同期会、代表 安光英二先生）より、鶴翔会に対しご寄付をいただきました。これは、同会の先生方が長年にわたり貴重な活動資金とされてきたものでありますが、このたび会の解散により、鶴翔会のために寄付していただいたものです。

二三会の先生方のご厚意に対し厚く御礼申し上げますとともに、会員各位にご報告申し上げます。

平成29年12月



下山 敦士

平成29年度 Student Doctor 認定式

平成30年1月5日（金）、岡山大学医学部医学科 Student Doctor 認定式がJ-Hallにおいて執り行われました。



平成29年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式

平成30年3月23日（金）、岡山大学学位記授与式が岡山県総合グラウンド体育館で執り行われました。

同日午後、鹿田キャンパスJ-Hallにて関係教授及び多くの保護者の見守る中、医学部医学科の学位記授与式が挙行され、医学部長から卒業生一人一人に学位記が授与され、112名の医学生が学舎から新しい第一歩を踏み出しました。

卒業生の皆様におかれましては、これからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。



第112回 医師国家試験 合格者状況

全国（国公立）の合格状況

	合格率（%）	合格者数	受験者数
全国計	90.1	9,024	10,010
（参考：第111回）	88.7	8,533	9,618

中国・四国地区国立大学における合格状況

大学名	合格率（%）	順位			備考
		中四国（9校中）	国立（43校中）	全国（80校中）	
鳥取大学	91.5	4 (1)	19 (7)	41 (14)	
島根大学	89.2	7 (2)	34 (10)	59 (17)	
岡山大学	94.3	1 (4)	6 (14)	19 (21)	
広島大学	92.0	3 (2)	15 (10)	37 (17)	
山口大学	91.0	5 (9)	23 (34)	46 (56)	
徳島大学	88.1	8 (5)	38 (18)	64 (29)	
香川大学	88.1	8 (7)	38 (27)	64 (43)	
愛媛大学	92.9	2 (8)	13 (31)	32 (50)	
高知大学	90.6	6 (6)	25 (22)	49 (35)	

※（ ）内は、昨年度の順位を表す。

岡山大学の年度別合格状況

試験年月	新卒者	既卒者	受験者	新卒者率		既卒者率		計		順位		備考
				合格	率	合格	率	合格	率	国立	全国	
12. 3	99	16	114	86/98	87.8	13/16	81.3	99/114	86.8	9/43	16/80	(新卒者1名は未受験)
13. 3	100	15	115	98/100	98.0	12/15	80.0	110/115	95.7	6/43	10/80	
14. 3	94	5	99	92/94	97.9	4/5	80.0	96/99	97.0	5/43	9/80	
15. 3	92	2	94	89/92	96.7	0/2	00.0	89/94	94.7	9/43	17/80	
16. 3	98	5	103	89/98	90.8	5/5	100.0	94/103	91.3	20/43	29/80	
17. 2	102	10	112	98/102	96.1	7/10	70.0	105/112	93.8	12/43	20/80	
18. 2	98	7	105	93/98	94.9	4/7	57.1	97/105	92.4	15/43	30/80	
19. 2	98	8	106	93/98	94.9	4/8	50.0	97/106	91.5	21/43	30/80	
20. 2	92	8	100	87/92	94.6	5/8	62.5	92/100	92.0	22/43	36/80	
21. 2	104	7	110	98/103	95.1	2/7	28.6	100/110	90.9	28/43	51/80	(新卒者1名は未受験)
22. 2	94	12	103	87/93	93.5	6/10	60.0	93/103	90.3	24/43	44/80	(新卒者1名は未受験)
23. 2	107	10	116	94/106	88.7	5/10	50.0	99/116	85.3	39/43	68/80	(新卒者1名は未受験)
24. 2	98	20	116	95/98	96.9	12/18	66.7	107/116	92.2	15/43	33/80	
25. 2	95	10	103	90/95	94.7	6/8	75.0	96/103	93.2	8/43	23/80	
26. 2	105	8	113	97/105	92.4	5/8	62.5	102/113	90.3	25/43	46/80	
27. 2	105	12	117	101/105	96.2	6/12	50.0	107/117	91.5	26/43	46/80	
28. 2	115	10	125	109/115	94.8	6/10	60.0	115/125	92.0	18/43	38/80	
29. 2	120	8	128	113/120	94.2	6/8	75.0	119/128	93.0	14/43	21/80	
30. 2	112	12	124	110/112	98.2	5/10	50.0	115/122	94.3	6/43	19/80	

平成29年度卒年次別会費納入状況

平成30年2月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
昭16以前	25	0	0	-	38	60	49	37	76%	6	120	115	54	47%
17	2	0	0	-	39	58	49	32	65%	7	109	95	34	36%
17専	3	1	1	100%	40	62	53	38	72%	8	101	97	33	34%
18	4	1	1	100%	41	74	70	52	74%	9	97	95	35	37%
18専	6	2	1	50%	42	74	72	46	64%	10	105	99	39	39%
19	2	0	0	-	43	80	73	46	63%	11	96	90	32	36%
19専	8	3	0	0%	44	80	72	41	57%	12	99	90	31	34%
20	7	2	0	0%	45	79	75	47	63%	13	100	95	23	24%
20専	9	2	2	100%	46	86	76	53	70%	14	94	76	22	29%
21	8	2	1	50%	47	81	75	57	76%	15	92	81	21	26%
22	6	4	2	50%	48	98	94	61	65%	16	98	79	20	25%
23	19	14	6	43%	49	104	93	65	70%	17	101	83	27	33%
23専	14	9	4	44%	50	77	72	47	65%	18	98	79	22	28%
24	24	15	6	40%	51	109	100	66	66%	19	98	82	26	32%
24専	41	25	12	48%	52	101	94	54	57%	20	91	77	29	38%
25	15	9	6	67%	53	73	67	40	60%	21	104	89	31	35%
25専	47	32	20	63%	54	120	116	69	59%	22	94	89	39	44%
26	20	14	11	79%	55	117	113	69	61%	23	107	98	31	32%
26専	19	10	6	60%	56	108	103	57	55%	24	98	82	21	26%
27	28	23	12	52%	57	126	120	73	61%	25	95	91	32	35%
27専	9	6	2	33%	58	114	107	66	62%	26	105	100	26	26%
28	30	22	12	55%	59	123	119	62	52%	27	105	102	21	21%
29	32	24	18	75%	60	112	106	52	49%	28	114	113	10	9%
30	35	23	19	83%	61	112	106	59	56%	29	120	120	109	91%
31	43	34	21	62%	62	118	111	66	59%	学部卒計 6,257 5,569 2,782 50%				
32	44	30	21	70%	63	129	123	63	51%	備考. 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。				
33	48	40	27	68%	平1	108	99	54	55%	卒年次 会員数 請求者数 納入者数 納入率				
34	59	43	28	65%	2	120	112	58	52%	大学院計 1,233 865 274 32%				
35	64	51	32	63%	3	111	97	55	57%	その他 1,799 1,645 886 54%				
36	52	42	33	79%	4	117	105	54	51%	合計 9,289 8,079 3,942 49%				
37	52	42	28	67%	5	110	106	43	41%					

注：
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。

おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！

鶴翔会会員の先生方には、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げますと共に、平素から岡山大学医学部及び鶴翔会に対して、ご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

鶴翔会では、総会、会報の発行、会員名簿などの同窓会としての一般的な活動だけではなく、医学科学生に関係する大学行事への協賛、3年生授業の医学インターンシップの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動をおこなっております。こうした活動は会員の皆様からの会費に支えられております。会費納入に皆様のご理解ご協力をお願いします。

鶴翔会では多様な会費納入に対応しています。先生方のライフスタイルに合わせてお選びください。毎年お手数を煩わせております手間を省いていただけるものと存じます。

- **会報に同封の払込用紙** ※終身会費または平成30年度会費を既にお支払いいただいている先生には同封しておりません
会報に同封の「払込取扱票」をお使いください（手数料は鶴翔会負担になります）。
下に示す金融機関の口座に直接お振り込みいただいても、また、鶴翔会へお持ちいただいても結構です。
- **インターネット・モバイルバンキング**
先生方がご利用の金融機関のネットバンキング申込をされていまして、デスクのパソコンから、何時でもお振り込みできます。振込口座は下の金融機関の口座となっております。
- **自動引き落としサービスもご用意しています**
毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。手続きをご希望の方は鶴翔会事務局まで、電話・FAX・e-mailなどで、お気軽にお問い合わせください。手続用紙をお送りします。
- **お得な会費制度もいっぱい！**
一時に25年間分の会費（75,000円）を終身会費としてお納めいただきますと以後の会費は納めていただくことはありません。振込用紙の金額欄を75,000に訂正してお振り込みください。
満77歳になられたときは、お申し出により会費が免除になりますので、お申し出ください。

【振込金融機関名、口座番号等】

中国銀行 清輝橋支店 (チュウゴクギンコウ セイキバシシテン)
普通預金 1591434 鶴翔会会費口 (カクショウカイカイヒグチ)

ゆうちょ銀行

※ ゆうちょ銀行からの振込の場合

ゆうちょ銀行 (ユウチョギンコウ) 記号、番号 15410、38020041
鶴翔会会費口 (カクショウカイカイヒグチ)

※ ゆうちょ銀行以外からの振込の場合

ゆうちょ銀行 (ユウチョギンコウ) 店名 五四八 (ゴヨンハチ)
店番 548 番号 3802004
鶴翔会会費口 (カクショウカイカイヒグチ)

【お願い】

- お振込に際しては、同封の払込取扱票により振込金額をご確認いただくと共に、会員番号（払込取扱票の氏名右側の番号）及び氏名を必ず入力してください。
- 鶴翔会会費についてのお問い合わせは、鶴翔会事務局へお願いします。
電話：086-235-7060 FAX：086-235-7052 e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

(公財) 岡山医学振興会より

代表理事
難波正義

桜も終わり、春も半ばになって参りました。同窓の諸先生にはご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は当財団に対しまして、多大なご支援をいただき心から感謝申し上げます。今回は、財団からのお願いを申し上げます。よろしくお願いいたします。

香典返しに当財団へのご寄附のお願い

以前、岡山医学同窓会報でお願いしたことがございますが、あらためてお願いで、香典返しのご寄附を当財団にいただければ幸甚に存じます。その場合、当財団で、ご家族から先方にお送りする挨拶状と、当財団の挨拶状とをご用意いたします。その挨拶状の例を以下にお示します。

A. 喪主が送られる挨拶状の例（財団が送付）

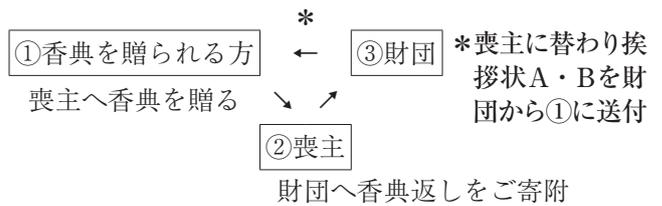
謹啓
先般〇〇永眠に際しましては、ご鄭重なるご申意ならびにご芳志を賜り、誠にありがたく厚くお礼申し上げます。
お蔭をもちまして、このほど〇〇大姉49日忌法要を滞りなく相営み忌明けいたしました。つきましては、甚だ勝手ではございますが、ご芳志の一部を公益財団法人岡山医学振興会に寄附させていただき、お礼にかえさせていただきました。何卒ご諒承賜りたくお願い申し上げます。
まずは略儀ながら書中をもちまして謹んでご挨拶申し上げます。
謹白
喪主 〇〇 〇〇

財団へのご連絡は、難波（090-9411-8477）にいただければ幸いです。月曜日、金曜日は、財団事務室086-235-7067でも結構です。

B. 財団が送る挨拶状の例

拝啓
このたび故〇〇様のご遺族様より、当財団に対しまして多額のご寄附をいただき深く感謝いたします。
当公益財団は、岡山県内の医療に関する教育・研究の助成、医学に関する教育研究機関および地域社会との連携・交流事業、医学の発展に対する国際交流助成、市民講座などを行っています。
皆様のご芳志に対し、これらの助成活動をさらに推進することでお報いさせていただきたいと存じます。
ここに故人のご冥福をお祈りいたしますとともに、謹んでお礼申し上げます。
敬具
(公財) 岡山医学振興会
代表理事 難波正義

以上の説明を図示すると



クリスマスカードを選ぶ

毎年12月になると、外国の知人に送るクリスマスカードを買いに出掛ける。けばけばしくない日本的なものを選ぶが、もう一つ注意していることがある。

それは、そのカードに書かれている文面である。いろいろの文面があるが、大きく分けると、「Happy Christmas and a Happy New Year」のようにクリスマスの言葉が入るものと、「Season's Greetings and a Happy New Year」のようにクリスマスの言葉がない2系統である。私はいつも後者のカードを選んでいる。と言うのも、外国人だからといって、必ずしも、キリスト教徒ではないからである。

私は、若い頃一時、米国に住んでいたが、周りは、キリスト教徒のみならず、ユダヤ教徒、回教徒、仏教徒、ヒンズー教徒などいろいろである。クリスマスにユダヤ教徒の知人を訪ねたことがあるが、平生と何も変わったことはなかった。キリスト教徒以外の人に、キリスト教徒でもない私が、「Merry Christmas」と言うのは、何か間が抜けた感じもする。

そのようなわけで、毎年送るカードは、「Season Greetings」の類を私は選んでいる。

宗派のことはともかく、彼らはクリスマスシーズンにカードをもらうことは嬉しいらしく、ユダヤ教徒の人も受け取った多くのカードを飾って喜んでいた。とにかく、年賀状やクリスマスカードは、洋の東西を問わず、我々が喜びや悲しみを交流できる手段のひとつであることは間違いない。

昨年末、カードを買いに出掛けたが、残念なことに私が考えるようなカードの種類は大変少なく、ほとんどが「Merry Christmas」入りで、戸惑った。

グローバル化が毎日あちこちで聞かれるが、世界の文化に根差したグローバル化から、いまの日本の社会は遠ざかっているのではないかと心配である。(2018-3-12)

岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長 金澤 右
 副病院長〔診療(医科)担当] 尾崎 敏文
 同〔教育(医科)・企画担当] 大塚 文男
 同〔研究(医科)・国際担当] 藤原 俊義
 同〔医療安全担当] 塚原 宏一
 同〔総務・運営担当(兼)防災担当] 伊達 勲

平成30年4月1日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長	教育医長
内 科	総 合 内 科	大 塚 文 男	花 山 宜 久	小比賀 美香子	谷 山 真規子	長谷川 功	小 川 弘 子
	消 化 器 内 科	岡 田 裕 之	高 木 章乃夫	加 藤 博 也	岩 室 雅 也	平 岡 佐規子	原 田 馨 太
	血液・腫瘍内科	前 田 嘉 信	松 岡 賢 市	大 橋 圭 明	西 森 久 和	淺 田 騰	遠 西 大 輔
	呼吸器・アレルギー内科	木 浦 勝 行	松 岡 賢 市	大 橋 圭 明	西 森 久 和	市 原 英 基	遠 西 大 輔
	腎臓・糖尿病・内分泌内科	和 田 淳	佐 田 憲 映	稲 垣 兼 一	中 司 敦 子	北 川 正 史	木野村 賢
	リウマチ・膠原病内科	和 田 淳	佐 田 憲 映	稲 垣 兼 一	中 司 敦 子	北 川 正 史	
	循 環 器 内 科	伊 藤 浩		吉 田 賢 司	三 好 亨	渡 邊 敦 之	更 科 俊 洋
	神 經 内 科	阿 部 康 二		山 下 徹	武 本 麻 美	佐 藤 恒 太	山 下 徹
	感 染 症 内 科	草 野 展 周					
外 科	消 化 管 外 科	藤 原 俊 義	白 川 靖 博	吉 田 龍 一	寺 石 文 則	野 間 和 宏	
	肝 胆 膵 外 科	八 木 孝 仁	榎 田 祐 三	吉 田 龍 一	榎 田 祐 三	枕 瀬 崇	安 井 和 也
	呼 吸 器 外 科	豊 岡 伸 一	大 藤 剛 宏	山 根 正 修	宗 淳 一	山 本 寛 斉	杉 本 誠 一 郎
	乳 腺 ・ 内 分 泌 外 科	土 井 原 博 義	平 成 人	山 根 正 修	枝 園 忠 彦	枝 園 忠 彦	池 田 宏 国
	泌 尿 器 科	那 須 保 友	渡 邊 豊 彦	和 田 耕 一 郎	谷 本 竜 太	小 林 泰 之	荒 木 元 朗
	心 臓 血 管 外 科	笠 原 真 悟		小 谷 恭 弘	新 井 禎 彦	黒 子 洋 介	大 沢 晋
	小 児 外 科	野 田 卓 男				谷 本 光 隆	尾 山 貴 徳
	小 児 心 臓 血 管 外 科	笠 原 真 悟					
	緩和・支持医療科	松 岡 順 治					
感覚・皮膚・運動機能科	整 形 外 科	尾 崎 敏 文	西 田 圭 一 郎	島 村 安 則	遠 藤 裕 介	古 松 毅 之	宮 澤 慎 一
	形 成 外 科	木 股 敬 裕	難 波 祐 三 郎	松 本 洋	渡 部 聡 子	渡 邊 敏 之	徳 山 英 二 郎
	皮 膚 科		山 崎 修	平 井 陽 至	川 上 佳 夫	三 宅 智 子	加 持 達 弥
	眼 科	白 神 史 雄	松 尾 俊 彦	濱 崎 一 郎	塩 出 雄 亮	細 川 海 音	平 野 雅 幸
	耳 鼻 咽 喉 科	西 崎 和 則	假 谷 伸	片 岡 祐 子	菅 谷 明 子	丸 中 秀 格	野 田 洋 平
脳・神経・精神科	精 神 科 神 經 科	山 田 了 士	寺 田 整 司	川 田 清 宏	井 上 真 一 郎	酒 本 真 次	
	脳 神 經 外 科	伊 達 勲	黒 住 和 彦	安 原 隆 雄	菱 川 朋 人	亀 田 雅 博	平 松 匡 文
	麻 醉 科 蘇 生 科	森 松 博 史		賀 来 隆 治	松 岡 義 和	松 崎 孝	賀 来 隆 治
小 児 ・ 周 産 ・ 女 性 科	小 児 科	塚 原 宏 一	岡 田 あゆみ	馬 場 健 児	吉 本 順 子	近 藤 麻 衣 子	
	小 児 循 環 器 科	大 月 審 一					
	小 児 神 經 科	小 林 勝 弘	秋 山 倫 之	秋 山 倫 之	遠 藤 文 香	秋 山 麻 里	岡 牧 郎
	小 児 血 液 ・ 腫 瘍 科	塚 原 宏 一					
	小 児 麻 醉 科	岩 崎 達 雄					
	小 児 放 射 線 科	新 家 崇 義					
産 科 婦 人 科	増 山 寿	中 村 圭 一 郎	鎌 田 泰 彦	小 川 千 加 子	中 村 圭 一 郎	衛 藤 英 理 子	
放 射 線 科	放 射 線 科	金 澤 右	平 木 隆 夫	生 口 俊 浩	富 田 晃 司	片 山 敬 久	正 岡 佳 久
救 急 科	救 急 科	中 尾 篤 典	内 藤 宏 道	内 藤 宏 道	塚 原 紘 平	湯 本 哲 也	飯 田 淳 義
病 理 診 断 科	病 理 診 断 科	柳 井 広 之		都 地 友 紘			谷 口 恒 平

鶴翔会会報 投稿内規

項 目	字数（程度）	内 容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部（病院）の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1,600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1,600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1,600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2,000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1,600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
挿絵		(原則として白黒での掲載となります)

1. 字数はあくまで目安です。
 2. 4月号のメ切は2月中旬、10月号のメ切は8月中旬です。
 3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないとされるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
 4. 原稿、挿絵はデータ（一太郎、word、JPEG等）にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。
- ※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052

E-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

編 集 後 記

鶴翔会会報第124号をお届けします。

今冬は記録的な寒さ（冷たさ）でしたが、同窓の先生方にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。春が近くなったら急に記録的な温度となり、桜の便りも例年より早くなったようです。

今春、112名の元気な卒業生が学び舎を巣立ちました。地域に根差し医療を支えつつ世界で活躍する医療人に育っていることを期待しています。鶴翔会の先生方のご指導をよろしく願います。また、澁刺とした115名の新入生を迎えました。岡山医学の伝統を引き継いで次代を担う岡山育ちの医療人に成長してくれることを願っています。

岩月教授が定年を迎えられました。長年医学部にご尽力いただき、ありがとうございました。引き続き、ご指導ご支援のほどよろしく願います。

医学部創立150周年の節目の年まで後2年となりました。皆様からのご支援で実現出来ました旧生化学棟第1期改修工事及び入院棟11階のFloor150は大変好評を得ています。皆様のご芳志、誠にありがとうございます。旧生化学棟大講堂の改修計画が事業として準備が進められています。皆様の変わらぬご支援のほどよろしく願います。

最後になりましたが、私自身もこの度数々の思い出を残して医学部を去ることになりました。この数年は編集委員長を担当させていただき、会員の皆様には本当にお世話になりました。鶴翔会及び会員の皆様の益々の発展とご活躍をお祈りいたします。お世話になりました。ありがとうございました。

松井秀樹

発 行 鶴翔会（岡山医学同窓会）
会報幹事 松井秀樹
鶴翔会会報編集委員 阿部康二、
大塚愛二、加藤宣之、木浦勝行、
伊達 勲、土居弘幸、西崎和則、
楨野博史、松井秀樹、柳井広之
電 話 (086) 235-7060・7061
F A X (086) 235-7052
E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mdosokai/>
印 刷 友野印刷株式会社
電 話 (086) 255-1101
F A X (086) 253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。

鶴翔会会員向けサービスのご案内

○ 岡山大学勤務医師責任賠償保険について

鶴翔会では会員の方を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。ご案内パンフレットを鶴翔会ホームページに掲載していますが、ご希望の向きにはご連絡いただければお送りいたします。

特徴、メリット

- ※ 個人で加入するよりも保険料が20%割安
- ※ 契約期間中に勤務先が変わっても有効
- ※ 契約は1年更新

加入を希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局 TEL:86-235-7060、7061 FAX:086-235-7052
e-mail: dosokai@md.okayama-u.ac.jp

○ クレジットカードサービスについて

鶴翔会では、三井住友トラスト・カード(株)と提携して、ステイタスの高い「VISAゴールドカード」サービスを行っています。開業されている会員の先生は、従業員の方もサービスの対象です。入会ご希望の方は、カード会社へ直接お申し込み下さい。

三井住友トラストVISAゴールドカードサービスをお手軽に!!

 **VISA ゴールドカード**
通常年会費 税抜10,000円+税が **税抜2,500円+税**

 **ロードサービスゴールドカード**
通常年会費 税抜11,000円+税が **税抜3,000円+税**

別途ETC年会費 税抜500円+税 (初年度無料。1年間に1回以上のETCご利用請求があれば次年度も無料です。)

ゴールドカード + ロードサービス + ETC (初年度年会費無料)

割引は2年目以降も続きます。どちらのカードも、ご家族会員年会費は税抜1,000円+税です。

- ・ゴールドサービスセレクト (情報誌「VISA」郵送サービスまたは個人賠償責任保険を選択) は適用外となります。
- ・ご入会にあたっては、カード会社所定の審査があります。

主なサービス

- ①紛失や盗難にも安心の「**会員保障制度**」
 - ②年間500万円までの「**お買物安心保険**」
 - ③死亡・後遺傷害だけでなく、病気やケガも幅広くカバー。日本出国から3ヶ月間、何度でも自動付帯の「**海外旅行保険**」
 - ④公共交通乗用具 (鉄道・バス・タクシー等) 乗車中の事故や宿泊施設宿泊中の火災事故を補償する「**国内旅行保険**」
 - ⑤お車のトラブルにも安心。緊急宿泊・帰宅費用サポートも付帯の「**ロードサービス**」 (ロードサービスゴールドカードのみ)
- ※各種保険サービスやロードサービスの記載内容はあくまで概要であり、詳しくはカードと同送の「保険ご利用の手引き」「ご利用ガイド」等にて必ずご確認ください。

詳しい資料・お申込書のご請求は 三井住友トラスト・カード (株) まで

◆お電話 0120-006-542 (通話料無料) ◆メール : Osaka_Info@smtcard.jp

右のコードを読み取るとメールが立ち上がります。氏名・ご住所・日中ご連絡先・提携先 (鶴翔会さま)・家族カードご希望有無 を記載の上お送りください。

必ず「鶴翔会会員」とお伝えください。担当 大阪営業推進部 立川・今井 受付 09:00~17:00 (土・日・祝日・12/30~1/3除く)



裏表紙の写真

Jホールの建設に伴い撤去を余儀なくされていた成層圏飛行に関する医学研究 (昭和18年) の実験中に殉職された藤田茂、西崎良虎両先生の殉職碑が、旧生化学棟南側の桜花の下に整備されました。



鶴翔会

岡山医学同窓会報